
【Valiant】

くろくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Valiant】

【Nコード】

N3453B

【作者名】

くろくま

【あらすじ】

冒険活劇・格闘ファンタジー！妖魔の蔓延る邪悪な世界。保護者と共に世界を巡る、戦鬼と呼ばれた少年の旅……

ブローグ

双刃の戦鬼――

それは、対の刃を振るい対象を殲滅^{センメツ}する、鬼の眼を持つ羅刹^{ラセツ}の称号。

それは、悪名高き伝説の逆賊……

ギルドにて、彼のその二つ名を知らぬ者など、存在しない。

しかし同時に、彼の真の名前を。そしてその姿を知る者もまた、存在しない。

彼の存在、それ自体が禁忌^{キンギ}として扱われた。ギルドは、彼に関わる全て闇に葬ったという。

その逆賊が処刑されたと、噂が広まってからまだ1年足らず。

だが当然、その死を確認した者など、誰一人として存在しない。

存在するのは、それ以後。辺境の各地で泡沫ホウマツの如く現れては消える、彼の軌跡キセキとその噂だけ。

彼は生きて、今もこの世界の何処かを彷徨サマヨっているのだろうか。

この妖魔の蔓延ハムコ、血塗られた邪悪な世界の、何処かを……

第一話・双刃の戦鬼「0」

陽が沈み、闇が訪れると、遠方から妖魔の呻き声^{ウメ}が響き渡る。
人々は皆、日没と共に埒^{ネグラ}へ閉じ籠^{コモ}り、町は冷たい静寂に包まれた。
そして人気のない夜の街中では、その化け物の鳴き声は不気味な
ほどに恐ろしく聞こえる。

それはこの辺境の、人口8千人程度の町 《リユーネ》において
も、例外ではない。

宵の口。町の中央に聳^{ソビ}え建つ、巨大な領主の館で起きた強襲事件。
それが、異変の始まりだった……

「何者だ！」という呼び掛け。と、その後悲鳴を上げて倒れる門番
達。

月も姿を晦ます暗夜。2メートルはあろう巨体の男が突然、その
館へ押し入ったのだ。

その男は館の壁や塀を、爆音と共に無残にも破壊。正面から館内
へ堂々と足を踏み入れた。

そんな彼の手には、それぞれが紅^{アカ}と蒼^{アオ}の不気味な光を放つ。二対
の巨大な片刃の剣が握られていた……

男は見回りの衛兵を薙^ナぎ払いながら階段を進み、一直線に領主の
寝室を目指した。

その強さは人並み外れていた。護衛の兵士が槍で武装し、束にな
って向おうとも、彼等は弾き飛ばされた。なす術^{スベ}もなく。

更に何やら、握られた二対の刃から特殊な力が発せられた。と、生き残った兵が証言している。

そして領主の部屋の、巨大な扉が轟音ゴウオンと共に蹴破られた。

「なっ、何だ？ 貴様は、何者なんだ？」

寝巻き姿のままその男と対峙した領主がそれに驚愕キョウガクし、恐怖に震えた声で叫ぶ。

恐らく、自室まで侵入を許したことなど、ただの一度も起こり得ぬ。それ程に万全の体制を敷いていたのだろう。

しかしまるで役には立たなかったようだ。強固な造りの屋敷も、多数配備した兵士も。

だが既に異変を察知し、この館の警護を勤めていた《ハンター》が数名、彼を囲うようにガードしていた。

その様を眺めつつ、領主のその問いに、双刃の男は低く太い声で答えた。

「なに、そのボンクラどもの代わりに、俺を雇って頂こうと思つてな」

暗闇の中、その面を拝むことは困難だろう。しかし領主は、不適な笑みを浮かべる男の緩んだ口元を確認した。

駆け付けたハンターの、リーダー格と思われる一人が前へ出る。

その体格の良いオールバックの男が、ずっと口を開いて言った。

「馬鹿が、俺はCクラスのハンターだ。何を考えてるかは知らんが、さっさと死んで貰おう」

Cクラスと言え、ギルドの中でも限られた者しか資格を与えられない、中級にランクされる言わばエリートだ。

その身体から発せられる威圧感もなかなかのモノである。

他のハンター等も自信からか、クスクスと笑い声を漏らしていた。

「ハンターの力、存分に味わうが良い」

そして彼は背に身に付けていた長槍を手に構え、部下へも指示を出した。

その指示を聞き部下達もまた、各々の得物を構え、瞬時にその男を取り囲んでいった。

「はんだー、か。ふん、その肩書きだけで、大した力も持たないのに、今まで散々甘い汁を吸ってきたんだ。そろそろ俺と代わって貰おうかあ？」

賊ゾクの男もその言葉を言い終えると、手に握った二対の刃を構えた。

紅と蒼の鈍い光が刃を包み、その剣がゆらりと闇に揺れ動く。

「双刃の戦鬼。その二つ名を——知っているか？」

数日後ギルドの支部へ、リユーネの領主を警護するハンター達は皆殉職した、との通知が送られた。
ジュンシヨク

もう、1週間も前の話である。

第一話・双刃の戦鬼「1」

晴天の空、高く上った太陽の強い日差しが地面を照りつける。
見渡す限りの広大で不毛な大地。大型の薄汚れた馬車3台が、多くの人を乗せて荒野を駆け抜けた。

1台あたり20人は収容しているだろうか。その簡素な造りの馬車は、乗客の大半が町々を転々と巡る旅人か、あるいは故郷を追われ他の町へ逃げ延びた難民であろう。

多くの財を持つ裕福な者。そして商いを行う者等は皆、もっと堅固で立派な、安全性の高い馬車を利用するのだから。

馬車は土煙を上げ、町と町を繋ぐ導なき道を颯爽と駆けて行った

……

耳に流れる規則的な馬蹄パティの快音と、歪イビツな車輪カナが奏でる不規則な回転音。

この木製の馬車の床はやや清潔感に欠け、砂や埃ホコリに塗れていた。それは多くの人間が土足で踏み入れるから。そして粗い造りのため、外の空気が隙間から入り込んだからだろう。

床へ直に腰掛けると、お尻の部分がひんやりとする。流れ込む風も、さして温かさを感じない。

そのためか乗客の多くが、身体を寄せ合い常にその身を震えさせていた。

だがその震えの原因は、微かな寒さだけではないだろう。皆は何

時危険な《妖魔》に襲われるか解らない不安に駆られ、落ち着きを失っていた。

しかしその中で、悠悠^{ユウユウジテキ}自適にも壁に寄りかかり、黙々と読書を続ける男の姿があった。頬^{ホオ}に一筋の大きな傷を負った、金髪の青年だ。そしてその青年に纏^{マト}わり彼の読書を妨害する、右目を眼帯^{オオ}で覆った銀髪少年が目に残った。

二人とも同仕様の漆黒の上下に、それぞれ少年は赤味^{ガイトウ}がった外套を。青年は青がかったロングコートを纏^{マト}っている。

非常に仲も良さそうなのだが、その顔立ちは対照的だ。外見上、とても血の繋がった兄弟には見えない。

少年の外套の隙間からは、その幼い容貌^{ヨウボウ}に似合わぬ対の剣が姿を現す。

周囲の人間は当初、恐れからか彼等と距離を置いて座っていた。

しかしそんな彼等の言動からは、周囲が予想しているような緊張や威圧を感じることは無かった。

次第に他の乗客等も、そんな彼等の様子を見て、場を和ませ始めていた。

「ねえクリフ、おなかすいたあ」

「ああ、そうだな」

少年は青年の腕にしがみ付き、彼の身体を前後に揺さぶる。そして猫撫^{ネダ}で声で強請^{ネダ}りついた。

年齢に見合った、高く女性にも引けを取らぬ美声を発する彼。い

や、顔立ちも女性のそれに劣らぬのだから、勘違いをする輩^{ヤカラ}が現れても不思議ではない。

しかし、間延び^マした、何とも締まりのない声だ。まるで飼い主に甘える小動物のようだ。

一方クリフと呼ばれた青年は、そんな少年の行動には目も暮れない。精悍^{セイカン}な顔を崩さず、空返事でその場をやり過ごしていた。のだが……

「ねえクリフう、ひまあ！」

「……ああ」

少年は、そのクリフと呼んだ青年の、長く後ろで束めた金髪を解き始めた。どうにも悪戯^{イタズラ}が好きらしい。

次第にクリフの美しい髪は少年によって結び直され、みるみるうちに可愛らしい三つ編みへと変貌させられてしまった。

流石に気高い雰囲気を持つ彼に、この髪型は似合わない。

しかしクリフは、それでも動じなかった。パツと彼の腕を振り解き、片手で本を持ちながらも、まるで何事も無かったかのように己の髪を直す。そして再び読書に没頭した。

「ねえクリフってばあ、あそぼうよぉ」

「……………」

クリフは完全に沈黙した。

だが、それでも諦めぬ少年は、なんと彼の両目をその小さな手で覆い隠した。どうにかしてクリフの読書を妨げたいのだろ。必死の様子が窺^{ウカガ}える。

そしてその後も、彼の頬へ手を触れたり、コート^{メク}を捲りその中へ

侵入したり。と、年頃の少年らしく遊びに熱中していた。

傍^{ハタ}から見れば微笑^{ホホエ}ましい光景ではあるのだが。

顔を顰^{シカ}め、怒りに身体を震わせていたクリフの拳が、少年の頭部へ勢い良く激突するのにそう時間はかからなかった。

「いい加減にしないと殴るぞ、ウィル」

「いつたいなあ。もう殴ってるよお」

するとウィルと呼ばれた少年は涙目で、その殴^{サス}られた頭を擦った。そして、しゅんと落ち込んでその場に座り込んだ。

とは言え、相手をしてもらえて嬉しそうな表情をしている、様に見えなくもない。

周囲からクスクスと笑い声が聞こえるのだが。彼等はそのまま馬車の中で、次の目的地である《リユーネ》の町を目指していた……

説明が遅れたが、銀髪眼帯の少年の名はウィリアム・フォーガス、8歳。そして金髪長身の青年の名はクリフォード・スレイター、23歳。

年の離れたこの2人は、辺境の町々を放浪するフリーの傭兵コンビである。

そう言えば、ウィル等が乗り込んだ馬車は最後尾。出発時確認したのだが、先頭の馬車には厳^{イカ}つい顔の輩が待機している。露骨なまでにかたぎの人間とは思えぬ男達が乗り込んでいた。各々に武装した数名の男が、大きな態度で構えていたのを目撃している。

彼等は《ハンター》と呼ばれる、言わばプロの傭兵だ。

妖魔が世界各地で猛威を振るう現在。少数の、しかもこのような造りも貧弱な馬車では奴等の襲撃には耐えられない。

なす術もなく皆殺しにされるであろうことは目に見えている。

故に、難関とされる資格試験を突破した彼等に、その護衛を引き受けて貰うわけだ。これはもはや、世界の常識とされた。

彼等には法外な護衛料を支払わなくてはならないのだが。

とは言え。恐らく、この馬車の護衛を勤めるのはそのハンターの中でも最下級の者。Eクラスの人間であろう。

クラスの上昇に比例して報酬も高額になるのが原則。そのため3台の馬車では彼等を雇うのが限界、というわけである。

尤も、最下級^{モット}とは言っても、その戦闘能力は常人のそれを遥かに凌ぐ^シのだから文句など言えない。

妖魔さえ存在しなければ――

力を持たぬ一般人が、口を揃えてその言葉を発する理由も解るであらう。

この世界では、人間も所詮他の生物と同じ、万物の霊長になり得ぬのだから。

第一話・双刃の戦鬼「2」

あれから数時間。クリフに構ってもらえなかったウィルは暇に耐え切れず、大人しく床に蹲^{ウスクマ}った。

そして結局、拗^ヌねながら眠りに落ちてしまう。

スースーと寝息を立て、クリフに凭^{モタ}れかかって眠る幼い姿。それは何とも愛らしい。

まるで、天使か。色白の、多少赤味を帯びた頬は、触らずともその柔らかさを実感できる。その顔に、黒く蔽^フつゝい眼帯はあまりに似合わないが、それでも余りある可憐さだ。

得物を腰に携え、傭兵業を営んでいるとは到底考えられない光景だった。

「……ん？」

暫^{シバ}らくすると何かを感じたのか、クリフが今まで黙々と続けていた読書を一旦止めた。そして本をパタンと閉じて顔を上げた。

すると、それと同時に突然馬の鳴き声が響き、車体が大きく揺れて傾いた。当然、中の乗客等は総じて体勢を崩す。

皆が何が起きたのかも解らず、絵に描いたような混乱を見せた。

そしてその揺れは次第に激しくなり、仕舞いには、馬車はその場で急停止してしまう事態に陥った。

あまり考えたくないが、冷静に状況进行分析すれば外で何が起こ

ろうとしているのか。それは自ずと解るであらう。

妖魔が現れたのだ、と。

「んん……ん？ あれえ、なにかおきたの？」

その衝撃で目を覚ましたウィルは、眠い目を擦りながら周囲を見回した。

乗客の顔は恐怖に包まれ、皆で固まりながら馬車の中央で震えている。

皆が脅えるのも無理はない。周囲では何やら、シヤアシヤアと何かが擦れるような、そんな気味の悪い音が四方から聞こえてくるのだから。

可能性は重々承知してはいたのだろうが。しかし現実として直面した恐怖に、身体が竦んでいた。

「いや、何でもない。煩くなるからお前は眠っている」^{ウルサ}

そんな状況に陥つてもクリフは、壁に凭れ掛かったまま何ら行動を起こそうとはしない。

そしてなんと、再び本を開き読書を始めてしまった。大胆不敵、その言葉が彼には良く似合う。

「ふえ？ なにかあったんじゃないの？」

クリフに注意されながらもウィルは、大きな欠伸をして背をグツと伸ばした。^{アクビ}

そしてやはり外が気になるらしく、窓から周囲の様子を覗き込む。

案の定、馬車は既に妖魔に取り囲まれていた。

人間よりなお、敏感に異形なる化け物を感じ取った馬達。彼等は、

暴れることはおろか、鳴き狂うことすら適わずその場に立ち竦んだ。

因みに今馬車を襲っている妖魔は、外観は緑色の、昆虫に近い。

一言で表現するのならば、巨大な蠅螂カマキリの様な生物だ。

巨大な鎌カマの様な腕を持ち、緑色の目玉が何とも不気味な妖魔である。

先程から聞こえてくるあの不快な音。あれはその妖魔の口の、牙の様な器官の摩擦マサツが発生要因らしい。彼等はよほど腹を空かせているのだろう。

食料を得るため、人間を襲うのは当然の行為と言える。奴等は数十匹の群れで行動しているらしく、残念ながら逃げ道はない。

尤も奴等モットは最下級の妖魔で、ギルドに属するハンターならさして手間取らない相手だ。

無論、相手が単体ならば、の話だが。

余談だが、妖魔のルーツは謎に包まれている。その種族、属性は統一性に欠け、特に上級のもの是非常に強い個性を持っていると聞く。

奴等の、人間への脅威の大きさに応じて、大まかな分類別けはなされている。ただ、その全貌ゼンボウは明らかにされてはいないのが現状だ。

どちらにせよ、人間は捕食される側の存在であり、彼等は自らの生活を脅かす恐ろしい生物であることに変わりはない。

しかし、こういった現場を目の当たりにすると、ハンターの必要

性を再認識させられる。

最下級の妖魔といえど、一般人ではいかに武装をしようとも奴等に太刀打ちできないのだから。

この世界、強固な外壁で周囲を覆われている《町》の中以外に、安全な場所など存在しないのである。

「うわあ、虫。虫にかこまれてるよ？ クリフう」

外を確認したウィルは再びクリフの横に座り込み、ゾクゾクッとその身を震わせた。不気味な化け物を目の当たりにし、背筋に悪寒でも走ったのであろう。

「だから眠っていると言っただろう。それとも何か。暇潰しに、外の連中の加勢に向うか？」

クリフがふうと溜め息を付きながら、ウエルの頭に片手を置いた。そして力一杯髪の上からぐりぐりと彼の頭を押さえ込んだ。

「僕、虫はきらい……」

ウィルはふん、と彼から顔を背け、唇を尖らせた。へそを曲げて、クリフから顔を逸^レらしている。

それはそうとして。この幼い少年が、全くとって良いほど恐怖心を表わさない。大人ですら震え上がる妖魔を前に。

これはさぞ、周囲の人間には不可思議に思えたことだろう。

「どうせ最下級の雑魚妖魔だ。外の連中だけでも十分だろう。無駄な労力を使うことはない」

外では、雇われたハンター達が各々の得物を構え、妖魔の群れと

壮絶な戦闘を繰り広げていた。

そんな中この2人は、緊張感の欠片も感じ取れない、ほのぼのとしたやり取りを続けていた……

数分後であろうか。この馬車の中に、女性の甲高い叫びが響いたのは。

馬車の後部、出入り口に当る部分から一匹の妖魔が中に侵入しようとしたためである。

乗客は騒然とし、我先に少しでも妖魔から距離を置こうと、ギリギリまで馬車の奥へ奥へと移動する。

緑色の昆虫型の妖魔は、その巨大な鎌に似た前足を振り回して扉を破壊。そして少しずつその身体を馬車の中へと進めていった。

シャアシャアという昆虫特有の泣き声。恐怖は勿論のこと、その姿を見ただけでも全身に鳥肌が立つ。

馬車中の混乱は極限にまで達していた。

「はぁ……」

するとクリフが、大きな溜め息と共に右手をコートの内側、腰の辺りにすつと回した。そして中から何やら黒いL字型の道具を取り出し、構えた。

重厚感のある、金属製と思われる黒い得物だ。

そして一呼吸置き、

「……消える」

その言葉と共に、座ったまま腕を伸ばし、その道具の先を化け物に向ける。

しかし彼はまだ片手で本を読み続けており、妖魔のいる方向など目も向けようとしない。

荒い息遣いと共に迫り来る妖魔を前に、皆がクリフの不可解な行動に目を奪われた。

まるで時が止まったかのように。恐怖も相俟^{アイマ}ってか時間がゆっくりと流れるように感じたという。

その妖魔もクリフの異様ともいえる雰囲気、威圧を本能で感じ取ったのか、彼の方向へ視線を送った。

そして緑の巨大な双眸^{ソウボウ}で彼を捉えつつ、じりじりとその距離を詰めた。

だが彼はそのままゆっくりと、手に握った得物の引き金を引いた

……

——バン！

場内が再び、騒然とした。

乾いた、鋭い爆発音が発せられるのと同時に、照準の先にいた妖魔の頭が一瞬で吹き飛ばされたのだから。

そして大量の紫色の粘度の高い血液を飛散させながら、頭を粉々に消し飛ばされた妖魔。それはバランスを崩し、馬車の外へと転がりながら息絶えていった。

状況を把握した者が何人いるだろうか。凄惨^{セイサン}な光景を前に、他の客等^{オソノ}はただただ恐れ慄^{オソノ}くだけだ。

「まったく、外の連中は何を遊んでいる。あんな雑魚相手に」
「あゝあ、むだ使いしちゃったね。もつたいないなあ、もう」

ちつ、と舌打ちをして、その武器を腰に戻すクリフの表情は険しい。しかしそれとは対照的に、ウィルの顔はにんまりと綻^{ホコロ}びた。

彼が使用した武器は《銃》と呼ばれる特殊な兵器だ。その弾丸は一発でも非常に高価な代物なのだから、クリフが憤^{フンガイ}慨するのも無理はない。

筒先から煙を吹く黒い得物。ハンターでも下級の者はその存在を知らぬという幻の兵器だ。

失われた太古の先端技術。クリフが得意とする《魔考学》を応用させた代物だろう。どちらにせよ、一般人が知り得る存在ではない。

「ふん。あんな汚らわしい化け物に触れるのは御免だ。それとも、アレはお前が始末してくれたのか？」

そう冷静に嫌味を返すクリフ。彼は相も変わらず、その硬い表情を崩さなかった。

のだが、先程から冷静なはずの彼言動に、何故か奇妙な違和感を覚えるのが不可解でならない。

焦り、というより、何かしらの動揺を隠そうとしている。そう表現すれば適切であろうか。

「……何だ、ウィル。その顔は」

ブーイングを発するとはかりに不満そうな表情でクリフを見つめるウィル。そして彼は口元を緩ませてボソツと嘆^{ナゲ}いた。

「虫、本当は自分だってダメなくせにい」
とのことだ。

なるほど、雑魚妖魔相手にわざわざ高価な銃弾を使用した理由も、それならば納得が行く。

「何か言ったか……？」

「う、うう……僕はもう、ねるっ」

ピクツと眉間に皺シワを寄せ、額に怒りの印を作るクリフを横に、ウィルも不平がましく不貞寝フテネを始めた。

全ての妖魔が始末され外での戦闘が終了するのは、この約15分後。

その間、そしてその後もずっと、機嫌を損ねたウィルは、本当に再び寝息を立て、クリフも読書が続けたという。

そして馬車はその後、無事に運行を始め、2時間後にはリユーネの町に到着した。

第一話・双刃の戦鬼「3」

リユーネの町。この町は人口8千人の、辺境にしては大規模な町である。

首都 《アヴァロン》とその周辺には、人口が数十万人を超える巨大な都市が存在する。しかし辺境では数百人単位の、もはや集落と呼ぶべき程に小さな纏りマツマも少なくないのだ。

まあ、この町は活気があり、比較的栄えている部類に入ろう。表通りの活気は見事なものだ。一部分、例外もあるが。

「へえ、けっこう大きいね！」

「そうか？ まあ、お前が今までの見た中では、最も大きい部類に入るか」

巨大な外壁に包まれた町の出入り口。彼等は馬車の乗換え所で下車し、そこで市街の全貌ゼンボウを眺めていた。

町中は見たところ木造建築の家が多いようだ。まだこの辺りでは鉄筋コンクリートなど普及してはいない。一言で表現すれば、のどかな田舎町だ。

故に、外壁部分のみが異常なほど強固で、外側と内側のギャップは激しい。

黒い堅牢な、幾何学模様キカクモヨウが浮かぶ巨大な外壁は、何やら特殊な素材と技術で造られているらしい。が、誰もそのことに疑問を持たない。もはや身近な生活の一部として、根強く浸透している存在というわけだ。

この町には、ギルドの支部こそ置かれていないものの、ハンター等が多く出入りしている。ある意味町の治安は、それなりに保たれていると言えよう。

さらに、町自体で比較的大勢のハンターを雇っており、まだ妖魔の侵入を許したこともないらしい。

ハンター関連の会話で一つ気になることが。町のいたる場所で聞こえてくる、数日前に起こった妖魔襲来事件の噂。

何でも、最近新たに領主が雇ったフリーの傭兵が、単独で妖魔の大群を蹴散らした、とのことだ。

まだまだ街中では、その緊張が完全には抜けてはおらず。ただ歩いているだけで、仮に聞く気がなくとも多くの情報が勝手に耳に流れ込んできた。

中央に聳え立つ巨大な屋敷は、この町を治める領主の館だ。その領主は個人でギルドと契約を結ぶほどに多くの財力を有している。領主が徴収する税はそれなりに重く、民に相応の不満が高まってはいるのだが、暴動が起きるほどでもない。らしい。

と、まあつまり2人は、この町については、その程度のことしか知らないのが現状である。

クリフが、胸に掛けた金色のペンダントに手を伸ばした。直径は2、3センチほどの綺麗な装飾品だ。

指に取ると、そのペンダントはカチツと音を立てて蓋を開けた。どうやらこれは、懐中時計らしい。精密な機械仕掛けの時計が、正確に時を刻んでいる。

ここまでの移動時間は凡そ10時間。何せ乗り心地の悪い馬車だ、身体が固まってしまう。

「ウィル。俺は疲れた。町の探索は明日だな」

「ええ〜？ おじいちゃんじゃないんだからあ。つて、ちょ、僕……」

と、長時間の移動で疲れたクリフは情報収集もせず、探検しながらついているウィルの腕を強引に引っ張る。そして一直線に宿屋を探し始めた。

「でもさっ、さっきの。けっこう高かったよねえ。今日、とまれるかなあ」

町の中心街を歩いていると、ウィルが思い出したかのようにポツリと呟いた。^{ツブヤ}因みに足を止めた彼等の目の前には《宿屋》の看板が立て掛けられている。

彼は、遠回しにこう言いたいのであろう。野宿はイヤだ、と。恐らく悪気はないのだろうが。

「……まあ、何とかなるだろう。行くぞ、ウィル」

「うん！」

^{フットコロ}懐に手を当て、複雑そうな表情をしていたクリフ。しかしウィルはそんなことを気にも留めず、考えもなしにその宿屋の中へと入って行った。

比較的広く綺麗な宿屋ではある。他の民家より頭一つ飛び出ている、珍しい二階建ての建造物だ。

しかし宿屋といっても自宅も兼ねており、さらに一階での酒場も兼業といった状態だろう。

古さは感じないが、質素かつ簡素な造り。剥き出しの木材は雨風に打たれて多少劣化している。

要は、大きさ以外は他の民家とそれ程差は見られない、ということである。

ほか、数件の宿屋がこの町にはあるらしいのだが、ここは最も旅人の目に留まりやすい場所にあり部屋数も多い。

そのため流石に、酒場でもある店内は人で賑わっていた。

店内でまず目に付いたのは、酒場のカウンターに立つ、若く比較的美しい女性。そしてその娘に絡んでいる、先程の馬車で乗り合わせたハンター達の姿であった。

何処へ行っても、下衆な男どもの行動は変わらない。酒が入っている所為もあるのだろうが、何とも頭の悪そうな口説き文句で、その女性を困らせている。

ハンターが相手では、周囲の人間もその中へ割って入ることは不可能であろう。

「ねえちゃん。どうだ、今晚付き合わねえか？」とか、「俺はハンターの資格持つてんだぜ？」とか。更に「今夜は俺を介抱してくれよ」などなど。聞き苦しい見苦しいにも程がある。

無論、普段の彼等。特にクリフの性格ならば当然のごとく、気にも留めずに素通りする。

のだが。今夜はお金が、足りない。

その女性は、十代半ばくらいの年齢であろうか、まだあどけなさ

が残る。

手の加えられていない赤茶色の髪を後ろで束ね、質素な服装にエプロンを身に纏っている。化粧もさほど目立たず、言い方は悪いが特別な色気も感じはしない。

しかし優しい表情の娘だ。その素朴な感じも相俟^{アイマ}つて、確かに可愛いらしく見える。

だが、客商売に慣れているという様子でもなく、その顔は露骨に不快感を露^{アラフ}にしていた。

まあ、絶好のチャンスではある。

しばらく様子を眺め躊躇^{タメラ}っていたクリフも、コートの襟^{エリ}を直し、髪型も調え始めた。

「あ、いくの？　ねえクリ、むぐうつ」

己の、似合わぬであろう行動を、無邪気に笑おうとするウィルの口を一度押さえ込む。

そしてクリフは諦め半分で無言のまま、店のカウンターへと向っていった。

そのハンター等がカウンターへ身体を乗り上げ、厭^{イヤ}らしい顔で彼女の身体に触れようとした。

しかしその瞬間にクリフが彼等の腕をそつと払い除け、静かに椅子へ腰掛けた。

「すまない。何か貰えるか？」

涼しげな顔で、そして男達には微^{ワス}かにも意識を向けず。同性ですら見惚^{ミホ}れる程に艶^{アデ}やかな外貌^{ガイボウ}を武器に、少女へ語りかけた。

間に割って入られたわけだ。当然、ハンター達の怒りを買うのは火を見るより明らかである。

崩れた顔を更に崩し「にいちちゃん、俺等が誰か分ってるのか、コラア」と、それに似たような言葉を一様に発する3名の厳つい男達。彼等は瞬^{マタタ}く間にクリフを取り囲んだ。

彼等は推定素人を相手に、既に自身の得物を握り締めている。

それを耳にするとクリフは立ち上がり、状況を飲み込めずオロオロとする娘を背に、澄^スました顔のまま口を開いた。

「ハンターと見受けるが、ギルドに通報されて困るのは、あんた達ではないか？ 悪いが、席を譲ってもらおう」

だが当然、そんな言葉で引き下がるはずもない。そして男のうちの一人が、クリフの胸倉に手をかけようとした、その瞬間だった。

「……消えろ」

と、小さな声で呟きながら彼が、鋭い眼光で相手を睨^{ニラ}み。そして更に恐ろしいまでの殺気と威圧を放ったのは。

他の客や背後の娘には気取られないように、相手のハンター達のに叩きつけるように放たれたプレッシャー。それは彼等の肌をピリピリと焼き付ける。

ハンター等も一瞬でその恐ろしさを察知した。最低限の力量は持ち合わせているのだらう。顔が青ざめ、全身からダラダラと脂汗を噴出させていた。まだ数秒も経過しないうちに。

そして「覚えてろよ」などと情けない台詞を小声で呔えながら、逃げるようにその場を立ち去っていった。

その後クリフは再び振り返り、呆然と立ち尽くす宿屋の娘を見つめる。その後彼女の身を案じた素振りを見せ、優しい言葉をかけた。

元々、何もせずただ道を歩くだけでも多くの女性が言い寄って来るほどの美系だ。この状況で、しかもこうまで優しく接せられたとあれば、恋愛経験の乏しそうな少女がどうなってしまうのか。まあ、容易に想像できるであろう。

2人はその夜、この宿に無料で停泊したという。

第一話・双刃の戦鬼「4」

それは3日前の出来事。

突然リユーネの町の入り口から、門番が叫びながら町の中心街を駆けた。

「妖魔だ！」と、町の人間に警報を発すると同時に、町内に滞在するハンター達への通告も兼ねてのことだ。

押し寄せた妖魔の群れ。この辺りに多く生息するタイプの、虫の様な外観を持つ妖魔が十数匹。雪崩れ込むように町に近付いてくる。

その外見は巨大な百足^{ムカデ}に近い、見るからに硬い外皮に身を包んだ凶暴な妖魔である。

赤黒い外殻、小刻みにうねる無数の足。全長も3メートルを超える。先端部の突出した二本の牙は、まるで鋼鉄製の刃の如く鋭い。

一般人では、彼等をどうすることも出来まい。

門番が妖魔を発見してから数分後、町で雇ったハンター達が駆け付けてきた。

こちらも十数人のハンターが待機している。しかし彼等は恐らく、Eクラスの間人間^{ホトシ}が殆どであろう。やや頼りなさが残る。

財力のある領主の館では、比較的優秀なハンターが雇われていることは周知の事実なのだが。

もつとも、彼等が町の騒動で動いたことなど、ただの一度すらなかったのだから期待しても仕方があるまい。

そう言えば、ここ数日彼等の姿を見かけない。領主と報酬のこと

で揉めでもしたのだろう。所詮ハンターとは、金で雇われた傭兵なのだ。と、皆は口を揃えて言う。

ハンター達が各々の得物を構え、辺りが緊張に包まれた、そんな時だった。

「お前等は邪魔だ。この仕事、俺が引き受けよう」
突然背後から、低く太い声が聞こえ、一人の男が現れたのは。

非常に体格の良い、黒い服装の中年男性。髭の濃い、他のハンター以上に容貌魁偉な男である。
その男の両腕には巨大な紅と蒼、片刃の剣が握られていた。

そして彼は、他のハンター達を押し退け、独り妖魔達の前に立ち
はだった。

一振りだった。

「はああ！」という低い掛け声と共に、紅い刃が握られた、その高く上げた右腕をそのまま一直線に振り下ろす。ただ、それだけだった。

鈍い、紅い光を発する剣からその斬撃の先に、放たれた衝撃波と共に発生した焰の柱が、一直線に疾走した。

彼が握る剣は恐らく魔具。地面を這うように突き進む紅い焰の波は、大気中の酸素を取り入れ更に巨大化していった。

そしてその、突進してくる妖魔の群れに衝突した焰は豪快な爆発を起こす。敵を瞬時に殲滅したのだ。

その爆音は町に響き渡り、地鳴りを起こすほど強力だったらしい。

数秒後。衝撃で空へ巻き上げられた妖魔の残骸がボトボトと地面に降り注いだ。その周囲は不気味な昆虫の外殻や肉片と、飛散した粘性の紫色の液体に塗れた。

その光景は妖魔を見慣れたハンターですら眉を顰めるほど、凄惨を極めたという。

刃を腰に収めた男は、大勢の眼前で、声高々にこう明言した。

「この町は俺の所有物だ」と。

彼は最近、領主に雇われたフリーの傭兵らしい。その双刃を振るう男の噂は、町中に広がった……

しかしここは、なかなか活気のある酒場だ。広いスペースの一階部分には絶えず30人程の客が席に着き、酒を片手に騒いでいる。丸いテーブルが七つと、幅の広いカウンターが置かれている。全体的に内装は簡素だが、店内は綺麗に清掃され、清潔感に溢れていた。

なかなかの店だが、店員の数が極端に少ない。というより、独りだ。若い娘は引っこり無しに右往左往し、受注と調理に奔走していた。

まあ、部屋を提供するだけの宿屋の方が副業といった様子であるうか。

先程逃げ帰ったハンター連中以外は、比較的良識のありそうな人間が集まっているように見える。あれ以来、娘に絡む者は一度も現れなかった。

尤も、夜のお相手を欲しているのなら娼館を探せば良いのだ。明らかに場違いな奴等ではあった。

そう言えば、町の入り口でも数件の娼館を見かけた。愚かな限りである。

そしてあの娘の、客への態度を窺^{ウカガ}う限り、どうやら常連の者も多いようだ。

独りで店を切り盛りする忙しさのあまりか、接客も儘^{ママ}にならない店の娘。おぼつかない手付きで酒や料理を運ぶ彼女に対し、愚痴^{ゲチ}を溢す者も罵声^{バセイ}を浴びせる者もまずいなかった。

どうやら、その器量の良さも原因の一つではあるが、なかなか人を惹^ヒき付ける能力に長けているらしい。

ちなみにウィルは、積極的に店の手伝いに従事していた。早々に二階へ上がり、部屋のベッドの上で寛^{クワ}ぐクリフとは対照的だ。

彼はその可愛らしい風采^{フウサイ}も相俟^{アイマ}って、ムードメーカーとして店の客達を大いに楽しませた。

その一方でウィルの、幼い姿からは想像も付かぬ手際の良さや、更にプロにも匹敵するであろう料理の腕は、多くの客達を驚かせたという。

「つかれたよお、アリサあゝ」

「ふふ。ありがとう、ウィリアムくん！」

日は暮れ外が暗くなった頃、一階の酒場は閉められた。

宿屋に宿泊する客はそう多くもなく、漸く二人は厳しい労働から解放された。

忙しさのあまり、さして会話が出来なかった二人。独りでこの宿を維持するのは、並大抵の苦勞ではないだろう。

何故彼女に両親がいないのか、何故独りで店を運営しなければならぬのか。その理由は、粗方予想が付く。

彼女が表では決して見せぬ。しかし完全に隠しきれてはいない。哀愁漂う憂い顔を時折浮かべるのは、そのためであろうか。

「でも、本当に助かったわ。今日は特に忙しくって」

「ううん、けっこう楽しかったから。あと、ウィルでいいよあ」

彼女の名前はアリサ・メラーズ、年齢は14歳。間近で改めて、まじまじとその顔を眺めると、この店には何故常連客が多いのか、その理由が本当に良く解る。

若干垂れた目からは、性格の柔らかさが窺える。人前では口元の笑みを絶やさないその様には、彼女の優しさが滲み出ている。

笑顔が似合う娘だ。

彼女はウィルの言葉に頷いた後、ふうと息を吐きながら、後ろで束ねた赤茶色の髪を解いた。

すると風の流れに乗って、汗や酒の匂いと共に女性特有の、何とも心地良い香りが漂ってくる。のだが、流石にウィルにはよく分からないらしい。

まあアリサ自身もまだ、忙しさから己の魅力に気が付いていないのが現状なのだが。

化粧は殆どせず、服装も地味。髪型にも気を配っているとは言え

ず、お世辞にも色気があるとは思えない。

素朴な風貌もある意味魅惑的ではあるが、勿体ないことだけは確かである。

しかし逆にその素朴さが、純粹で健気な性格を持つ、そんな彼女の魅力を惹き立たせているのかも知れないが。

「あ、えっと、ウィル君。遅くなっちゃったけど、あの人に、その」
アリサの態度が急によそよそしくなり、落ち着きがなくなり始める。

「昼のお礼を言わなきゃ。だから……」
だから一緒に行く、の意であろう。当然、あの人とはクリフのことである。

今まで恩人でもあるクリフに接しようとしなかったのは、どうやら単に仕事が忙しいから、だけではなさそうだ。

彼女は額の汗を拭い、鏡を前に髪を梳かし始めた。

昼間の行為が、予想以上に効いてしまったらしい。

確認するがクリフは騒動を利用した拳句、手伝いもせず無料で宿泊する予定。健気で純情な性格も、度が過ぎては考えものである。

彼等が宿泊する部屋は、凡そ6畳の間。ベッドとテーブルが一つずつ置かれ、簡易式だが風呂も備え付けてある。

この町で二階建ての建築物はそう多くない。1メートル四方形の窓からは、夜の町の景色が眺められる。

恐らく、この宿最高の部屋だ。

扉を開けるとクリフがベッドに横たわり、例によって読書に明け

暮れていた。

「あの、スレイターさん。失礼します」

その音を確認すると彼は、そちらをチラリと覗かせ、本を置きベツドから立ち上がった。

「ああ、あんたか」

「昼間は、あ、ありがとうございました。私、すごく困ってて、その……」

アリサは手をお臍の辺りで組み、指をモジモジと細かく動かす。そして彼の足元を見ながら声を絞り出すようにそう話した。

「昼間？ 気にすることはない。俺等も宿代が浮いて助かったからな」

一見冷たいようにも聞こえるが、恐らくこれでも最大限の礼を込めている。彼がウィル以外の人間に、多くの言葉をかけること自体が非常に珍しいのだから。

「あ、それで。今から夕食、ご一緒しませんか？」

「夕食、か。だが、セルフなのだろう？ これ以上の礼など、不要だ」

部屋全体を照らすは一つの小さな炎のみ。だがその揺れる光は、彼の凜とした、整った顔立ちを更に引き立たせる。

「いえ、最近はずっと独りでしたので。その、もしよろしければ」

ウィルが顔を膨らませ、眉間に皺を寄せてクリフを凝視している。彼は相当アリサのことを気に入っているらしい。

クリフはハアと息を吐き、首を縦に振った。

しかしアリサのあの態度。見た目通り、本当に恋愛経験が人並み異常に乏しいらしい。昼間の活発な彼女からは想像もつかぬ姿であ

る。

彼女は嬉しそうな顔で、軽快なステップを踏み、部屋を出て夕食の準備に向った。

「それで、ウィル。例の噂、何か分かったのか？」

「あ……え、えつとね。ちょ、ちよつと今から、もう一度アリサに聞くねっ」

思い出したかのようなクリフの言葉を耳に、ウェルは左の掌テノヒラを、握った右拳の側面でポンと叩いた。口を開き、ああああと、何かに気付かされたような、間の抜けた表情で。

そして彼も、慌ててアリサの後を追っていった。

「はあ、あの馬鹿。そこまで手伝いに夢中だったのか？ まったく……」

ここは町の多くの情報が飛び交う酒場。やはりあいつは、子供だ。そうしみじみと、思いを口に出しながらクリフも部屋を後にした。

その日の夕食、アリサは腕に縋ヨりを掛けた。それが顕著ケンチョに現れていたという。

なかなか思い込みの、感情の起伏が激しい娘である。クリフも、薄々そのことに気が付いていた……

第一話・双刃の戦鬼「5」

空は曇り、月も星も見えない、暗い夜。外灯もない宵の町は、漆黒の闇に包まれている。

複数個所、建物の窓から零れる薄暗い焰の灯りが目に入る。

点々と連なる赤色は、確かに幻想的な情景ではあるが、どこか物寂しい。

妖魔の呻き声ウメとは別にもう一つ、嫌な音が町中に響く。この時間帯は、特に。

歡喜の喘ぎアエか、苦痛の叫びか。妓楼ギロウから漏れる冷たい響き。子供に聞かせるは、あまりに忍びない音だ。

それゆえ、町の住人は。取り分け中層階級の者達は早々に床に就く。

町の繁栄と共に訪れた闇。それから顔を背け、耳も目も、鼻も口も、全てを覆い隠すが如く。

もう皆が寝静まったであろう頃、「ちょっと僕、出かけてくるね」と、ウィルが立ち上がった。

「そうか。あまり派手に動くなよ」

「うん。きをつける！」

蝋燭ロウソクに火を灯し耽読タンドクを続けるクリフの、小言の様な台詞。それにウィルはウイंकを返した。

しかし、その表情に無邪気な笑顔を残しつつも、彼からは普段の

幼気らしさは消えている。^{イタイケ}

そして彼は窓を開け、宿の二階から飛び降りて暗い街を翔^{カケ}て行った。

クリフは闇に消えたウィルを見送ると、ベッドから腰を上げた。そして壁にかけていたロングコートに手腕を通す。

（ようやくスイッチが入ったか。さて、では俺も行くと……？）
装備を整えて部屋の扉へと向う瞬間だった。

——ガチャ。

外側から鍵を開ける音と共に、その扉がゆっくりと開かれたのは。

「失礼します……」

薄暗い部屋の中だが、誰が現れたのか、その程度はすぐに解った。あの優しく高い声、何より鍵を持っているのは一人しかいない。

暗い中でもほんのり映る、明るい赤茶色の髪。瞳もそれと同じ色だ。

当然、アリサである。

「スレイターさん。突然、すみません。あ、えっと。ウィルくんは、どちらに……？」

「あいつは私用で、な。もう晚い、用があるのなら手短に願うが？」

キヨロキヨロと室内を見回した後、頭を下げ押しかけた無礼を詫^ワびるアリサ。だがどうにも様子がおかしい。

思いつめたような表情。その羞恥^{シユウチ}の態度は昼間と変わらぬが、俯^{ウツム}き加減で持ち前の明るさも感じ取れない。

アリサはコホンと咳き込み態度を改めた。そして、

「……いえ。昼間の、お、お礼を。と思いまして」

状況が違えば、何と言うことのない台詞。だが今その台詞は、恐ろしく彼女に似つかわしくない。そう、聞こえる。

「なん、だと？」

彼は一瞬眉を顰めたのだが。しかし彼女が遠回しに何を言いたいのか。そんなことは聞くまでもない。

ほのかに漂ってくる石鹸の香り。彼女は寝巻き姿で、良く見ればまだ髪も濡れている。

確かに食事の最中、クリフは彼女から発せられる熱い眼差しに感づいてはいた。だがこれは、あまりに不自然な行為であろう。

「なんだ。ここは娼館も兼業しているのか？」

勇気を振り絞ったのだろう。声も身体も震えさせギョツと拳を強く握り、何とか口を動かしたのであろう彼女に、クリフは冷たい一言を浴びせた。

仕事仕様に気持ちを切り替えているからであろうが、クリフに彼女の気持ちを汲み取る気など皆無。彼女の台詞を、嘲笑交じりで蔑んだ。

しばし、沈黙が続く。チツ、チツとクリフの時計の針が、等間隔で時を刻む音を発す。普段は気付かないその小さな音も、今は奇妙なほどに強調され、強引に耳の中に入ってくる。

空気が妙に張り詰める。

耳に纏わり付く自身の呼吸、頭に響く心臓の鼓動。アリサはそんな些細なことすらも強く意識してしまう。そんな冷たい静寂が、続

いた。

「いえ。これは、えっと。私の気持ちです。その、受け取って頂けますか？」

息を呑んで口を開いた。そして少しずつクリフとの距離を縮めてゆくアリサ。だが。

「今はそんな気分ではない。それに、礼など宿代だけで十分だと言ったはずだ」

クリフは淡々と、感情も込めずそう答える。身支度を整えながら、彼女に目を向けようとしてもしない。

口調だけではなく、その態度も非常に冷たいものがある。

「そう、ですよ。突然こんなこと言われても、迷惑ですよ……」
幻想もあつたのだろう。だが彼女も女。まさかこうまで冷たく突き放されるとは、心にも思っていなかったようだ。

目に涙を浮かべ始め、先程とは別の意味で声と身体を震わしている。

だが、彼女の何を知っているわけではないが、突然このような行動に出る娘には到底思えない。男性経験も豊富だとも考えられない。クリフは冷静に、状況判断だけは的確に行っていた。

出かける前にウィルが漏らしていた一言を思い出す。彼女は時折、表では決して見せぬ悲しげな表情をする、と。

「……何を思いつめているのかは知らないが、他を当るのだな」
そう彼女に、すれ違い様に履き捨て、部屋を後にしようとしたのだが。

うつ、うつ、と、下唇を強く噛み締めて泣き崩れる彼女を背に、何らかの罪悪感を覚えたらしい。クリフは一度、その足を止めた。

まあ、利用したことだけでは確かで、この先も世話になる予定なのだから気持ちは解らないでもない。

普段のクリフならば間違いないく、そのまま立ち去っていたらう。女に気を配ったことなど、ここ数年記憶にないのだから。

いや、何より。彼女を泣かせたとウィルに知られば、アリサに懐^{ナツ}いている彼に何を言われるか分かったものではない。それが、本音であろうか。

「……ふう、手短に話せ」

諦めた様子で彼はそう告げ、真後ろに方向転換しベッドへ腰掛け^タた。

どうにも、あの顔と瞳には弱いらしい。何故か、泣いてる姿を見ていられなかった……

そして彼のその言葉と行動にアリサも顔を上げ、腕で涙を拭^{ヌグ}って嬉しそうに返事をしたという。

性への免疫に欠ける、無垢^{ムク}で初^{ウラ}な彼女のことだ。本当は単に、誰かに相談に乗って欲しかった。ただそれだけなのかも知れない……

「だが、正式な命令が下されたわけではいのだろうか？」

数分間、彼女の話を聞いたクリフが、呆れ顔で答えた。

「はい。でも恐らく、何れは……」

昨日、酒場で耳にした噂話。それも、ある程度信頼の置ける客からの情報。

アリサが、領主に目を付けられている。そう、聞かされたのは。

「それは、大変だな。……だがまあ、この町を出るか諦めて屈するか。俺に言えることなど何も無い」

別に、辺境では珍しいことではない。現に、彼女より幼くして娼婦として身売って生活している娘も少なくない。

これだけ素材の良い娘だ、目を付けられても不自然ではない。のだが。

「だがこの小さな町だ。別に領主とて、あんたと初めて顔を合わせたのは、昨日今日のことでないはずだが……？」

「はい。でも、事実。らしいんです」

彼女がこの町に来て、もうだいぶ経つと聞く。つじつまの合わせ部分が多すぎる。そう、噂でも広がっていたのだ。

「例の、噂の傭兵……か」

クリフの問いに彼女はコクンと頷いた。ウナズ

ギルドの監視が行き届かない辺境。時として、財力や権力が暴力に屈することも起こり得る。

相手が上級ハンタークラスの人間であれば、領主ですら逆らう術などない。

恐らく、彼女を狙っているのはその、最近領主に雇われたと噂の、双刃を振る傭兵であろう。

ハンターの実力、クラスの判定基準に《人格》という項目は含まれないのだ。

「別に、諦めてはいるんです。他に行く当てもありませんから。でも……」

理由のいかんは兎も角として、それが何を言わんとしているのか、

彼女は承知している。その命令に決して逆らえぬことも。

彼女は暫らくの沈黙の後、再び赤面し口を開いた。

「その、私。――最初だけは、えっと。あの……」

なるほど、と、納得せざるを得ないクリフであった。よほど周囲にまともな男性がいなかったのだろうか。身体目当ての低俗な輩は、ヤカラ望まなくとも後を絶たないのだが。

もしくは店の看板娘、ではなく。彼女を一人の女性として、真剣に接しようとした男性がいなかったのか。それとも、今は亡き親の教育によるものなのか。それも定かではない。

だが何にせよ、極端な行動に出たものである。思い込みとは恐ろしい限りだ。良く知りもしない男に、身体を捧げようなどとは。

それとも、他の手段を思いつかないほど追い詰められていたのだろうか。昼間はあれほど、ハッラッ澁刺とした姿を見せていたのに。

まあ、気丈だと言えばそれまでだが。

「断る」

「――え？」

最初と違い、比較的暖かい口調。しかしクリフは明確に、そう言い放った。

アリサは自分の耳を疑い、呆氣に取られ開いた口が塞がらない。

そんな顔をしている。

今思えば確かに、それ自体が強引で浅はかで、独り善がりの愚かな行為。だが相応の決心故、再び柔軟な判断が曇らされたと見える。それに、もう彼の理解と了解を得られた。と思い込んでしまったことが、それに拍車を掛けた最たる要因であろうか。

やはり、まだ子供だ。

「勝手に起こされた自棄^{ヤケ}に付き合うなど、俺はごめんだと言っている」

彼の厳しい態度にはつと我に返ったアリサは、己の粗忽^{ソッパ}さを再認識させられたようだ。

「自分勝手ですよね、私」

そしてアリサは溢れ出る涙をグッとこらえ、顔を隠すように後ろを振り返った。

「本当に、ごめんなさい。今日のことは、忘れて下さい。うう……」
そしてその後は無言のまま、足を前へと進め部屋を後にしようとする。

その時。

「ちっ、これだから餓鬼は。少し、待て」

クリフは立ち上がり、悲泣し去ろうとするアリサの肩を掴みそう声を上げた。

「凡その事情は解った。だが、捨て鉢な言動は控えるのだな」
アリサの身体を反転させ、彼女の目を見て突然、そう呟^{ソフヤ}いた。

「えっ？」

「明日、もう一度話を聞いてやる。だから冷静に考え直せ。その上で本音を聞かせる。まったく……」

何とも高圧的な物言いだ。自己嫌悪とショックで落胆していた彼女には、さぞ頼もしい言葉に聞こえたのだろう。

「は、はい！」

そして再び。いや、彼女は喜悦^{キエツ}の涙を流し、その色を直した。

しかし先程からだ、意外にも情熱的な一面を見せ付けるものだ。

これならば普段は冷酷な彼に、あのウィルが懐くのも納得がいく。

「泣くのは止める。何のために話を聞いたと思っている？」

扱いに困り、情け深い口調で問いかけるクリフだが、完全に逆効果だと言える。この手の娘はどうにも苦手らしい。

それに加え、彼女の顔、そして雰囲気。接すれば接するほどに何故か、懐かしさを覚える。この時はまだ、その理由は皆目見当もつかなかったのだが。

その後彼女は、ポーッとクリフの顔を見つめ、先程までとは違った眼差しを彼に送ったという。

冷たく、厳しく接せられ続けた中での、一言の温情のこもった台詞。またその一言が、彼の想像以上にアリサの心に響いてしまったことを、クリフはまだ気付いていない……

アリサが喜色満面に部屋を出た後。クリフは部屋に残り、独り思案に耽^{フケ}っていた。

（双刃を振るう男。だが、その程度の小物……か。ならば）

何があっても、真に冷静さを失わない男である。もう、頭の中は完全に仕事へと切り替わっているようだ。

その頃、宿を出たウィルは暗闇の中。眼前に広がる巨大な領主の館を見上げ、その敷地内へ足を進ませていた。

第一話・双刃の戦鬼「6」

領主の館。流石に大豪邸とまでは言えないにしても、造りの良さが暗闇でも確認できる。その敷地の広大さといい、他の民家とは比較になるまい。

敷地の全てを覆う巨大な堀。基礎が頑丈に造られているためか、周囲よりも数段は地盤が高い。二階の窓からは町内が一望できよう。なるほど、辺境でこの屋敷に住むのだ。民への税が軽いはずがない。

それに屋敷の外観自体は簡素な造りだが、明らかに堅固ではある。独自に傭兵を雇う領主、町が滅ぼうとも我が身を守らんとする姿勢が顕著ケンチョに現れている。これでは、民の不満が高まる理由も良く解る。

などと、小難しいことを考えられるウィルではないのだが。

目を凝コらすと、屋敷の正面が破損しているのが見える。外壁の一部も崩れている。応急措置はなされているものの、完全には修復されてはいない。

ウィルは周囲を全く警戒もせず、堂々と真正面から屋敷の内側へと足を進めていった。

天井の高い、広い一階ホールの中央で一人の男が立ち塞フサぐ。

2メートル以上の巨体を誇る彼の、その両腕には紅と蒼、対の片刃の双刃が握られている。

男のその大柄な肉体に見合った、刃渡りがウィルの身長を優に越す格外な代物だ。外観はさながら、大型の青竜刀。常人では肩に担ぐことすら困難であろう。

彼はその身に黒いジャケットを羽織^{ハオ}るが、鍛え抜かれた筋肉によってそれはパンパンに張っている。

腕も脚も、そして首周りも一般人のそれを二周りは上回っている。厳^{シゲ}つい顔に茂^{ヒゲ}った濃い髭、なかなか迫力のある風貌と言えよう。

しかしそんな屈強な男が、額に大量の脂汗を垂らしながら、緊張した面持ちで何やら身構えている。顔が引き攣^ツり、その手も双刃を強く握り締めて身体を硬直させている。

彼はこの場所に、ゆっくりと《何か》が近付いてくるのを感じているからである。その目で確認せずとも解る。強大で、しかし恐ろしく研磨された威圧感を放つ《何か》、が。

屋敷には前回の襲撃に懲^コりたのか、分厚い木材を金具で補強した何とも強固な扉が取り付けられている。が、忍び寄るモノが相手では、その対策も恐らく功を奏^ナさないであろう。

そしてその扉がギイイと音を立てて、開いた。

「あれえ。かぎ、あいてる……」

現れたのは、年端も行かぬ小さな子供。身長は130センチ程であろうか。対比物としての巨大な扉が、その矮^{ワイク}軀を異様に引き立てる。

しかし恐ろしいまでの威圧感は、先程よりも更に増し、場の空気

を締め上げていた。

ろうソク
蠟燭の灯に映し出されたその姿は、漆黒の上下に、赤味を帯びた
ガイトウ
外套を身に纏う。右目を眼帯で覆った銀髪の幼き少年だった。

言うまでもないが、ウィルである。

「あつ、おじさんだね。うわさの傭兵さんって」

周囲をキョロキョロと見回しつつ、無警戒に近寄ってくる彼の姿は、あどけない子供そのもの。顔を会わすや否や、初対面にも関わらず親密に、可憐な、カレン少女のように高い声で話しかけてきた。

「……お前、ただの餓鬼じゃないな。一体、何者だ」

低く野太い声で、男は小さく呟いた。彼の顔を覗き込むようにして。

あまりに不自然な子供の登場、しかし彼は微塵も呆氣に取られた素振りを見せない。鋭い眼光をウィルに浴びせ続けていた。

数分前から向けられ続けてきた殺氣と闘氣。他の人間には感じ取れぬほど洗練された氣配を放つのだ、この反応も当然ではある。

「僕は、ウィリアム。おじさんは……？」

「……グラエムだ」

無邪気な微笑を崩さぬウィルを前に、グラエムを名乗る双刃の男は、ゴクツと息を呑んだ。

ウィル本人にその気はないのだろうか、彼の問いかけは何故か脅迫のようにも聞こえる。相手が一般人であるのなら、その姿を直視した瞬間に、確実に喪神するであろう。

「へえ、それが《双刃》なんだ。けっこう強そうだね！」

ウィルの甲高い声は良く響く。静まり返った冷たい、この広い屋敷の中では特に。

「ところで、おじさん。ちょっと僕とお話しよ？　いろいろと聞きたいことがあるんだあ」

悪意の欠片も感じ取れない台詞と口調。ウィルは後ろで手を組み、首を傾げ親^{カシ}しげに語りかけてくる。が、場所が場所、状況が状況故、これがどれほど不気味に見えようか。

暫らくの沈黙の後、グラエムを名乗る男は口を開いた。

「お前、ハンターだな？　ふっ、確かに、ハンターに年齢は関係ないからな」

俯^{ウツム}き加減で、呟きを漏らす。どうやら彼の中では、何らかの確信を得ているらしい。

「ええ？　ち、ちがうもん。僕はあ——」

「なるほど。逆賊の俺を始末しに来たという訳か。面白いっ！」

どうやら彼は、元よりウィルの言葉に耳を傾けるつもりはないらしい。激しい怒号と共に、己の気を高めている。

左右に広げられた頑強な両腕、そこに握られている刃が薄っすらと光を放ち始めた。

魔具。本来はBクラス以上のハンターに支給される、妖魔滅殺用の強力な兵器だ。《遺跡》から発掘した技術の集大成でもあるこの兵器は、使い手の魔力に呼応し奇跡を起こす。

この魔具の存在こそが、皆が中級以上のハンターを《化け物》と異称し畏怖（イショウノイフ）する。その最たる所以でもあるのだが。

「ホントにちょっと聞きたいことがあるだけなの。って、ちょっと…

…
困り果てた顔をするウィル。だが、どうにも目の前の男を静止させることは困難らしい。そう諦めてしまったのだろうか。すぐに口を閉ざした。

一方グラエムは睨^{ニラ}みを利かせながら、刃を大きく振り翳^{カザ}した。右手に握られた紅い刃からは熱気が、左手の蒼い刃からは冷気が発生増大し大気を歪める。

この双刃、恐らく魔具の構造や性質としてはシンプルな部類に属されるのだろうが、なかなか相性の良い組み合わせのようだ。シンプル故に、使い手如何^{イカン}によっては相当の効力を発揮するであろう危険な代物だ。

「話し、だと？ その殺気、その威圧。舐^ナめるのも大概にしろ！」
グラエムはピクツと表情を曇らせた。

そして彼は全身を撓^{シナ}らせながら、剣を背面にまで大きく振り被る。背中で交差された刃。はつきりとは確認できないが、彼の腕に血管が浮き出て、膨れた筋肉で一回り太くなっているのが見えた。

「餓鬼がつ、去^イねい」

轟^{トドロ}く咆哮^{ホウコウ}。彼は高位より刃を、十字を描くように振り下ろした。屈強な男の放つ斬撃は、まるで地面を叩き付けるかのように。その巨体の全重量を乗せて、左右対称に刃が打ち込まれる。

紅と蒼の光が、暗闇を鋭く断ち切った。

「だっ、そんなのふりまわしちゃ。あぶないよっ」
ウィルのもつともな発言も、今は空しく聞こえる。既にグラエムの猛撃は止められないのだから。

その刃の先からは、豪快な風きり音と共に、斬撃による衝撃波が放たれた。

更に、それに追従し猛火と氷塊が、石造りの床を這うように、巨大な波となってウエルに襲いかかった。

炎と氷の波が、互いを打ち消しあうことなく、高速でウィルとの距離を縮めて行く。子供相手に一撃目から、微塵の容赦も感じさせない激しい攻撃だ。

だが無茶をするものである。これが他の民家同様に木造建築であったのならば、放たれた焰が全てを焼き尽くしていたに違いない。

大きくクロスしたグラエムの斬撃は地面を抉り、彼の前方に豪快な十字の亀裂を生じさせる。

熱気が空気を歪曲させ陽炎を生じさせる。カゲロウ冷氣により凍りついた水分がキラキラと輝く。

わけなのだが……

——当然ない。雲を裂いているように。

ふわりと軽やかに、ウィルは宙を舞った。グラエムの攻撃が届かぬ、10メートル以上ある天井ギリギリまで飛翔したのだ。ヒシヨウ

爆風で吹き飛ばされたのか、そう思わされる程に優しい跳躍。グラエムの放つ衝撃波に乗り、それを完全に流している。

しかしすかさず、第二撃が繰り出された。
グラエムは左手の蒼刃を一閃。横薙ぎの斬伐に載せられた冷気が、
大気を凍結させながら突き進む。ウィルの落下速度を予測し、的確
に放たれている。

どうやらこの魔具に《間合い》という概念は存在しないらしい。
豪炎と激氷を発生させる、剣の形をした装置。そう言い表すのが妥
当であろうか。

一撃は激突した壁を打ち抜き、同時に巨大な氷柱を発生させた。
その余波も含め、破壊力は申し分ない。

だが、目の前の小さな男の子を氷結させることも、ましてや粉碎
することなど、到底適わない。

空中で体勢を変える。いや、空気の流れに身を任せたと言えば良
いのだろうか。ウィルはヒラリと身体を反転させ、落下中にも拘ら
ず再び攻撃を鮮やかに回避した
纏った、赤味を帯びた外套を靡かせ、彼は風に乗る。身体を翻す
様は、微かたりともその自重を感じさせない。

彼の一挙手一投足全てが異様なまでに洗練されている。
どちらにせよ、人間のなせる業ではない。それだけは確かだ。

「くつ。お前は、一体――」
「うう、それをさっきはなそうと思ってたのにい。もう、僕のこと
はいいよ」

口を尖らせ、あどけない顔で話すウィル。切迫し表情を歪めるグ
ラエムとは対照的だ。

グラエムは硬く握った剣を更に締めた。緊張からか、ポタポタと
頬を大量の汗が伝わり、顎先から地面へと滴り落ちる。

「……お前の目的は何だ。俺の首を狙ったハンターではないのか？」
「だからあ、お話しにきたただだよ。って、言ったじゃん。ちょっと、聞きたいことがあるの」

一呼吸置く。すると、ウィルの声がやや低くなった。
「ねえ、おじさん。おじさんってさあ……なに？」

表情は变えず。しかしその優しい笑顔からは、何故か冷たいものを感じる。彼の眼を見た瞬間、グラエムの背筋にゾクツと、不気味な悪寒が走ったという。

話をする？

そんな生易しい代物ではない。このプレッシャーは。

「はっ。ど、どうやら、本当に俺の二つ名を知らないらしいな。教えてやろう、俺は——」

「——《双刃の戦鬼》って言いたいんでしょ？ それはしってるよ
お」

苦し紛れと言ってしまっただけの良いのだろうか。まるで自身の威厳を再確認するかのようになり、誇らしげに語るグラエム。だが、ウィルがそれを許さなかった。

「知った上でなお、この俺に挑んでくるか。大した度胸だ。……確かに、腕だけは一流のようだが、愚かだな」

先程とは一変して、グラエムの口元が緩む。その二つ名はギルドに属する者ならば。いや、ギルドと僅かでも関係を持つ者ならば、耳にした直後には恐怖で全身を震わすという。

それは、呪われし名。彼の大きな自信の根拠も、解らないではない。
い。

「べつになにを名のってもおじさんのかって。——でもね、ちがうの。僕が知りたいのは……」

「何も違わん。この名の持つ意味を知らんのなら、俺が教えてやる。それは——」

名を聞けば自ずと身体が竦む^{スク}。この名は時として、それ自体が武器となり得る。だが、ウィルとは話が噛み合わない。

少しずつ。しかし確実に、ウィルの様子が変化し始めた。まるで逆鱗^{ゲキリン}に触れられたかのように。

「——えつとお。それはあ。つ、ついの刃をふるいたいしょうをせんめつ？　する、鬼の目を持つ。ええと、らせつ？　のしょうごう。だよ、たしか。クリフが言ってたもん……」

お世辞にも流暢^{リュウチョウ}とは言えない、おぼつかない台詞。自身の言葉であるにも関わらず、所々単語に疑問を感じつつ片言に話す。

どうやら、本質的には意味を理解していないらしい。が、その程度のことは歯牙^{シガ}にも掛けない様子だ。聞き様によっては、皮肉とも取れる。

「口で言っても解らんか。やはり、餓鬼だな。……良いだろう、戦鬼の力。その身を以って知るがいいっ！」

これ以上の口論は無駄だと悟ったのだろう。そしてグラエムは表情を引き締め、野太い声で咆え猛る（ホエタケル）。

だが、支柱のない自信は時として、冷静な判断を妨げる。彼ほどの実力者が相手の力量を測り違うとは。

それを聞きウィルは、今度は俯^{ウツム}きしばし沈黙する。そして顔を上げ、ゆつくりと口を開いた。

「ねえ、おじさん。じゃあ、僕におしえてよ。おじさんは、一体な

にを知ってるの？ 僕の、何を……？」

ウィルの顔から笑顔が完全に消えた。そこに居るのは、あの無邪気で愛くるしい少年ではない。そこ居るのは……

空気が、変わった。

第一話・双刃の戦鬼「7」

ザアツと空気が流れた。室内であるにも拘らず、だ。

「かつ……あ、な？」

グラエムの顔が、恐怖に歪む。喉が詰まり、呼吸もままならない。全身の毛が逆立ち、ゾクツと震えが指先にまで伝わる。

心拍数も異常に高まり、その鼓動が頭に響く。まるで身体が、この場に立つことを拒絶するかの如く。

目の前に立つは、幼い子供だ。外見上何が変わった訳ではない。しかし今は、彼が、強大な化け物のようにも思える。

一瞬で、己が捕食される側の存在なだと気付かされたようだ。

「僕は、ただ知りたいだけなの。僕のことを。なのに、どうして。なんで教えてくれないの？」

掠れる声。笑顔の消えたウィルの顔は妖艶で、恐ろしく冷たい。

先程まで放たれていた殺気は、あれは本当に、敵意のない代物だった。そう気付くのに、時間は不要だろう。グラエムの思考は停止し、全身の感覚が次第に薄れていった。

「ねえ、おじさん。僕のこと、おしえて……？」

そしてウィルが、ゆっくりと前進を始めた。闇に揺れる銀色の隻眼。

次第に近づく銀光を前に、巨漢なグラエムが真に、《死》が迫り来るのを感じたという。

「う、が……ぐをおお！」

ウィルが手前1メートルほどの場所で立ち止まった時、突然グラ
エムが吼えた。死を直感した彼は、全身の震えを押さえ、両の腕を
振り上げる。

恐怖からか目を閉じ、苦悶の表情を浮かべる。が、《死》を前に
身体が、無意識の内に奮い立たされた。

そして、双刃を重ねるようにして真正面に、縦に一気に振り下ろ
す。

——音が、聞こえない。

ウィルは右手に黒刀 《クラウディア》を握り、頭上で、グラエ
ムの斬撃を片手で受け止めていた。

しかし、無音だ。それどころか、グラエムの腕には何の衝撃も感
じない。まるで、刃の先が突然消えたかのように。

ウィルのそれは、単純な腕力の類ではないらしい。仮にウィルが
強靱な臂力リョリョクを有するにせよ、グラエムの強力ゴウリキに床が耐えられるとは
考えがたい。

力比べをしているようにも見えない。力んで震えているのはグラ
エムだけである。

つまり、これは、技術。ウィルの刃は、グラエムの斬撃による衝
撃を全て受け流した、と。上から押さえ付けている今でさえ、腕へ
の負担を吸収されている程に。

力の流れ、筋力の動き、思考、何もかも読まれている。刃を強引
に引き離すことすら適わない。

グラエムは刃を手放し、その場に膝を付いた。

「くつ。こ、殺せ……」

もはや抵抗云々の次元を超えているのだと悟ったのだろう。その場に項垂れた。^{ウナダ}

そして彼は目を閉じ、身体の力を抜いた。しかし……

突然ウィルは刃を収め、

「へへえ〜。ねえ、びつくりした？　びつくりした！」

再び笑顔で話しかけてきた。何とも優しく楽しそうな声で。

「あれ？　やだなあ。じょーだんだよあ。お話しようって言ったもんね」

先程までの異常なプレッシャーもいつしか消えていた。今日の前に立つのは、天使の様な笑顔で語りかけてくる、^{テンシンランマン}天真爛漫な少年だ。間延びした口調が、戻っている。

「おじさん、まあまあ強いね！　でもお、ちよつと動きにやわらかさがたりないかなあ。けつこついい武器を持つてるのに、もつたないよあ？」

そして講釈を垂れる始末である。^{ニラ}俄かに信じがたいが、本当に敵意がない。グラエムは開いた口が塞がらなかったという。尻餅を付き、しばし硬直した。

「お、俺は——何も知らん。本当に、何も知らん」

数分後、正気に戻ったグラエムは口を開いた。ウィルからの殺気はなくとも、まだ彼の身体は恐怖に顫動^{センドウ}している。

「ホント？ なにも知らないの？」

「……ああ」

彼はウィルと目を合わせようとしない。実力者であるからこそ、敵の恐ろしさが判るのである。やや遅れて答えたその声は、震えている。

「なあんだ。そっか。じゃあ、いいや」

それを聞いたウィルは、肩を落とし回り右。そしてグラエムに手を振りながら、歩き始めた。まるで何事もなかったかのように……

「また、外れかあ。まあ、いつかあ」

などと愚痴を溢しつつ、一目散に屋敷を後にした。一体彼は、何をしにここを訪れたのだろうか……

まあ、恐らくグラエムと対峙した瞬間に、大した情報源でもない、と本能的に察知したと思われる。が、定かではない。

「くっ。あの餓鬼、まさか……」

まさか……と、自問自答でもしたのだろう。何を考えているのか、それはある程度予想が付く。

想像を絶する、驚異的な戦闘力を有する化け物。本物であっても何ら不思議ではない。例えばそれが子供であろうと。

グラエムが剣を拾い、立ち上がった直後、彼は背後に気配を感じた。そしてそれと同時に、聞き慣れた声が屋敷に響く。

「よくもまあ、見事に破壊してくれたものだな」

十字に裂かれた地面、ぶち抜かれた壁。巨大な氷柱と焔の跡。…
…確かに。

背後から聞こえるのは何とも高圧的で耳障りな、低く卑しい男の
声である。

「はっ、領主様のご到着、か。臆病なあんたが、良く護衛もなしに
ここまで来れたものだ」

グラエムは高笑いし、背後に現れた者を蔑^{サゲス}んだ。そして、後ろを
振り返る。

そこに居るのは、ずんぐりとした体型の男。高級そうなローブを
身に纏っている。

彼はこの町の領主で、グラエムの雇い主である。これだけの騒音
を響かせていたのだ、流石に気付かぬはずはなかつた。

「やはり、偽者か。まあ、私には関係のないことだが」

ずっと物陰にでも隠れていたのだろうが。この屋敷の造りが物語
るように、極端に臆病な男である。

「確かに。どうせあんたには、俺をどうこうする力もない。偽者だ
ろうと関係ないだろう？」

グラエムは侮蔑^{フベツ}の視線を送り、彼を嘲^{アザケ}る。

今まで強引に己を雇わせ、存分に甘い汁を吸ってきた。いや、彼
が訪れる以前も、雇っていたハンター等に利用され続けてきたのだ。
見下す理由も良く分かる。

「それだが。そろそろお前を解雇しようと思っているんだ」

普段なら、グラエムの眼力一つで萎縮^{イシュク}する彼が、今宵は奇妙なほ
ど、自信に満ちた台詞を述べた。胸を張り、グラエムを見据えてい
る。

「馬鹿なことを。別に、今ここでお前を殺して、俺が領主に成り代わっても構わないんだぞ？　俺に生かされているということを忘れたか」

しかし領主は、そんな彼の言葉を鼻で笑う。

「双刃の戦鬼。その名、最初に聞いた時は恐怖で夜も眠れなかった。でも、そのお陰か……」

領主はどこか遠くを眺め、独りで語り始めた。

「……？　何を言っている？」

グラエムが錯乱するのも無理はない。

この堂々とした様は何たるものか。あれ程に脆弱だった領主が、今はグラエムを前に不適な笑みを溢すのだから。

「くくくつ、焦り急がせた甲斐があつたな。今はむしろ、感謝しているぞ」

まるで鍛えてもいない、虚弱な中年の男から、奇妙な力が流れ出ているのが解る。どす黒い、不気味なオーラを放っている。これは

……

「もう、護衛なんぞ。要らないのだ……」

「お、お前は……」

闇夜に、邪気が満ちた……

町の中心部から轟音^{ゴウオン}が聞こえてくる。

「あの馬鹿。まったく、次は自重という単語を覚えさせるか」
まだアリサを説得して間もない。今頃はウィルが、屋敷へ向い一
暴れしている頃だろう。派手に動くなと警告はしておいたのだが。
やはり聞いていなかったらしい。

ここは、町で雇われたハンター達に与えられた寮。屋敷からは比
較的近い位置に建てられている。
アリサの宿よりは巨大であろうか。この部屋も20畳ほどの広さ
がある。高給取りであるハンターは、やはりこの町でも特別扱いを
受けている。

で、クリフに胸倉を掴まれ、顔を痣^{アザ}だらけにしている男。と、周
辺に転がり悶え苦しんでいるのが、そのハンター様御一行というわ
けだ。

「それで、あんたも口を閉ざすか。早く答えてくれた方が、俺も楽
で助かるのだが」

クリフはその男を、力任せに持ち上げた。ウィルを見つめる時と
は対照的な、残忍で冷酷な顔だ。

「お、俺には関係ない。貴様、こんなことをして」

と、男は恐怖で顔を引き攣^ツらせ、情けない声を出す。これでは、
あの双刃の男に好き勝手されても仕方がないであろう。ハンターと
いえど、最下級ではこの程度なのが現状である。

「関係ない？ それは違うな。お前は那双刃の男のために、今俺
に殺されようとしている。十二分に関係があるのではないか？」

「ひつ。あんた、一体何者だ？ お、俺はハンターだぞ？」

この期に及んで、ハンターの資格を口に出す。昼に酒場に現れた

連中と同様、態度だけは無駄に大きい。だが、顫動は止まらない。

「ハンター、か。不審な、双刃の男が現れたにも拘らず、何故かギルドが動かない。職務怠慢は宜しくないな」

「ギ、ギルドへの通知は、領主に止められている。だ、だから、俺達には……」

確かに。双刃の戦鬼といえば、ギルド内部でも最重要機密として取り上げられているはずだ。例えばそれが偽者であろうと、放置するとは考えがたい。

あの男が現れたのは一週間も前と聞く。最低でも三日前には、その存在が公の下に晒^{サラ}されているわけだ。

折角の情報源を無駄にする手はない。

「そうか。では、あんたに通知役を引き受けて貰おう」

「なっ？ だから、領主が……くっ」

フツと口元を緩ませつつも、鋭い眼光を崩さぬクリフ。これだけの、抜き身の様な鋭利な殺意^{エイリ}を放つのだ。これ以上抵抗すればどうなるのか、流石に脅された本人も気付いてはいるらしい。

「先程、名簿を見させて貰った。どうやら、この町の出身の者が多いようだ。あまり親族に迷惑をかけぬことを勧めるが……？」

身の毛がよだつ、冷たい笑み。戦慄^{センリツ}が、走る。死すら超越するほどの恐怖が彼を襲った。

「……わ、分かった。言う通りにする。だから、だから……」

男は声を震わせ、訴えかけるような目でクリフを見つめる。保険代わりであろうか。ダメ押しの一言に男は、完全に屈服した。

「そうか、それは助かる。では、失礼する」

そして男を投げ捨て、クリフはその場を後にした。

「領主、か。何かあるな……」

宿への帰り道。漠然と考えていたことが、よもや予想の範疇ハンチュウを大きく超えて現実のものになるうとは、流石に思いもしなかったであろう。

第一話・双刃の戦鬼「8」

陽が明け始めた。東の空が赤く染まる……
精悍な街中に響く妖魔の唸り声も、そろそろ影を潜める頃だろう。
そんな時間帯だ。

しかし普段とは多少様子が異なる、ここリユーネ。
突如、中心部から響いた轟音。それに人々は目を覚まし、町全体
が微かに、しかし確実に響いた。

「クリフ……」

眠い目をこするウィル。どうやら、クリフよりもウィルの方が若
干早く部屋へ戻っていたらしい。

彼は暗い部屋のベッドの上に座り。そして独り寂しそうな顔で、
入室したクリフを眺めた。

着替えもせず。その衣類には微細な砂や石の破片が付着し、薄汚
れていた。しかし双刃だけは外され、壁に立て掛けられてある。

ウィルの剣からは僅かだが、魔力の残り香を感じる。

彼が刃を抜く。それは、今回の《偽者》がその程度には実力を有
す、という証でもある。

前回の《偽者》よりはいくらかマシだったのか。と、クリフは複
雑な表情でウィルの顔を見つめ返した。

「……早いな。それで、何か分かったのか？」

コートを脱いだクリフは、ウィルの隣に腰掛けた。そして彼の身
体の汚れを掃う。

すると催した眠りに耐え切れず、ウィルはクリフの身体に寄り掛かった。うつらうつらとした眼は、もうその焦点が合っていない。

「ん〜。わかんない。僕もう、ねむいのお……」

ウィルがそう言っただけクリフの太股を枕代わりにした。

「そうか。では、寝るとしよう」

クリフは知っている。ウィルが、独りでは眠れないことを。事情の聴取は不可能だと判断した彼は、そのまま何も言わず床についた。

「うん。おやすみ……」

そしてウィルも、クリフの身体に抱きついて深い眠りに落ちた……

この町を訪れる意義があったのか、収穫はあるのだろうか。クリフは隣で寝息を立てるウィルを見て思った。

そんな些細ことを忘れさせてくれる無垢な寝顔だ、と。

第二話・邪の刻印「0」

世界の中心、アヴァロン。

百万以上の人口を誇る首都では、この時代には相応しくない高層の建物が立ち並び、町中を列車が走る。人々は皆、裕福な暮らしをしているという。

最強の《軍》を有し、妖魔の脅威に晒されぬ難攻不落の要塞都市。古代の遺跡、最先端の技術。人類の英知を集結せしめる、唯一無二のテクノポリス。

限られた者のみが住まうことを許された桃源郷。しかしその実体は、数多の犠牲の上に築かれた、血塗られし樂園だといえよう。

アヴァロン及びアヴァロン周辺の豊かな町とは対照的な、辺境の町々。

財力、権力を凌駕する暴力。^{リョウカ}維持されぬ秩序と治安。空虚と化した法は、それ等を保護するに値しない。

辺境の町々では、貴族による政治システムも、中央の権力も、ギルドの監視も行き届かぬ。

領主の圧政、妖魔の脅威。アヴァロンとの距離に比例し、住民の生活水準も下降の一途を辿る。

イシズエ
礎としての貧窮、ヒンキユウそして迫害。貨幣価値も保たれず、貧富の差は拡大するばかりだ。奴隷制度も、辺境では当然の如く浸透しよう。

妖魔という邪悪な存在が、人間同士の醜く歪められた社会を創る。

ハンターの助力により、辛うじて保たれる身の安全。しかしそれすらも、更なる悲劇の連鎖を生む。

どの町でも、胸を張って歩くのはハンターだけだ。彼等は力も、金も、女も、何もかもを独占した。

力なき者は虐げられ、彼等に隷従する。それは例え、権力財力を手にしたはずの領主であっても。

欲するは力、か。

第二話・邪の刻印「1」

戸の隙間から陽が射し、窓の外からは鳥の囀^{サエズ}りが聞こえてくる。
もう、朝だ。

ウィルの細く柔らかい髪は、差し込んだ光を反射しキラキラと輝いている。

まことに可愛い寝顔ではあるが、彼の、その色白のなややか頬には……涎^{ヨダレ}。押し付けられた顔を腕から剥^ハがすと、唾液が糸を引いたクリフの腕に小さな身体を寄せ、抱き付いているその姿はあまりに幼い。如何に強かろうと所詮、子供は子供である。

隣で丸くなり、気持ち良さそうにクークーと寝息を立てているウィル。

を、クリフが叩き起こす。

「ウィル。そろそろ起きろ」

「クリフう。ああ？ それ、僕のお……たべちゃ、ダメえ……」
腕を振り払いベッドから降りたクリフは、寝言を発する彼の襟元^{エリモト}を驚掴^{ワジツカ}みにする。そして強引に摘み上げた。

しかし宙吊りにされてもなお、ウィルに目を開く気配は見られない。尤も、まだ眠りに落ちてから2、3時間しか経過していないのだ、それも仕方がないのだが。

「う、うん。もうちょっとお……」

と、何度身体を揺さぶっても、夢と現実の狭間を彷徨^{サマヨ}い続ける始末である。

眠いのはクリフとて同じこと。至福の時を満喫する彼の、その可憐な寝顔が何とも腹立たしい。

「……………ふう。今日は、外で遊ぶのではないのか？」
呆れた、としか表現しようがないだろう。クリフは不自然に優しい言葉で囁いた。

「ふえ〜？ あ、うん。行くう」

クリフが耳元で投げ掛けた単語に、寝ているはずのウィルが敏感に反応した。

彼は目を擦り、涎を拭う。そして手足をジタバタと動かし抵抗を試みた。のだが、ガツチリとクリフに抱き抱えられ、足掻きも空しく取り押さえられた。

「待て、風呂が先だ。お前、昨日入っていないのだろうが」

腹部を逆の腕で強引に取り押さえる。このまま寝ぼけて外へ出ようものなら、彼が一体何を仕出かすか分かったものではない。というのが本音であろうか。

「だ〜め〜。あそ……ん？ あ、クリフ。おはよお。なにしてるのお？」

「……………良いから、身体を流して来い」

振り返りキョトンとした顔でクリフを見つめるウィルだが、まだ目の焦点が合っていない。

クリフは表情こそ穏やかなものの、額には怒りのマークを作りかけている。しかしウィルは、そんなことなど気にも掛けない。

「おふろ？ やあだ。あたま洗ってくれなきゃ、僕入んない〜」

その後、ゴツつという殴打の鈍い音が部屋中に響き渡ったという。ウィルの喚き声と共に。

「あつ。スレイターさん。おはようございます」

「ああ……」

クリフが身なりを整え一階に降りると、静まり返った酒場のカウンターにアリサが座っている。

店のテーブルにはなかなか派手に食い散らかされた後があり、何があったかは言うまでもあるまい。

涙目で飛び出して行ったのに、しっかりと朝食を済ますのだから感心する。

彼女の綺麗に梳^トかされた赤茶色の真つ直ぐな髪、束ねた髪を解くと印象も変わる。服装も地味であることに変わりはないが、先日よりはいくらか御粧^{オメカ}しているようだ。

まあ、年頃の娘だ。日頃から素っぴんで、作業服のみを身に付けているわけでもないらしい。それとも今日は、何か特別な事情でもあるのだろうか。

本日は酒場が定休日と聞く。普段は忙しそうに作業に追われているアリサも、流石にのんびりと寛^{クッロ}いでいた。

早朝から明るく元気に挨拶を発する彼女。しかし目の下には隈^{クマ}、裏返った声。なかなかクリフと目を合わせようとはしない。

どうにも、分かり易い性格だ。

「あの、ウィルくん。さっき独りで外へ出て行ってしまいましたけど」

「あいつなら大丈夫だ。まあ、飯時になれば帰ってくるだろう」
クリフはハアと溜め息を付き、呆れた顔で言った。

「そうですか。えっと」

チクタクと、クリフの懐中時計の針が時を刻む。通常では目にすることも叶わない珍しい品物だ。しかし空しさを醸し出すその音が、賑わいを見せぬ酒場の空気を重くする。

アリサからは言葉が出てこない。恐らく話したいことは山程あるのだが、言葉が喉で止まってしまうのだろう。

一方、席に座ったクリフも何やら考え事があるらしく、彼も何一つ言葉を発しない。無論、彼自身の行動は普段と何ら変わらないのだが。

だが、どうやらその沈黙が、アリサに無用の圧力を与えてしまっているようだ。昨夜彼に迷惑をかけたアリサにとっては、たださえ気まずいこの雰囲気。

追い討ちをかけるような無言のプレッシャーはさぞ、彼女に重く押し掛かったことであろう。

「えっと、お水。お水用意しますね」

クリフもそれに「ああ、悪いな」と空返事を返す。

場の空気に耐えられなかったアリサは、一度逃げ出した。

（……領主。そう言えば、あの双刃の男はどうなったのか。やはり、ウィルに任せるべきではなかったか）

ウィルは話を聞きだす前に飛び出してしまい、何一つ情報を得られないこの現状。どうにも気に入らないらしい。

（それに、アリサ・メラーズ。メラーズ？ まさか、そんな偶然が……いや）

その名もまた、気にかかり頭から離れなかったというご様子。ど

うにも、懐^{ナツ}かしい響きだ。

クリフは店の内装を眺め、その後カウンターで準備をしているアリサの後姿にも視線を送った。そして静かに自身の記憶を辿り、思案に耽^{タム}った。

「お、お待たせしました。お水で……キャッ！」

慌てたアリサが何を仕出かしたのか。それを説明するのはあまりに阿呆らしい。

まだ慣れない、おぼつかない動作で仕事をしていたのは彼も承知済み。そもそも、そそっかしく極端な行動に出る娘だということも、クリフは認識していたわけだが。

まあ。椅子に躓^{ツマス}き、転倒した、と。何も、クリフの目の前で転ばずとも良いものを。

当然、手に持ったコップ二人分の水を豪快に撒^マき散らす。しかも何と、ピンポイントで見事にそれを彼の顔面に命中させる、奇跡的な手際の良さを見せ付けた。

天然とは、恐ろしい限りである。これでは彼も、そう思わざるを得ないであろう。

「……ふう。何か、拭^{ツク}くものを用意してくれないか？」

「は、はい！」、ごめんなさい、ごめんなさい。本当に、すみませんっ」

必死になって謝るアリサは、今にも泣き出しそうな顔をしている。怒る気も失せるとはこのことだ。本当に悪意がない分やり難い。ウィルのように頭を殴るわけにもいかないのだろう。

怒鳴られないと知った時の、彼女の嬉しそうな顔ときたら、それ

はもう。

どうやらまた一つ、アリサは大きな勘違いをしてしまったらしい

……

美しい金色の髪から零れ落ちる雫が、キラキラと輝く。これは、凶器だ。

「それで。少し、あんたに聞きたいことがあるのだが……」

顔の水を拭^{ヌグ}ったクリフが突然、アリサを呼び止めた。

「は、はいっ？」

見惚^{ミホ}れていたアリサはビクツと身体を硬直させ、声を今までより更に裏返す。

真剣な顔を崩さないクリフ。彼にここまで熱い視線を送られたのは初めてであろう。昨夜のアレもあって、独りで興奮した彼女の心拍数は異常に高まっていた。

大方、昨夜の彼の言を飛躍させて解釈し。「もしかして……」などと、一晩中考えていたのだろう。端的にそれを態度で示している。

「いや。恐らく、プライベートな話になってしまっな。だが、聞くだけ聞いて欲しい」

クリフは凜^{リン}とした態度で、改まった口調で語りかけてくる。アリサには台詞の内容など聞き取れていないのだろう。ポーッと彼の顔を見つめ返す始末である。

そして、第一声が、

「あの。そんな。ま、まだ私。こ、心の準備が——でも」

である。クリフはまだ一言も発していないのに、彼女は見事に錯乱していた。頬を赤く染め、膝の上で指をモジモジと動かす。

「……なに？ 早朝から一体、何を言っている……？」
絶句。

完全に出鼻を挫^{クジ}かれた。クリフも流石に驚きを隠せない。

ウィルといい、彼女といい。やはり天然とは、恐ろしい。そう再度認識させられたようだ。

朝の町は人に溢れる。どうやらここは、他の町との交易が盛んな町らしい。辺境に位置しながら他との差別化を図り、その上で発展を遂げた理由がそれだろう。

領主の館から一直線に入り口まで通った広い表通り。それに沿って多くの店が立ち並んでいる。日用品や食材屋の他、ハンターの入りが多かったためか、武具を扱う店も少なくない。

そして遊郭が繁華街に姿を表わしているのも特徴の一つだ。白昼堂々、薄い衣類を纏う女性が、通り行く男性達を手当たり次第手招きしている。

良くも悪くも、静寂に包まれた夜とは、あまりの格差が見られる。

「いったいなあ。僕、わるいことしたかなあ……ん？」

頭を擦^{サス}りながら町中を歩くウィルの目に、妙な人集まりの光景が飛び込んできた。無論彼は、怪しまずに現場へ足を運んでしまう性格だ。

町の中央での人々の集まり。先程も周囲から様々な噂話が聞こえてきたが、最もインパクトが大きいのはこれであろう。

「お譲ちゃん。これは子供が見るものじゃない」

と、人溜まりの最後列の中年男性が言った。好奇心からか集まりの中心へ、人を掻き分けて向うウィルに。

「僕はおとこっ」と「子供じゃないもん」の二言を述べる前に、ウィルはまず目の前へ広がる光景に驚愕した。

「うわっ……」

場が騒然とする。ウィルも思わず手で口元を覆ってしまった。そこにあるのは……

グラエムの、亡骸。

昨夜、双刃の戦鬼を騙った巨躯の男。屋敷で雇われていたグラエムの屍だ。一目で息絶えていることが確認できた。

領主の館の目の前、まるで投げ捨てられたように横たわっているが、その様子があまりに異様であった。

肘、膝、首、その他、全身の関節が無残にも圧し折られている。身体が不自然に折り畳まれ、骨が筋肉を破り剥き出しの状態で見えている、何とも惨たらしい光景である。

すぐに死体だと判断した理由が、それだ。確かに、女子供の見るべき代物ではない。

悪魔とでも遭遇したかのような、恐怖に歪む彼の凄惨な死に顔。良く見れば各部に裂傷、打撲跡が残されている。拷問でも受けたのであろうか。

地面には巨大は紅く乾いた水溜り跡を残し、何やら引きずられた後もある。その先は領主の館。まだ血痕もそう古くない。殺害されてからさほど時間は経過していないだろう。

これは、大きな波紋を呼んだ。噂が噂を呼び、場がざわめく。が、

「ど、どうしよう。僕、やっぱり何かわるいことしちゃったのかなあ。えっと、あっと……ク、クリフうー」

周囲の状況などに目もくれず、ウィルは大慌て宿へ引き返していった。

ウィルに代わって説明するのならば、これは明らかにプロの仕事ではない。何故彼の屍骸^{シガイ}を晒したのかは不明だが、殺害の仕方があまりにお粗末である。

間接の壊し方も粗雑、打撃斬撃も精度を欠く。何より、美学がない。

一言で表現するのであれば。尋常ではない力を突如得てしまった素人が、単に力任せに彼を捻^ネじ伏せた。その言い方が適切であろうか。無論、妖魔の所業でもないだろう。

肝心の領主も姿を現さず、流言飛語^{リュウゲンヒゴ}が飛び交う。昨夜町中に響いた轟音^{ゴウオン}といい。町で雇われたハンターが皆、一夜にして半殺しにされたという話といい。町で起こりつつある異変に大勢が気付き始めたようだ。

第二話・邪の刻印「2」

向かい合って座る二人。クリフは当然の如く硬い表情を崩さず、アリサもその色を正した。

先程までの緊張感のない空気は完全に抜け去っていた。

「クレア・メラーズ。この名に、聞き覚えはないか？」

突然の、突拍子のない質問にアリサはピクツと反応した。

「え？ あ……母です。クレアは私の母です。でも、何で……？」

それは聞き慣れた名前。それは、今は聞くのが辛い名前……

まずは驚きであろうか、それに次いで悲しみ。アリサは複雑そうな顔をしている。

「彼女は、今は……？」

アリサの様子から察すれば、聞くまでもないことと理解はしているのだろうが。クリフは戸惑いながらも彼女に問う。

「は、母は——死にました。3ヶ月前に」

彼女は俯き、唇を震わせながら答えた。同じ震えでも数分前の、あの含羞の色を浮かべていた態度とは全く異質の代物である。

「3ヶ月、か。それで、死因と、その時の状況を教えてもらえないか？」

触れてはならぬ心の領域。だがクリフはそこへ、土足で踏み込んだ。

当然アリサは、胸が締め付けられるような思いでその言葉を耳にしたのだろう。悲しみの色は更に広がった。

「じよ、状況ですか？ それは……」

「病死か。それとも何者かに殺害されたのか。分かる範囲で教えて

欲しい」

淡々と語る彼の、その心中は穏やかではない。クリフの苦しむ顔色に気付いているためか、アリサも抵抗せず素直にそれに応じた。

「……原因は、詳しくは判らないんです。妖魔に襲われた、と。出掛けたきり、行方が分からなくなつて、だから……」

と、語るに連れて、強引に押し込めていた記憶が蘇り始める。

やはり仕事に時折見せる悲しげな顔とは、こちらの話だったようだ。

「それで——いや、悪かった」

クリフも言葉を止めた。

口元を押さえ、アリサは頬を涙で濡らす。そして、その後暫らく彼女は、まともに会話の出来ない状態が続いた。

クリフはテーブルに置かれた簡単な朝食には手も付けず、目の前の少女の泣き顔をまじまじと見つめていた。

どうにも、不安定な情緒。発言全てに敏感に反応し、一喜一憂するのは恐らく、彼女の生まれ持った性格だけが原因ではない。

それにして、もまだ3ヶ月とは。やはり、気丈な娘だ。

アリサの眼はまだ赤く充血しているが、気持ちは落ち着いたらしい。ようやくクリフの話に耳を傾ける余裕が出来た。

「クレア・メラーズ。彼女は若干15歳にしてギルド本部の、一研究室の室長にまで上り詰めた天才だ」

そして彼女が泣き止むのを見計らって、クリフが語り始めた。遠くを見つめながら。

「俺も面識がある。あの頃何度か、彼女に基礎研究の一部を教えて貰った。……尤も餓鬼の頃の話だが、な」

フツと、口元を緩め語るクリフ。その表情を見ると、悪い思い出ではないであろうことが窺える。

「彼女がアヴァロンを抜け出したのは確か12年程前。俺も記憶が不鮮明だが、恐らくお前とも何度か会っているはずだ。結婚をしたとは聞いていなかったが、娘を抱いている姿を微かに覚えてい

額に手を当て、悩みながら幼い頃の記憶を辿るクリフ。その視線は、徐々に彼女の顔へ、そして髪と瞳へと移る。

だが、アリサはその言葉と視線の意味を何ら理解できてはいないだろう。彼女は首を傾げ、語るクリフの顔を不思議そうに眺めていた。

「えっと、あの。だから……え？ その、何のことですか？ 私、全然……」

動揺するアリサだが、どうやら単なる偶然による同姓同名、ではなさそうだ。

記憶を遡れば遡るほど、その《クレア》という女性の面影をアリサから感じる。

普段ならば齒牙にもかけぬ小娘相手に、何故か気を許してしまった理由は、それであろうか。

「いや、それは良い。それで、母親の遺留品は何か残されていないか？ 特殊な資料や器具など。日用品ではない代物なのだが」

アリサは多くの疑問を持ちながらも、首を横に振った。

「まあ気にするな、という訳にもいかないだろうが。今は忘れてもらおうか。日を置いて、母親のことは何れ話してやる。今は……」
今度は困惑しつつもアリサは、コクコクと数回首を縦に振った。
もう、何が何だか、といった感じであろうか。まるで操り人形のように。口を半開きにし、一旦思考を停止させクリフの言葉に従った。

その後1時間、二人の会話は続く。

「それに関して、何ら確証などはない。だが、事実だけは受け止めておくことだな」

複雑な表情のアリサを、クリフが真剣な面持ちで見つめた。

この短い時間で彼女に与えられたのは、必要最低限の情報のみ。それも、通常ならば俄かに信じがたい代物だ。だが……

「そんな……では、早くっ」

慌てて立ち上がろうとするアリサを、クリフが宥めた。

「まあ、そう慌てるな。あくまで、推測の範疇ハンチュウを脱していない。あと、お前がここで取り乱しても、何の解決にもならない。兎に角、座れ」

「でも……いえ。わ、解りました」

アリサは下唇をギュツと噛む。今度は重く押し掛かる不安、そして焦り。

知りつつも自分の力ではどうすることも出来ない。その悔しさも

合わさつての、複雑な表情というわけだ。

クリフには、彼女の内が手に取るように解る。

「だから、お前が慌てても仕方がないことだ。これは傭兵である俺達の仕事。お前は、普段通りにしていればそれで良い」

「――あ」

その一言で、アリサは肩の力を抜いた。

「それに何やら空気も騒がしい。直にウィルが何かを見つけ、騒ぎながら戻ってくるだろう。動くのはそれからでも遅くはない」

コップの水を飲み干した後、彼は胸の懐中時計の時間を確認した。

数分間、再び場は静寂を極める。しかし張り詰めた空気は、もう消えていた。

「私、その……」

アリサの口からこれ以上は、言葉が出てこない。淡々と、冷たく話すクリフの言葉の端々（ハシバシ）に、先程からずっと暖かい優しさを感じていた。

彼の言い回しは相変わらずだが、親身になって話を聞いてくれる。他の人間は「大変だな」と気遣ってはくれたものの、誰一人として深層にまでは踏み込んでくれなかった。

ずっと誰かに、相談に応じて貰いたかったのに。

先刻と昨夜、決して長くはなかったが、彼女にとっては実りある時間だったらしい。

今は感謝で、言葉が出てこない……

数十秒後アリサは胸元に手を当て、
「うう……スレイターさん。その、ありがとうございます。私……」
小声で言った。震える声は依然変わらず。しかしその震えもまた、
今までとは全く質の異なる代物だ。
胸で痞^{ツカ}えていた言葉がやっと出てきたようだ。小さく涙を流しながらもアリサの顔に、明るさが戻った。

「ふう。その《スレイター》というのは止めてくれ。性で呼ばれるのは、好きではない」

「え？ ええ？ えっと。では。ク、ク、クリフォード、さん？」
照れながら、小声で彼のファーストネームを呼ぶアリサだが。

「いや、クリフで良い。悪いがアリサ、ウィルが帰ってくる前にもう一杯、水をもらえるか？」

「は、はい！」

何とも、嬉しそうな顔をするものである。まだ何が解決した訳でもなかるうちに。

いや、長期に渡り彼女を苦しめ続けた重圧からは多少なりとも開放された、か。今の彼女は、良い顔をしている。

ウィルは一見、誰にでもなつく。だが一方で、人間を見る眼。人の本質を見抜く力に優れている。

彼が真になつく人間、それは、自身も信用するに値する人間だと言っことを、クリフは良く理解していた。

懐かしい面影に加え、そのことを承知したからこそ、彼女にはあ

る程度柔らかい物腰で接していたのだが。変に気を使っていたのも最初だけだったらいい。

ウィル以外に、これほど多くの言葉を発したのは久しぶりである。そしてウィル以外の人間を、名前で呼びかけたのも。

どうやら彼女のことが気に入ったのは、ウィルだけではなさそうだ……

そんな時、「クリフうー」と、遠くからウィルの高い声が聞こえてきた。そしてその声は次第に近付き、その後勢い良く扉が開けられた。

「ねえ、クリフ。クリフってばあ。たいへんたいへん。グラエムさんが死んでたの。それでいっぱい人がいて、噂が色々あって。それでねっ」

慌てた声で、身振り手振りで必死に何かを伝えようとしているのだが。全く伝わらない。

（ふう。次はこいつからも話を聞き出さねばならない、のか。まったく……）

そもそも、グラエムって誰だ？ と、ウィルの話を解読するのは、困難を極める。

気苦労の多いクリフとは対照的なウィルの姿。能天気な彼の言動は、クリフの辛労を増長させる一方だ。

出会ってからここまでの1年。ウィルを甘やかせて育てたことを、
心底後悔するクリフであった……

第二話・邪の刻印「3」

——長い。解説が。

ウィルは頭の回転が非常に速く、物覚えも良い。知能知識の値を数値で表わすのであれば、成人男性のそれを遥かに凌ぐであろう。^シが、お子様であることに変わりはない。

彼なりに何かを真剣に伝えようとはしているのだろうが、枝葉末節。

問題意識のあり方がクリフのそれとは対極に位置するのだから、彼とは視点が異なるのは仕方がないことなのだが。

「でねっ。こう、ベキベキってなってね。それで。あ、そう言えば——」

と、なかなか要領を得ない台詞を並べる。焦っているというよりは、単に話すことを楽しんでいるようにも見える。

頭を抱えるクリフとは裏腹、何とも明るい笑顔で充実感に満ち溢れた顔をしている。まあ彼はあくまで、外に《遊び》に行ったのだから、この態度も当然だと言う他ない。

扉を背に、ジェスチャー^{セツカン}を織り込み状況を語るウィル。もはや寝起きに、クリフに折檻^{セツカン}されたことなど、忘却の彼方であろうことは言うまでもない。

数分間は経過したであろうか。

「ウィル……」

話の途中、突然クリフが指で小さく手招きし、精一杯説明している彼を呼び寄せる素振りを見せた。

その行為に疑問を感じつつウィルは、「ん？」と、大人の心を攪^{クスク}る顔と声と仕草で、パタパタと小走りに近付いた。そして「なあに？」と、猫撫で声で語りかけてくる。

「あつ。おそと？ これって……？」

しかし数歩前進した時点でウィルも何かを察知したらしく、扉の外へ意識を向けた。そして咄^{トツ}嗟に背後へ視線を送る。

クリフも彼の言葉に頷^{ウケス}き、それと同時にアリサを己の背後に引き寄せた。

その時……

——バキッ！

豪快な破壊音と共に、店の扉が外側から粉碎された。無残に裂かれた木片が飛散、店内に突風が駆けた。

魔力の籠^コめられた。鈍く、しかし奇妙なほど耳に響く嫌な音の衝撃だ。破壊音の後、ビーンという耳映い金属の共鳴音と空気の振動音が場に残る。

その木片のいくつかが次々にウィルの頭に激突し、彼はそれが命中する度に呻^{ウメ}き声を上げた。

気付いていたのならば、避ければ良いものを。

「キヤー」というアリサの叫び声。彼女はクリフの腕にしがみ付き、突然の轟音に身体を竦^{スク}めた。

「いたた……って、だれ？ なにするの！」

一度は拳が入れた後頭部、ウィルは痛みを堪^{コラ}えそつと擦った。

意気軒昂し叫ぶウィルだが、頭には完全に瘤が出来ており、またも眼に涙を浮かべていた。

舞い上がった砂塵が納まり、皆が扉の外へ目を向ける。するとそこには複数の厳つい男が立ち塞いでいた。

そして彼等はズカズカと、休業日である酒場へ足を踏み入れた。

何やら見覚えのある男が3人。そしてその男達の中心に立つ体格の良い長身の男。

「アニキ、あいつです。あの賺した野郎がそうです」

特長の欠片も感じ取れぬ台詞を述べる不粋な男。その聞き苦しい声にアリサが顔を顰めた。

見覚えのある男達とは、先日馬車で乗り合わせた、その後アリサに絡んでいた下級のハンター等だ。

その台詞を聞き、クリフを睨み付けるアニキと呼ばれた男。筋肉質な身体に密着した黒い肌着は何とも気色悪いが、なかなかの覇気を放つ。

その豪胆な出で立ちは、一目で彼等のリーダー格であると判別できよう。

「なるほど。これは、お前等では太刀打ちできないわけだ」

ウォーハンマーの様な得物を右手に構え、それを肩に担ぐ。そして左手で濃い髭を撫でながら言った。

無能な手下どもとは違い、初見でクリフの実力を見抜いたらしい。

その巨大なハンマー。槌の部分に奇妙な紋様が刻まれ、それが不

気味な光を常に放ち続ける。

先刻の一撃は恐らく、この武器によって叩き込まれた代物であることは容易に想像が付く。

これは簡略化、量産化された魔具の一種。比較的強度の高い武具に、魔力に呼応する特殊な文字を刻んだ代物。中堅クラスのハンターに支給される武器だ。

これ等は俗に《イングレイヴ》などと呼ばれ、上級ハンター仕様の装備とは区別される。

確かに、純然たる妖魔滅殺用の兵器と比較すればその性能は見劣りする。だが、それでも下級妖魔ならば一撃の下に葬り去る、^{ホウム}圧倒的な破壊力を有す危険な^{ジュウク}戒具だ。

「アニキはなあ、Cクラスの資格を持つてるんだ。お前みたいな、少し腕が立つからってしゃしゃり出て来て、プロに齒向かう馬鹿は痛い目を見ることになる。覚悟しておけよ」

下っ端の二人目が、中央の男を指し声高々にそう語る。聞き飽きた、やられキャラを^{ホウフツ}髭髯させるこの語り口は、流石だ。

何にしても、ことが起こったのは昨日の今日。即日で親分を引き連れてのご登場とは、なかなか見上げた根性と言える。

もしクリフが居なかったら、アリサをお持ち帰にでもする予定だったのだろうか。アリサに向けた視線は、昨日のそれと酷似して厭^{イヤ}らしい。

だが、リーダー格の男だけは別格なようだ。絶えずクリフと、そしてウィルに意識を向け殺気を放ち続けている。

良くも悪くも、ハンターの資格の程度が実力の全てを示す基準で

はない。しかし目の前の男はそれなりの使い手であろうことは確かである。

誇れるリーダーを自慢するのも結構。笑いを零す彼等の、その自信の程も分かるというもの。

しかし、邪魔だ。

襲撃のタイミングの悪さに、クリフは強い不快感を露にした。^{アラフ}よくまあ、外の異変に無関心でいられるものだ。

「ウィル。外の様子を確認したい。悪いがその連中、片付けてくれ」

まるで塵の処理を命ずるが如く、相手を挑発する台詞を吐き捨てたクリフ。ハンター達の面を確認しようとしてもしない。

「うん。分かったあ。で、おじさん達。僕、怒ってるんだからねっ」
既に彼は返事をする以前に、その男達の前に立ちはだかっていた。口調は相変わらずだが、表情に怒気が満ちている。

頭をさする小さな手、膨らませた柔らかい頬、涙の滲んだ円らな瞳。いかんせん外見上の迫力に欠ける。

だが彼なりにその激昂を表現し、ハンター等の顔を見つめていた。

ゾクツと身体を震わせたのはリーダー格の男のみであろうか。

他の雑魚どもは洗練された彼の殺気を読み取ることすら適わない。ウィルを見下ろし、シッシツと、まるで動物を追い払うような態度で彼を愚弄する。^{グロウ}

「おいおい。そりゃ怖いなあ、お譲ちゃん。でも、おじさん達を怒らせると、酷いことしまうぞ?」

含ませた笑いは、蔑むといふより、嘲弄する^{サゲス}と表現した方が適切であろうか。子供などまるで眼中にないといったご様子だ。

「でもこの子、かなり可愛いなあ。俺、持って帰っても良いか？
たまにはこんなのも、ってな」

などと仕舞いには、雑魚の内の一人在、息遣いを荒げて卑猥な台詞を言い始める始末である。

そしてその言葉に合わせ、ハハハと笑いが立ち込めるわけだが、
下衆の窮みだ^{キウ}。

それを聞いた時のウィルの表情。彼が何を言いたいのか、すぐに読み取れる。

まず。僕は男の子だ、と……

尤も^{モト}、仮に男でも構わないと考える可能性がある。という卑しい疑惑は黙殺せざるを得まい。何にせよ、悍ましい^{オン}にも程がある。

「おい馬鹿ども。いつまでも下らねえことほざいてるんじゃない。
お前等、一体ここに何しに來たんだ。ああ？」

リーダー格の男の、迫力満点の荒々しい叫び声が場を引締めた。
男の迫力に気圧され、つい今しがたまで下賤な^{ゲセン}笑みを浮かべていた部下達の表情も、鋭く変わった。

「おじさん達、なんか、きらい。僕、本気になっちゃ——」
「止めてください！」

キインと耳に響く高い声。すぐ隣に居たクリフは方耳を押さえ、
苦悶の表情を浮かべる。

突然自身の台詞を妨げられたウィルも、目を丸くして背後を振り返った。

無論、アリサだ。彼女がその童顔に似合わぬ力強い、しかし透き通った声で吠えた。

そして叫び声の後アリサが、怖^{オシケ}気を押さえ込みウィルの更に前へ足を踏み出した。そして彼とハンター等との間を堰^セく。

その場にいた者全員の視線が、彼女へと注がれた。

「きよ、今日は、店はお休みです。だから。お引取り下さい」

全ての恐怖を振り払ったというわけでもなさそうだが。ウィルを背に、堂々たる態度を見せて忠告を発するアリサ。

その姿に、クリフもほおと関心の意を示した。

無論、クリフ等の实力を知らないが故の行動であろう。

格別気の強い娘ではないのだろうが、なかなかの根性を見せるものだ。

どうやらこの言葉。自身の見栄やプライド、店の保護など、私利私欲の念が表れた類の代物ではないらしい。言葉の端々に相応の気迫を感じる。

相手をハンターと承知の上で、それでもクリフ等を庇^{カバ}おうとする心意気は見事と言える。やはり彼女の、その人を惹^ヒき付ける魅力の根柢は、単に優れた容姿だけではないらしい。

しかし、そんな彼女に対し、

「お、姉ちゃん。今日は俺達の相手する気になったのか？」と、「俺達はその色男に用があるんだ。邪魔すると、虐めるぜ？」と。再び口元を緩めたハンター達が、口々に進歩の欠片も見取れない台詞を浴びせた。

「クリフさん達は、宿のお客様です。お願いですから……ん？」

一步も退かぬアリサだが。クイツと、背後から、スカートの裾が引つ張られた。

己を奮い立たせ必死に説得を試み最中の彼女も、出端を挫かれ台詞の途中にも拘らずそちらに視線を送った。

「わああ。アリサ、なんかかつこいー！ でも、ダメだよ？」

無論、その犯人はウィルだ。彼は眼をキラキラと輝かせ、敬慕の念と共に彼女を見上げた。

「ふう。アリサ。雇い主が傭兵を守ろうとしてどうする。俺達の仕事を奪うな」

ポンと左肩に優しい感触。アリサはそちらに向き返ると、隣にはクリフの姿があった。彼は惔然として溜め息を付きつつも微笑んだ。

「それに、己が蒔いた種だ。自分で、刈る」
確かに。至当なり。

「え？ え？」と首を左右に振るアリサは、彼女を挟むようにして立った二人に腕を抱えられ、後方に追い遣られてしまう。

そして彼女はオロオロしながら、自身の前に立ち戦闘体勢を取る二人を呆然と眺めた。

「ウィル。解っていると思うが、店をこれ以上破壊するなよ」

「……はかい？ 僕が？ なんで？」

惚けているのか、ふざけているのか。それとも、理解する気がないのか。

正確には、破壊させるな、だが。念のための忠告も、彼には届かないようだ。言い方を変えても、やはりダメなものはダメである。

説明は不要と思うが。ウィルが《遊び》始めると、仮に格下相

手でも周辺には甚大なる被害が及ぶ。ことが予想される。昨夜の轟音が良い例だ。

彼はまだ《慎重》という言葉の意味も、知らないのだから……

「……お前等は退いている」

部下達を押し退け、男が巨大なウォーハンマーを構えた。

第二話・邪の刻印「4」

足元の小石を気に掛ける時。それは、その石に躓^{ツマ}かされた時であろうか。

やはり何であれ、半端な力を行使し問題解決を図れば、それ相応の代償が付きまとうものだ。今現在の、目の前の状況がまさにそれだと言えよう。

雑魚とは言え奴等はハンター。その多くが劣弱な輩に変わりはないが、徒党を組まれると質^{タチ}が悪い。好き勝手に暴れられては、自身は如何様に守れようと、店はいくつあっても足らない。

その名は知らぬが、眼前の大男が背負うウオーハンマーは奇怪な音と光を放ち続けている。実力の程も不明だが、厄介な代物を振り回させて奴の、店の解体作業を黙殺する訳にもいかないだろう。

「ウィル。やはりお前は雑魚と遊んでいる。仕方がない。あの木偶^{デク}は俺が排除する」

前進しようとするウィルの首根っこを掴み、クリフはそれを静止させた。

「ええ〜？ やあつ。見てよ、このあたまあ。僕だけひどい目にあつて……ん？」

彼は自分の後頭部を指差し、口を窄^{スボ}ませる。しかしそう言いつつも、恐る恐るチラリとクリフに視線を送った。

嫌な予感……

「ふぎやつ」と、悲痛な叫び声が木霊^{コタマ}した。コツンと、瘤^{コブ}の部分への無情な一撃。極弱の殴打を前にウィルは、後頭部を押さえ込み悶^{モン}ゼツ

絶する。

「お前が関わると、何かと時間が掛かり、被害も拡大し……………うっ」

「いたいっ！ ひどいつ！」

キツと睨み^{ニラ}を利かせる、潤ませた愛嬌漂^{ウル}う瞳。それに圧倒され、クリフは不承不承に彼の頭をさすった。

うっくと唸^{ウチ}りながら苦悶の表情を浮かべる彼の顔は、見るに耐えない。

「分かった。明日辺り、代わりに俺が存分に遊んでやる。だから、今は大人しく言うことを聞け。それで、良いか？」

そして、やれやれといった様子でその一言。膝を落とし、彼の額に自身の額を密接させ、溫柔な台詞を浴びせた。

頭を強く抱擁^{ホウヨウ}しながら、互いの吐息を感じる距離で眼と眼を合わせる。

ウィルはこのように説得すると、最も素直に言葉を聞き入れてくれる。二人が何かしらの約束を交わす時はいつも、こうして額を合わせる。

戦闘中だということは、今は置いておこう。あと、二人の行動を目に動揺したアリサの挙動が乱れたことも、一先ず棚に上げなくてはなかるう。

しかし流石に、子供の扱いには慣れているようだ。

「ん。分かったあ。じゃあ、僕は——」

その様はまるで、愛撫^{アイブ}され喉をゴロゴロと鳴らす仔猫。一瞬でその表情に、普段の柔婉^{シュウエン}な色が戻った。

だが、その直後再びあのバキツという豪快な音が鳴り響く。

案の定と言う他ないのだが。前方にて二人は、鈍器で物を破壊する音と、空気を激しく振動させる衝撃をその身を感じた。

やはりウィルが関わると、何かと被害が拡大する。

「てめえ等。やる気、あるのか？」

碎片と化したテール。その極微の破片を見るとやはり、これは単なる打撃による衝撃の類ではないらしい。ビィンという耳障りな余韻^{ヨイン}が、それを物語っている。

「抑^{ソモソモ}、やる気など微塵^{ミジン}もないが、仕方があるまい。その机と扉、高く付くぞ？」

立ち上がったクリフが、ウィルを解放する。そして男に少しずつ歩み寄り、薄っすらと笑みを浮かべながら言った。見上げている視線は、明らかに相手を見下している。

あの槌、視たところ周辺の空気を高速で振動させる機能を有す。恐らく自重による殴打と、超振動させた大気による揺り潰^スしが攻撃のメインであろう。《イングレイヴ》がなされた武具の中では、比較的珍しい部類に入る。

長身のクリフより尚長身の大男、その横幅は細身のクリフとは比較にならない。両手で構えるハンマーの全長は1メートル50を優に超える。

185もの上背^{ウツセイ}を誇るクリフが、首を上げて相手の顔を睨んでいた。

「てめえ、なかなか腕は立つようだ。丸腰とは良い度胸だな。…潰すぞ？」

「……なに？ 俺に武器を握れ、と？ お前如きを相手に？ なかなか面白いことを言ってくれる」

ふっとクリフの口から息が漏れる。無論それを前に男は、目を血走らせ、額に血管を浮き上がらせ、憤怒フンヌと共に彼へ向けて鋭い眼光を放った。

腰を落とし体勢を低く構え、両の腕で堅く戦の槌を握り締めた。その表情を見れば、彼の闘志の程は解る。

ビキビキッと軋キシみをあげて両腕の筋肉が膨張し、徐々に槌へと魔力が注ぎ込まれるのが目に映る。

「色男がつ。醜く潰れて、死ねえ！」

そして刹那セツナ、闘気が爆発する。彼は脇を閉め、腰と腕を限界まで撓シナらす。そして、怒号と共に得物を振った。

怪力を誇るであろう男が振るう、超重量の鋼の塊を横一線に薙ナぎ払う一撃。物質の抵抗を無視して全てを粉碎するであろう、高速で振動させた空気を纏う打撃。命中すれば、人体など容易に肉塊ニツカイと化す破壊力を有すであろう豪快な攻撃だ。

無論。命中すれば、の話だが。

男が体重移動、初動を行った時点であろうか。クリフの嬾シナやかな脚が彼の腹部へ突き刺さったのは。

半身を取つての、右の横蹴りが男の水月に減り込んだ。ふわりとゆっくりと靡ナヒく長いコートの裾と金色の髪。しかしそれとは対照的に、蹴撃は鋭い。

まだ槌はクリフの遙か左前方。クリフの動きと比較すると、迅いはずの男の動作も、まるでコマ送りの如く遲鈍チドンに感ずる。

身体が九の字に折れ、不快な喘アエぎ声をあげる。

その後男は前のめりになりつつも、強烈な蹴りの勢いと衝撃により、その巨体を後方へと吹き飛ばされた。

手に握るウオーハンマーが入り口の、木製の淵^{フチ}に衝突し、その部分を激しく抉^{エテ}り取る。だが勢いは、その触激時の影響など微塵も感じない程に凄まじい。

そして店の戸口の外へ弾かれ、ズザアと地面をすりながら数メートル転げ回った。

「ふう。目障りな輩が多くて困る。……と、流石に加減が過ぎたか」
おええと嗚咽^{オエツ}と共に胃の中の消化物を全て吐き出し、男は悶^{モダ}える。そして跪^{ヒザマス}き、しばし激痛に呻いた。

まさに一瞬。電光石火とはこの様を指すのであろう。その時のアリサと、そして他のハンター達の驚きようときたら。言葉を失い、ただただその光景を呆然と眺めるだけだった。

「ぐっ、がはあっ……てめえ、一体」

ダメージによりガクガクと震える脚をハンマーの柄で支えながら、男は何とか立ち上がることに成功した。

だがその表情は、恐怖と激痛に歪む。通常では考えられない程の脂汗^{シタタ}が滴り、再び嘔吐^{オウト}をもよおす。

「ここで始末すれば事足りるのだが、この店をお前等^{ゲセン}の下賤な血で汚したくはない。それに、後片付けも面倒だ」

クリフは男の質問に耳も傾けず、雑魚のハンター達に睨^{ワス}みを利かせた。口ではそう言いつつも、その殺気は僅^{ワス}かたりとも衰えない。

そして一呼吸置き、

「……消える」

空気が、響^{ドコ}めく。

その一言に、ハンター達は自身の武器を握ることすら間々ならず、情けない遠吠えと共に蜘蛛^{クモ}の子を散らすが如く逃げ去った。己の兄貴分を場に残したまま。

「なかなか有能な手下だな。お前も、早々に立ち去るがいい」

雑魚とは違い、無駄に威圧を振りまく必要は皆無。多くを語るも不要。既に男の闘志は、完全に消え去っていた。

そして槌を支えに立ち竦^{スク}む男も、無言のまま姿を消した……

場の緊張が解けず、アリサはまだ一言も声を発することが出来ない。安堵^{アンドン}が訪れるはずのこの状況、なのに、足が竦む。

如何にアリサが素人であっても、クリフの恐ろしさはヒシヒシと伝わってくる。彼が容易く退散させた相手は、ハンターだ。内一人は、中堅クラスの。

彼女の、脳内の混乱は治まらず、暫らくは現実逃避に明け暮れていた。

そんな中ウィルが、クリフの背によじ登った。そして肩に負ぶさり、彼の耳元で囁^{ササヤ}く。

「遊ぶって約束だからねっ」

「俺が約束を破ったことなど、ただの一度でもあるか？」

クリフは、頬^{ホオ}へ頬を合わせ何度も擦^{コス}り付けてくるウィルの頭を撫でた。頭を撫でると言わんばかりの動作だ。

そして、それを嬉しそうに受けるウィルは、喜色満面の笑みを浮かべた。

出番を失い聊^{イササ}か不服そうなウィルではあったが、先程の約束がよほど嬉しかったと見える。もう不満云々は忘却の彼方らしい。

「ん。やぶったことはないけど。あ、でもお、今回は《存分に》って言ったからね！　つかれたあ、とか言って休むのは反則だよ？」

「……賢くなつたな。まったく、誰に似たのやら」

台詞とは裏腹、彼はやや嬉しそうに言った。

再び現れた、普段のほのぼのとした光景。それを目に、アリサがはっと我に返った。

「あの、お怪我は……？」

そしてクリフに駆け寄り、彼を心配そうな面持ちで見つめ、その身を案じた。

「済まなかつたな。机と、扉。すぐに直してやりたいところだが、今はやる必要がある。行くぞ」

ウィルを引き剥がし、アリサの肩へポンと手を乗せた。するとその瞬間、アリサの、彼へ対する恐怖心やら何やらも雲散し霧消（ウンサンノムシヨウ）する。そして、張り詰めていた緊張が途端に切れたためか、足の力が抜けフラツと彼の胸に凭れかかった。

唐突に理解する。

同じ《暴力》でも、他のハンターのソレとは全く別格だということ。そして先程の、額を合わせたウィルとのやり取り。アレに対し嫉妬に近い感情を抱いていた自分の卑小さを。

などとアリサに、自身を理想の男性像にまで昇華されてしまったクリフは、どうにも困惑を隠せないのだが。彼の拳動の全てが素なのだから仕方があるまい。

向けられた純真無垢な憧れの眼差し。否応無しにその彼女の想い

を、理解させられた。

「で、ウィル。何処にその男の死体が？」

「あつれ〜？ おつかしいなあ。あ、でも、ほら。あとがあるし」
クリフは惚ける^{トボ}ウィルの頭を、上からグリグリと押し付けた。

領主の屋敷の前。

既に人の集まり消え、そこへ残されていたのは、グラエムの亡骸^{ナキガラ}が置かれていたであろう赤い痕。

そして、数十メートルに渡り広がる、引き裂かれた大地の跡だった。

「先程の地震と轟音^{ゴウオン}。原因はコレ、か」

人外の力が引き起こしたとしか到底考えられない、巨大な陥没。これは町全体を震わせた、凄まじいまでの衝撃が生み出した作品であろう。

やはり、何かある。

周辺に濃く漂う、胸焼けを起こしそうな醜悪な気。いや、この嫌なオーラは昨夜から町全体に蔓延^{マンエン}し、人の感覚を狂わす。

躓かされた小石如きに不快感を露にしたのは、恐らくこの邪気が気に障ったからであろう。

それは陽の光を遮り、空気を不味くする。温かさを奪う冷酷な霧。目には決して映らぬが、確実にそこへ存在している瘴気だ。ショウキ感覚が鋭敏な者であれば、町に足を踏み入れた瞬間に不快を覚える。

本当に、胸糞ムチクンの悪い魔力だ。

第二話・邪の刻印「5」

一階のホールはなかなか見事に破壊されている。引き裂かれた床、打ち抜かれた壁。

無論、ウィルが関わったのことだ。昨夜に轟いた騒音の理由も良く解る。

「そうですか。あなたが、あの有名な……」

丁寧な口調ではあるが、陋劣ロウレツな、と言わざるを得ない。品性に欠ける声が聞こえる。

目の前には巨大で豪華なテーブル。その上に並ぶ料理も、少しもそれに見劣りしない。

その部屋自体の構造、そして装飾品の数々も流石である。部分的にだが、電力の供給がなされているらしい。天井に釣られたシャンデリアは優雅に光る。そして二階建ての建物は、その大きな窓から町の様子が一望できる。

辺境の人間が住むとは思えないほどの贅沢さと言えよう。

因みにここは、領主の部屋だ。

「世辞は良い。それに、もう昔の話だ」

やや低く、しかし澄んだ声がそれに答えた。

下品な男に対峙するは、長い金髪と頬の古傷が特徴的な若い男。この年齢に似合わない硬い口調。勿論、クリフである。

宵闇ヨイヤミの迫る時間帯。クリフは独り、領主の屋敷を訪れていた……

縦長のテーブルの先には一人の男が座り、その豪勢な料理を口に

している。当然、クリフにもそれは差し出されていた。

因みに、その男の周りには数名の美女。極薄で裸体が透けて見える、何とも色欲を唆る衣類を身に纏う。

彼の世話係か、情婦か。どちらにせよ、醜い男には似つかわしくない。それだけは確かだ。

「いえいえ。その名、こんな辺境にまでも轟いておりますとも」
高級な服に身を包む中年男の名は、ゴードン。この町の領主である。

これ程の料理を毎日口にしていれば、良く肥えるわけだ。そのずんぐりとした体格は、彼の持つ財力の大きさを示している。

ここは、辺境では比較的栄えた町。その領主だ。確かに、納得はいく。

「お会いできて光栄です。でも……」

彼は入り口にて、クリフが《スレイター》の名を出した途端にこの部屋まで快く迎え入れてくれた。彼の特殊な衣服を一目見れば、判る者であれば判る。普通ではないと。

しかし今、ゴードンは目を細めてクリフの顔に視線を送っている。でも……に何が続くのか、言うまでもあるまい。

お前は本物なのか、と。

するとクリフはコートを捲り、腰から一本のナイフを取り出した。そして、それを軽く前方へトスした。

ナイフとしては比較的大型で、そこそこ重量のある得物だ。宙を舞った後、ドスツと机上に激突し、その上の料理を大きく揺らす。

「……なるほど。確かに、クリフォード・スレイターご本人だ。疑って申し訳ない」

目の前に投げつけられた得物。それを一目見ただけでゴードンは立ち上がり、そのナイフを丁寧にクリフの元へ届けた。

白銀の短剣 《エディト》に刻印された、アヴァロンの特級市民権の証と、特Aクラスのハンターエンブレム。それは、時々大いに役立つものだ。

と、胸中は複雑な彼だが、ポーカrfフェイスは少しも揺るがない。綺麗な宝玉の嵌め込まれた美しいナイフを一度はまじまじと眺め、しかし再びそれを腰に戻した。

勿論、その証は既に更新期限が過ぎ、事実上何の役にも立たない。だが、それでもこの有様である。はったりを利かすには十分すぎる代物だ。

「それで。この町に……いや。この屋敷には一体、どんな理由で？」

ゴードンがその卑しい性情を隠し、笑顔でそう言った。

「俺は今、アヴァロンの市民でなければ、ハンターでもない。だが、一人の科学者ではある。この町に漂う魔力。それが気にならないはずがなかるう」

そしてクリフも、不敵な笑みを浮かべながらそう返した。

「そう、ですか。私はてっきり、例の《双刃》の件に興味がお有りか、と」

「双刃？ 関係ないな。興味を持つのは、あんたが行っている、いや、あんたが行わせている《研究》だけだ。今の俺は一介の科学者に過ぎない。と、人の話を聞いていなかったのか？」

相手の腹を探ろうとする領主に対し、クリフはストレートに自身の考えを伝える。

クリフが《研究》の名を出した時、ゴードンの顔が一瞬引き攣^ツったが、彼はそれをすぐに直す強かさを見せた。

身体能力の如何は兎も角としても、彼は政や交渉に關^アしては相当に腕の立つ男らしい。それは、活気のあるこの町の様子を見れば一目瞭然である。

そして、暫しの沈黙が訪れた……

「……何が、目的ですか？」

カチャカチャと、フォークとナイフが皿に当る音。それを立てながら、クリフが無言の食事を続ける中、突然領主が口を開いた。その声には抱かれた疑念と、同時にやや殺氣も込められている。

それを耳にクリフは、サツと軽く布巾で口を拭^{ヌグ}い答えた。

「別に。気になったから足を運んだに過ぎない。強いて挙げるのなら、知的好奇心、だろうな。科学者の性^{サガ}だ」

数秒ほどであろうか。ゴードンは思考を巡らせ、そして言った

「良いでしょう。お見せします。ただし……？」

クリフの顔を覗き込むように凝視する。無論、彼が何を言わんとしているのか、それは理解できる。

やはり、他言できない、何かしらの良からぬ計画を立てていたことに間違いはないらしい。

「何度も言っただけだ。俺はギルドとも、そしてアヴァロンとも縁

を切っている、と。それに漏らしたところで、何のメリットもない」
ふっ、と鼻で笑った。

「私の知人にアヴァロンの元市民がおりまして。詳しくはないのですが、研究室の存在自体は耳にしたことがあるんですよ」

と。懇切な口調で、聞きもしないことを語り始めたゴードン。

一階のホールの地下。隠し扉があり、クリフは彼に連れられ、そこを下っていった。

辛気臭い、飾りも素っ気もない石造りの通路。明かりは点々と置かれているものの、薄暗いことに変わりはない。

一直線の通路だが、見たところ20メートルはある。敷地の中にこれほどの地下通路を造るとは、胡散臭いにも程がある。

「実験、というほどの代物ではないんですが。ただ、優秀な科学者を一人飼っていました。3ヶ月足らずで、なかなかの成果を挙げてくださいました」

3ヶ月？

まさか。というより、やはり。であろうか。無論クリフは、何を聞いても表情を崩さない。

「もう研究そのものは、疾うの昔に完結しているらしいんですが。でも流石に、こんな辺境では資料や機材も不足していました。彼女にその研究の一部を再現してもらった、というわけです」

その話をしている時の、表情を緩めた領主の顔は、何とも醜い。しかし、彼女？

予感次第に確信へと変わった。

通路の先には鋼鉄製で、更に鍵付きの堅牢な扉が設置されていた。そしてそれを開けると、場の雰囲気が一変する。

なかなか、綺麗な部屋に出た。

赤い絨毯ジュウタンが敷き詰められ、地下であるにも関わらず煌々（コウコウ）と灯りが焚タかれている。装飾品も相当なものである。

部屋の広さ高さも相応に。換気が不可能なこと、日光が差し込まないことを除けば、領主の部屋に勝るとも劣らぬ立派な造りである。どうやらこの男。その《優秀な科学者》とやらには、それなりの待遇を施しているらしい。

確かに実験室、といった様子ではないが。乱雑に並べられた本と、この辺では珍しい薬剤の数々。そして《イングレイヴ》に使用する特殊な器材だけは無数に転がっている。

クレアの面影を目にした時点で。そして町に充満する魔力を感じた時点で。大まかな事情は察していたのだが。クリフの予想は見事に的中したらしい。

その部屋の中央。大量の本に囲まれたテーブルにて、椅子に腰掛ける女性が目に付いた。頬杖ホオツエを付き、憂慮の面持ちを浮かべる。しかし美しい女性だ。

「彼女はクレア・メラーズ。3ヶ月前、偶然の拾い物として「クリフの反応を見て、すぐさまゴードンが解説を加える。」

灯された明かりが彼女の、その髪の赤茶色をより引き立たせる。アリサと同じ色だ。しかしやや短く、少し先端が外側を向いている。

その横顔も、アリサと非常に似ている。体格は、そして雰囲気は彼女を少し大人にした、といった様子であろうか。

もう12年も経つというのに、根本的な部分は何ら変わっていない。懐かしい顔だ。

彼女は扉の音に反応し、こちらをキツと睨み付けた。そして領主の顔を確認すると、これまたアリサのそれを少し色づぼくした感じの声で、吼えた。

「もう、処置は全て終わったはずです。いい加減、娘に会わせ——」
だが、クリフの顔が目に入るや否や、すぐその表情に驚きの色を浮かべた。

「え？ あなた……」

彼女は、突然の訪問客に目を丸くした。そして、

「もしかして。クリフ——ちゃん？」

自身が口にした単語に戸惑いを覚えながらも、彼の名を呼びかけた。

はあと、クリフが顔に掌テノヒラを当て、溜めた息を漏らした。
場の空気が全く読めず、想いをすぐ口に出すのは娘と同じだ。そしてクリフの表情を窺ウカガう限り、その性格も相変わらずだ、と思わざるを得ない。

何とも緊張感のないやり取りだが。ゴードンは二人の様子を見て顔を顰シカめる。

「彼女をご存知、だったんですか？ クリフォードさん……」

「当然だ。彼女は高名な学者、知らぬはずはないだろう」
即座に言葉をつき返した。

「ああ、それと。そう言えば、ここを訪れた目的は彼女だった。伝えるのを忘れていたらしい。悪かったな……」

彼なりに感情を抑えていた先刻までとは一変。台詞と同じく、非常に太太てしい。返答する彼の態度も表情も、今まで以上に。

立ち上がり近付こうとするクレア。クリフは、手を前に差し出してそれを静止させた。そして部屋の様子をもう一度眺めた。

彼女の当時の研究内容は熟知しており、床に転がっている道具類を一目見れば、ここで何が行われていたのか。それは容易に想像が付く。

「それで、その研究。というより処理は、既にあんたに施されているというわけか」

彼は腕を組み、余裕を見せながらもゴードンを睥睨する。そして、
加えた。

「……で。ならばもう、俺の出る幕はないはずだが。それに、元々畑違いだ。——あんた、何故俺に見せた……？」

この屋敷に蔓延する露骨な邪気。隠す素振りすら見せない殺気。目の前の、怯懦で劣弱極まりない中年から不自然に放たれ続けている魔力。それに、気付かないはずがない。

「はっ、喰えない小僧だ。何、せっかく《力》を手に入れたんだ。——私ももつと《上》を見たいんだよ。ただ、それだけだ」

暫らくして、ゴードンの態度も豹変した。あの目障りな、薄気味悪い笑みも瞬時に消え、容易くその本性を曝け出す。

「ふっ。《上》、か。奸計を巡らすのは結構だが、小物の考えそう

なことだな。この町をここまで発展させてきた男だ。もう少しマシだと考えてはいたのだが……」

ゴードンの邪気で部屋の空気がピリピリと震え出すが、クリフは全く怖気を見せない。

「どうやら思い違いだったらしい。下衆^{ゲス}はやはり、下衆か」
それどころか、彼を嘲^{アザケ}り挑発する。

「そうやって見下した眼、気に入らないですねえ。まあ、吼えなければ勝手にどうぞ。しかし、流石に言うことが違いますなあ。優秀でお強いクリフォード・スレイター様は」

再び丁寧な口調で言を発するが、それは形だけだ。卑しい表情は変わらない。

だがクリフは、冷淡な薄笑いを浮かべて即座に返した。

「ならば存分に見上げて貰って構わない。……上を向くのが、好きなだろう?」

クリフが彼の皮肉を軽く受け流すと、ゴードンはその台詞を攻撃的な代物へと変えた。そして多量の殺気を彼に送った。

「が、餓鬼がつ。言わせておけば」

さぞ神経を逆撫でする一言であったのだろう。耳にした瞬間、ゴードンの額に血管が浮き上がる。

「……まあ良い。貴様の《スレイター》と《クリフォード》の名は手元に置くだけでも十分に効力を発するんでね。そのうち貴様には、貴様の専攻分野で協力してもらうつもりだ」

しかしすぐさま、彼は普段の冷静さを取り戻した。目の前の若造相手に翻弄され、我を忘れて己の姿に嫌悪したのだろう。

もはや噂されていた、臆病だった領主の姿はそこにはない。今の彼

は、自信に満ち溢れている。これだけの魔力を放つのだ、その根拠も納得できる。

「それはそれは、大層なお考えだ。だが。そうやって上ばかり見ていると、何れ足を掬^{スグ}われる。例えば、今すぐにでも、な」

そう言ってクリフが腰に手を忍ばせようとした、瞬間だった。ゴードンが手を翳^{カサ}し、それと同時に、槍を持った大量の兵士がこの部屋に押しかけてきたのは。

よくもまあ、これ程の人数を。一体、何処に隠れていたのやら。と、クリフは呆れ顔でその様を眺めた。そして状況を見守っていたクレアは、その光景に肩を落とした。

考えを改めなくてはならないだろう。この男、それなりの《力》を得たのだろうが、臆病な性格は引き摺^ズったままらしい。

衛兵など、クリフにとっては別にどうということもない相手だが、丁重なことにクレアにまで矛先が向けられているのだから困りものである。

兵士の数は15名程度。無論クリフ自身は、予め伏兵の気配には気付いてはいたのだが。

「……協力してもらうさ。勿論、強制的に、だが。くくくつ」
豚のように醜悪な、薄気味悪い笑み。笑い口調も気持ちが悪い。

クリフは一先ず、武器を床に棄てた……

第二話・邪の刻印「6」

最近、色々なことが起こりました……

3ヶ月前の、母の他界。でも、未だに信じられません。それはきつと、その《死》をこの目で確認していないから、かも知れないけど。でも、受け入れられないんです。

もしかしたらまだ生きているんじゃないかって。何の根拠もないのに。でもでも、整理できないだけで本当は、頭の中では解っているんだと思います。そんなはずはないって。

それなのに私の《時》は、3ヶ月前から止まったまま。ずっと受け止められないから、時間は、私の傷を癒してくれない。本当はそれも、単なる甘えだって解っているのに。でも……

昨日、不思議なお客様が来ました。ウィルちゃんと、クリフさんです。

ウィルくんは可愛くて、素直で良い子です。こんなこと言ったら怒られちゃいますけど、何か、女の子みたい。

昨日は文句も言わずにお手伝いしてくれて。きっと意識して、ではないと思うんですけど自然と、落ち込んでる私を励ましてくれたり。本当に、優しい子。

ウィルくんみたいな弟、欲しかったな、なあんて思います。でも仕方がないですよ。私には父がいなし、その顔も知らない。それは良いんですけど、母が男の人と付き合うなんて、そんな光景は

想像もできませんから。

そしてクリフさん。実は私、多分、一目惚れしちゃってます。やだ、何か恥ずかしいですね。クリフさんって凄く格好良くて。でも、初めはそんなこと、全然見てなかった。

最初に顔を合わせた瞬間、まず、あの人の目に意識が吸い込まれました。心が奪われたというか、胸に何かが突き刺さったと言うか。あの時は何も考えられなくなって、でもドキドキして身体が変に温かくなって……

その後も、冷たいって感じた時もあつたけど、本当は凄く優しくつたんです。何故かあの人には、悩みもすんなり話すことができてそして色々とお話を聞かせてくれて……

まだ会ってたった二日なのに。こんなにも心を許してしまったのは、生まれて初めて。本当に、不思議な人達です。

そう言えば私、町の領主に狙われているらしいんです。領主に、というより多分そこで雇われている傭兵に。理由は解りません。

初めは何で私なんかが、って思いました。もつと美人な人は沢山いますし、私はそういった経験が全然ないです。でも、その傭兵って、死んでしまったみたいです。でもでも、私はまだ狙われているみたいで、もう何が何だか、全然解りません。

あ、あと。変なハンター達をクリフさんが追い払った後。凄い勢いで足元が揺れて、地響きが聞こえました。町の中心からです。

その原因は、他の人の話では。領主が、集まった人達を威嚇する

ように、地面を素手で叩きつけたからだ、と。でも、とても信じられませんよね。人間の力で、あんなに大きな地割れを起こすだなんて。

あ、そうだ。クリフさんって、母のことを知っている……みたいですよ。そして私の幼い頃のこと。私は全然覚えていないんですけどね。

これって、もしかして、運命なのでしょうか。廻り合い、みたいな感じで。なんか、素敵……

素敵だけど、今は。ああ。もう一度ママに、会いたいなあ――

等々。^{ホオハ}雑念も多いようだが、アリサは想う。美味しそうに夕食を頬張るウィルを眺めながら。そして彼女は、朝聞いたクリフの話を思い出していた。

これは今から半日ほど前の話。当時の彼女は、その思考の殆どが停止していた。そのため会話といっても、彼女自身はさほど考えを伝えていない。だが、その内容は良く覚えている。

「領主に雇われたとされる傭兵だが。それは《双刃の戦鬼》と呼ばれる元ハンターだ。元々俺とウィルは、その男に会う目的でこの町を訪れた」

クリフの表情はまた鋭くなった。口元を緩ませクレアの話をしていた先程とは若干様子が異なる。が、無論その言からは、冷たさなど感じない。

「まあ、それは良い。今は、他に気になることがある。まず、お前は領主に狙われている、との話だったが。その領主とやら、恐らく、普通ではないな」

なかなか話の本筋が見えてこない状態が続く。これは、クリフの悪い癖だ。知識のレベルが異なる故、相手との話が噛み合い難くなる。彼自身が思案に耽_{フケ}っている時は、特に。

「あの、普通ではないって。その……」

「真に警戒すべきは領主、だということだ。あくまで可能性の一つではあるが。お前がクレアの娘であることを踏まえると、残念ながらその全ては否定できない」

まるで理解は出来なかったが、何故か納得してしまうアリサだった。

「お前は昨夜、領主に身体を狙われている、と言ったな？」

「え、あ、はい。領主は、その凄く好色で。すみません、スレイターさん。こんなこと聞くななんて失礼かも知れませんが、町の遊郭はご覧になりましたか？」

クリフは首を横に振った。だが別に、それ自体はさして珍しい話でもない。

力が全てを支配する、男尊女卑の腐った世の中だ。ハンター達の鬱憤_{ウツブン}の捌け口_ハの一つ二つを置かなければ、強姦の類は各地で頻発す

るだろう。しかし、この町は異常だ。

余談だが、社会には表の交易と裏の交易と、乱暴な分類だがその二種が存在する。この町は特に外部との繋がりが強いと聞く。

辺境での町の発展は時として、その小さくも完結された社会に大きな闇を生むこととなる。

町を統治する権力者がまず何を考えるか。何を欲するだろうか。目の上の瘤であるハンター達には一切の抵抗が許されない。如何に経済を発展させようとも、町を質的に拡大させることは難しい。欲しい物があるうとも、辺境では入手可能な代物も限られてくる。

その結果、更なる弱者を求めるか。更なる快樂を望むか。それとも、全てが手に入る位置まで自身を昇華させるか……

どちらにせよ身勝手な行為の果てに生まれるのは、救いようのない貧富の差だ。貧しい中で更に苦しむ極貧の者。人間にして人間として扱われない、家畜の家畜が生まれるわけだ。

男ならば労働用。女子供ならば愛玩用。用途は違えど、奴隷に変わりはない。

まあアリサ達の生活は現に、相応に裕福だ。だがその生活もまた、権力者の一声で脆くも崩れ去る、何とも儚い存在なのである。

「前に領主の屋敷に配属されたハンター達も、凄くて。目を付けた女性や。特に奴隷の子達を見ると、すぐに乱暴して……だから例の

傭兵も、って。そう噂されてたんです」

そして彼女に、その白羽の矢が立てられた、と。表通りに堂々と遊郭やら人身売買の店やらが立ち並ぶこの町。そう解釈しても不思議はないだろう。

「……あつ。な、何言ってるんだろ、私。スレイターさんに愚痴なんか言つて。ごめんなさい」

誘導された、というより、自然と言葉が出てきた、といった感じだろうか。つい数分前までは息苦しさすら覚えたというのに。

「気にするな。相談を持ちかけたのは俺だ。それに昨夜、話を聞くと約束したはずだろう？」

彼は、慌てて頭を下げるアリサを宥めた。

心から慕ってくる者は拒まず。だが、上辺だけの浅はかな輩には極端に厳しい。それが彼の性格だろう。

「確かに、領主が狙っているのはお前の《身体》だ。だが恐らくその目的は、浅はかな色欲の類ではないだろうな。抱きたいだけならば、疾うの昔に手を下している」

投げ遣りな口調。これも彼の悪い癖だ。弁で相手の心を支配する素振りが、無意識の内に滲み出る。

「私の身体……？ でも私なんて、何の取り柄もないですし、全然美人じゃないし……何で私なんかを？」

もし隣で他の女性が耳にしたのなら、即座に殴られるであろう台詞だ。

「どうやら、何も聞かされていないようだな。まったく、困った母親だ」

そして多少間を空け、

「……まあ良い。お前には十二分に魅力がある。それは容姿だの、知識だの、そんな安い代物ではない。もう少し、自信を持て」
クリフもまた、他の男性が耳にしたら即座に、怒りにより襲い掛かるであろう台詞を吐いた。だが彼が発すると、女性相手には凶器と化す。

「え、そそ、そんな。私なんて……」

それ以上言葉は続かなかった。

ドキドキと、胸の鼓動が強まる。その音が、目の前で座っているクリフにすら届くほどに。

今の彼女の視野は恐ろしく狭くなっているだろう。もうクリフの顔しか目に映っていない。

「……だが良くも悪くも、平凡な人生は歩めないだろうな」

最後に、彼は小さな声でそう付け加えた。

まあ、ここで彼女に話が通じないのも無理はない。彼女本人に全く自覚がないのだから。

……本当に彼女は、何処にでもいる、少々顔の良いだけの女なのか、と。

しかし、相変わらずウィルの嗅覚は凄まじい。何の情報もなく彼女の、その身に流れる《何か》を感じ取ったのだから。流石のクリフも、それには驚きを隠せなかった。

「結局のところ、お前は貢物だろうな。もし時機が訪れ、領主がお前を捕らえたとする。然らばお前は、日の目を見ない、暗い場所で生涯を終えることとなる」

クリフも意気が揚がり、その語り口調も激しくなる。

「あの……」

「ん？ ……いや、すまない。昔の癖だ。どちらにせよ、お前が思っている以上に事態は深刻だ、ということだ。貞操を奪われるだけでは済まないだろう」

ポカンとしているアリサを見て、彼ははっと我に返った。何にせよ、教師には向かない性格だ。

「さて、物は相談だが。俺達は、宿代と飯代が足りずに困っているところだ。今、傭兵としての雇い主を探しているのだが……どうする？」

思い出したかのような台詞だった。クリフがチラツと彼女の顔へ視線を送る。

「え？ 傭兵？ って、どういう……」

ややクリフの顔に照れが見え隠れする。素直に言えない性格は相変わらずだ。

「昨夜、本音を聞かせる、と言ったはずだ。そう何度も自棄^{ヤケ}を起こされてはこちらが困る。報酬の代わりに、その身は護る。良い交換条件だろう？」

そう言われた瞬間、昨夜の記憶が蘇りアリサの顔が瞬時に、桜色に染まった。が、気持ちが落ち着く頃には、その意味を理解した。

結局のところ、クリフは自分を守ってくれる側の人間だと。大げさな話をして金品を巻き上げるハンターなどとは明らかに違う。目を見れば判る。彼の警告は本物で、その言葉も信じるに値する、と。

アリサは、はい、と大きく返したという。

「それと。この町は、危険だ。必ず《何か》が起こるだろう。その兆^{キザ}は十二分に在る」

突如、彼の顔から含羞^{ハニカ}む素振りが消えた。

「それは、領主が《何か》を起こすつてこと、ですか……？」

頭をフル回転させたのだろう。アリサの思考が少しずつ戻り始めた。

「いや。領主そのものはどうでも良い。だが《奴等》にとって辺境の町の一つや二つなど、家畜小屋と同程度の重みしかない。下手をすれば……」

彼がゴクツと息を呑^ノんだ。同じ真顔でも、深刻さの度合いが異なる。

「……町が、消える」

緊張が走る。彼の表情、どう考えても冗談の類ではない。信じられないが、信用はできる。それにここは酒場だ。遠くの町で実際に行われたと耳にしたことがある。

そして彼は、この名称を口にした。《狂悖^{キョウハイ}の矛》と……

もう外は夕闇が訪れる時間だ。陽が沈み、西の空が赤く染まる。賑わいのない酒場は、二人だけで食事をするにはあまりに広く、寂しい。だがそれでも、目の前の少年を眺めていると、その寂しさも和らぐのだろう。

この3ヶ月、たった一人で暮らしていた幼い少女にとっては。

「ねえ。アリサはごはん、食べないの？」

ウィルは夢中になってスパゲティ・ミートソースを平らげていたが、ふと自分を見つめているアリサに気を取られた。

彼の口の周りは、そのソースで見事に汚れている。アリサは席を立ち、そんな彼の口元を布巾で拭^{ヌグ}い、言った。

「うん。ちょっと、入らなくって。でも大丈夫よ！」

無論、彼女が何を悩んでいたのか、は言うまでもないだろう。ウィルと二人きりのため気が抜けたのか、憂鬱^{ユウウツ}そうな色を無意識の内に出してしまっただけ。

「ああ、分かったあ。それ《だいえつと》ってやつでしょ！」
暫^{シバ}らく考えた後、ウィルが閃^{ヒラメ}いた単語を口に出した。

「え……？」

……アリサは言葉を失った。どうやら、スタイルにはそれなりの自信があっただけ。

全体的に華奢^{キャシャ}だが、出るところは年相応に出ており、形も申し分ない。彼女がそれを、女性としての魅力だと認識しているか否かは別だが。

勿論、彼の発言に悪気があるとは到底思えなかったため、アリサは抵抗なく返した。

「うん。ちょっと、違うかなあ。少し考え事をしていただけよ？」

「ん……」。女の人は色々たいへんだって、クリフが言ってたの。
アリサもたいへんだねっ」

間が空いた。数秒の。

「そ、そうね。色々大変なの」

子供の、邪気はないが核心を突く質問は、時に大人を困らせる。だが二人のやり取りは、そんな和やかな雰囲気の中で行われていた。心を苦しめる悩みなど、何処かへ消えてしまうほどに。

「あ、そう言えばウイルくん。クリフさんは今どこにいるか、知ってる？」

クリフの名が出たため、ここぞとばかりに。しかし思い出したような素振りを見せつつアリサは、ウイルに質問を浴びせた。

「クリフ？ えっとお。なんか、女の人に会いにいくんだって。どうしても会いたい人がいるって言ってたよぉ？」

それを聞いたアリサの様子がどうなったのか、もはや述べる必要もあるまい。無邪気とは、恐ろしい……

暫しの動揺。流石に驚きを隠せないアリサは、肩を落とす。無論、クリフがその女性の下へ何の目的で向ったのかは、全く話されていないのだが。

問題なのは、この時間帯だ。

知人を訪ねるなり、きっとその関係は浅くはないだろう。下手をすると、町の名物でもある遊郭に出向いたのではないか。

等々、色事に関連する可能性が高い。彼女の妄想は次第にエスカレートしていった。

護るって約束したのに、と。

ショックからか、はあ、と溜め息を付く。そんな彼女にウィルが駆け寄った。

彼はアリサの隣に椅子を置き、そこに座る。そして彼女の顔を自身の側へと向けさせた。

「……アリサ、悲しいの？」

ずっと彼女の頬を擦る小さな手。彼の眼差しは真剣そのものだった。

若干話の脈絡から逸れた彼の発言に、少々困惑するアリサ。

「ええ？ ううん。そんなことないよ？」

アリサは頬を優しく触れられ、はっと我に返る。そして顔をゆっくりと近づけてくるウィルに、彼女は何故か胸を高鳴らせた。相手は子供だというのに。

「ほんと？ でも、なんか、悲しそう……」

「わ、私は大丈夫。クリフさんもきつとすぐに帰ってくると思うわ。それに、ウィルくんといると楽しいよ？」

やや声が裏返っている。クリフへの想いを誤魔化すつもりもないのだろうが。しかし、あまりに真顔なウィルに気圧されたようだ。

「ん、そうじゃなくって。ずっと。昨日も、今日も」

一呼吸置いた。そして、アリサの眼を真っ直ぐに見据えながら言った。

「ねえアリサ。……笑うの、つらい？」

その言葉にアリサは、ビクッと身体を力ませ、敏感に反応した。

「そんなこと……ないよ」

突発的な彼の台詞の意味を、アリサは漸く理解した。ヨウヤ大した洞察力だ。まるで心の内が読まれたかのように。

ウィルが見ていたのは、表層的な部分などではなく。もっと深い

……

するとウィルが突然立ち上がった。そしてアリサの手を取る。彼女はウィルの指示で片膝を立て、互いの視線を合わせた。

「ねえ。おまじないしてあげる！」

そう言っただけは、アリサの顔を両の手でしっかりと固定させた。

「……！ なになに？」

アリサは焦る。それはウィルが、彼女との距離を更に縮めたからだ。

その後彼は耳元に触れていた左手を一度は放し、そつと額に当たった。少々ひんやりしているが、暫らくすると温かみを感じた。そしてその手は、彼女の前髪を優しく持ち上げる。

「元気がでるおまじない。あとお、約束するときのあかし。だよっ！」

そのままゆつくりと、額と額を合わせた。彼等が昼間に見せた、アレだ。そして硬直するアリサの頭に手を回し、ウィルはそのままギョツと抱擁した。ホウヨウ

眼と眼が合う。吐息も身近に感じる。その様は、さながら恋人同士のキス。その直前に似ている。少しだけウィルの顔が大人っぽく見えたという。

流石に、幼いながらもクリフの影響を受けているだけはある。演技をせず、だが見事に心を攫さらってゆく。

だが、外側から門を開けるクリフと、内側からのウィル。行為自体は似ているが、その性質は正反対だ。

「元気、でた？」

額を離すと、彼が微笑んで言った。元々愛らしい顔だったが、今はその可憐さが一層引き立つ。

「うん。ありがとう……」

抱き締められずにはいられなかったのだろう。アリサは嬉し涙と共に、彼の身体を力強く懷抱カイホウした……

第二話・邪の刻印「7」

何ということのない過去の、記憶の1ページ。ここ暫らくは頭の片隅で、埃を被り眠っていた。

そんな、遠い昔の思い出話だ。

12年前。アヴァロンの研究機関から逃れるべく奔走した彼女と、その幼い娘に手を貸した。そして、事後処理の全てを引き受けた。ただ、それだけだ。

無論、簡明に事の概貌だけを述べるのであれば、の話だが。

現在ならば、彼女が取った行動も理解できるだろう。

身内を実験対象にする。それを許せる人間は、人間ではない。その研究成果が、例え後に偉大だと評価されたとしても。身内を救う代償として、例え多くの他人を捧げたとしても。

だがあの頃はまだ、胸糞悪い非常識な常識が。あの狭い殻の中の、歪められた思想が。

それが社会の全てだと、何ら疑わなかった。

世界の広さを、想いの強さを、知らなかった……

本当に良かった。幼き頃に、彼女のような人間と巡り会えて。でなければきっと、永遠に解らなかったであろう。

世の中には地位も名誉も、全てを擲ってでも護るべきものがあるのだ、と。

されど、気付くのが遅すぎた。

もうこの腕で抱きしめることなど、叶わないのだから。最愛の妹はもう、帰ってこないのだから。

だが、それでも。今は……

絶えず揺れ、安定しない光を放つ炎。

燈籠^{トウロウ}、と呼ばば良いのか。ランプではなく、特殊な装飾品の中で火が焚^タかれている。

そしてその光を目にすると、妙な気分になる。掴み所のない情景だが。これは、好きな色だ。

決して心が落ち着くわけではないのだが、何か吸い込まれるような。そんな不思議な気持ちになる。目が離せなくなるのは、何故だろう。

目に映る焰。彼はその紅炎を前に、想いを馳^{ガラ}せた。柄ではないと感^セじつつも。

焚^{セイ}かれた炎の所為^{セイ}か、部屋中に多少の熱気が帯びる。そして流石に地下室だけあり、やや空気が籠^コもる。

ここは四方が硬く鎖された密室だが、漂ってくる香りは快く、麗らかにすら感^セじさせる。

そうそう時間が経ったわけではないのだが、部屋の端。二人は壁

に寄り掛かり、無言のまま並ぶ。そして地べたに腰を落としていた。

床も、壁も、そして天井も。全てが石造りの部屋。敷き詰められた赤い絨毯は確かに高級感溢れるが、どこか冷たさを感じる。

しかし隣から伝わる温もりは、それを満たして余りある。

「クリフちゃん。どうして、ここに……？」

静けさを崩したのはクレアだった。特に気まずい雰囲気があったとは思えない。だがそれを耳にしてもまだ、クリフは口を噤み、正面の焔をじつと眺めていた。

「……ううん。久しぶりね。もう、12年になるかしら」

彼女はクレア・メラーズ。クリフよりも6歳ほど年上の女性だ。

そして、アリサの母親でもある。

「また会えるなんて。分からないものよね。でも、嬉しいわ……」

パチパチと音を上げる焔。そして高い彼女の声だけが、その密室に木霊する。

暫らくしてクリフは、顔を彼女の側へと向けた。すると彼女の髪と瞳が目に入る。揺れる焔と同じく、何時までも眺めたくなる好きな色だ。

そんな想いだろうか、彼の口元が自然と綻びた。ホコロ

そしてクレアの頭から足先までを一通り見回した後、ユウヤ漸く声を発した。

「ふう。相変わらず、のようだな」

と、年上の彼女に対し、敬語を使う素振りを全く見せない。だが、その語り口調は至極穏やかだった。

「クリフちゃんは、変わったわね。大人になって。そして本当に、素敵になったわ」

そう口に出しながらも、彼の左頬の傷を指でなぞった。だが、その傷のことなど何一つ追及もせず、ただ優しく顔を擦る^{サス}だけだった。まるで彼の、実の姉のように。その表情にも視線にも、深い愛情が籠められている。

クリフは彼女の瞳から目が離せなくなり、そのままじつと視線を合わせた。そしてクレアも、そんな彼の熱い眼差しを受け入れた。その後再び、暫しの沈黙が訪れる。

懐かしい、心地よい静寂だ。クリフにとって彼女が、過去にどのような存在だったのか、ある程度は予想が付く。

「さて、聞きたいことが多すぎて困るな。とりあえず、この状況を簡潔に説明して貰いたいものだ」

数分後彼は、クレアの手を取り、彼女を椅子に座らせた。そして自身も腰掛け、テーブル越しに向かい合った。

腕を組んでのクリフの態度は、何とも偉そうだと言わざるを得ない。

「えっと。それは……！」

クレアはやや目線を上げて考え込む。だが彼女は、その途中ではつと何かに気が付いた。

「何だ？」

「……どの状況かしら？」

惚^{トボ}けた顔をするクレアだが、その態度からはまるで悪意の類は感

しない。質問の意図を理解せず、申し訳なさそうな表情で彼の顔を覗き込んだ。

……消沈。クリフは肩を落とした。これは恐らく、天然だ。

「……クレアが捕らえられた経緯と、アリサの身体のこと。ここで奴に施した処置、等々。これで、良いのか？」

はぁ、と溜め息の後、呆れ顔で言った。

続いたのは、ウィルと同程度に要約が困難な台詞の数々だった。これで彼女が、元研究室屈指の天才だというのだから驚きである。

「そうか。厄介な話だ。だが、その《フォートレス》から送られたという手紙。気になるな……」

無論、クリフはそんな彼女の性格を熟知していたため、辛うじてその解読に成功したのだが。

彼が口にした《フォートレス》という名の町。その字の如く、要塞としての機能を備えた、辺境最大にして最強の都市だ。

その町の領主からの、科学者である彼女への誘いの手紙。それが全ての元凶となっているらしい。

「確かに。このレベルの町の、一介の領主風情がクレアの素性を知るはずはないからな。だが偽名を使うなり、を思いつかなかったのか。まったく……」

恐らく、現在ですら研究室は彼女の頭脳を欲している。それはアヴァロンへの抵抗を図る者達にとっても、何ら変わりはない。

確かフォートレスと、その周辺の町々では極秘裏に《解放同盟》なるものが組まれたと聞く。

優秀な人材を仲間に迎えたいという彼等の願望は解らないでもない。《イングレイヴ》の考案者にして魔術研究のスペシャリストだった彼女などは、特に。

が、厄介なことをしてくれたものである。何処で彼女の所在を掴んだのかは不明だが。身を隠す人間に対して、あまりに軽率な行動だと言えよう。

いや。領主のことも含め、どうにもその背後に、何やらきな臭い香りが露骨に漂っているのだが。彼はあえて口にはしなかった。

「ごめんなさい、クリフちゃん。でも私、この名前、捨てたくなかったから……」

「いや、いい。結果として、二人と再会することが出来たのだからな」

クレアはしゅんと落ち込む。娘と同じく感情がすぐに顔色として表れるその性格だ。心底反省してはいるのだろう。

しかし、非常に読み易い。クリフもその点に関しても、それ以上は言及しなかった。

「だが……」

だが……更に厄介な代物が身近に存在するのだ。彼の表情には翳^{カゲ}りが見られる。

「人体へ《イングレイヴ》を施すとは、なかなか奇抜な発想だ。これは、《アリサ》に関する研究の副産物、といったところか……？」
小さな呟きだったが、それを耳にしたクレアの顔つきが変わった。

ピクツと彼の言葉に、敏感に反応する。そして暫らく思考を巡ら

せた後、顔を強張らせて言った。

「ちよつと、クリフちゃん。そんな言い方って」

彼女のやや垂れた、優しい雰囲気^{マツ}を纏^{マツ}う目が少し引き攣^ツる。

今まで和やかでいた空気も、その言葉が発せられると同時に、痛々しいほどに締め上げられた。

「あの娘を、アリサちゃんを、研究対象みたいに言わないで。あの娘は……」

噛み付くように吼^ホえるクレア。しかしクリフは、即座に返す。

「そんなことは重々承知している。だが、主観を交えてでは話が進まないだろう。今は事実だけを教えて欲しい」

鋭い眼つきだ。その真剣さが窺^{ウカガ}える。のだが……

「……ふう。すまない、言い過ぎた」

落ち込みの色を更に強めたクレアは、再び口を噤^{シム}んでしまう。

クリフは彼女の態度の変化に気付き、すぐさま非礼を詫^詫びた。

どうにもペースを崩され、この母娘には振り回され放題のクリフであつた。

困惑したクリフは、場の繋ぎにと机上の資料を手にとった。

それは製本された、というよりは、彼女のメモ帳の様な代物だ。

揺れる炎の中では下手な文字で、更に殴り書きで記された内容を読み取ることは困難を極める。

だが彼はパラパラと連続して淡々と、素早くページを捲^{クル}りつつその中身に目を通す。そしてその内容に、次第に取り込まれていった（アリサ、か。なるほど、確かに素晴らしい。だがこれは、相当に危険だな……）

全てを頭に叩き込み、即座に刻んでゆく。彼が分厚い一冊の本を

読破するに費やした時間は3分足らず。

これはもはや、人間業ではない……

そして乱雑に並べられた本達を次々に読み漁^{アサ}っていった。彼女から事情を聴取するよりも、この手段の方が明らかに時間を短縮できるであろう。

一方クレアは、

「うう。ごめんね、クリフちゃん。あなたがそんなこと言う子じゃないって、本当は分かってたのに。私、また勘違いしちゃって。ごめんね……」

と、鼻を吸^{スス}り、涙を拭^{スグ}いながら言った。見事にワンテンポ遅れて彼女の、話の本筋を逸らす天部の才は、流石だと言える。

「……いや、俺も軽率だった。だが、そろそろ話を進めても良いか？」

彼はそう口にするとは一度は席を立ち、背後からクレアの頬に手を触れた。そして彼女が拭い溢した涙を、指でそつと払う。

もはや彼からは、クレアの応対ぶりに戸惑う素振りなど微塵も感じ取れない。

「うん。……ありがとう。もう落ち着いたわ」

クレアもゆつくりと向きかえり、クリフの優しく目元をなぞった手を強く握る。そして背面の彼を見つめた。

二人の様はどうにも、単なる親しい知人の域を完全に超えている。顔を近づけ耳元で囁^{ササヤ}く彼に、クレアは頬を朱色に染める始末である。

「それで、《アリサ》のことだが。どう見ても現状、《力》が覚醒したとは思えない。実際、本人にどの程度制御が可能なのだ？」

だが、彼の一言で、再び場の空気が重くなる。二人の仕草とは裏

腹、会話の内容はとても恋人同士のそれには見えない。

「あ、ええ。最初は恐らく、武器及び人体の《イングレイヴ》。その側の影響が強く出るはずよ。もし強引に覚醒させたとすると、あの娘の周辺全てを、無条件無差別に反応させてしまう。と思うわ」
彼女はすぐさま色を直した。そして握った彼の手を、更に強く締める。

その目はまるで何かを訴えかけるような、そんな想いがヒシヒシと伝わってくる。

だが流石に、この内容に関しては普段のお惚けを感じない。研究者としての才は、未だ顕在のようだ。

「分かった。あと、一つ聞きたいが。何故、あの男にアリサの秘密が漏れた？ 狙っている、との噂を耳にしたのだが」

狙っている、というより、放し飼いにされていた、と表現する方が適切であろうか。アリサの件で、恐らくあの《戦鬼》を騙った男は無関係だろう。

どちらにせよ、並みの人間がこの研究内容を理解できるとは考え難い。

「え？ 漏れ……た？ 狙ってる……？」

彼の言葉を理解し声を発する間に、生じた数秒のタイムラグ。

「ちよつと待つて。何で？ 私、知らせてなんか」

そしてその後、ガツと、慌てて立ち上がった。

彼女は驚きに目を見開き、明らかに動揺し混乱している。

「そうか……まあ良い。これで大体の事情は呑み込めた。もうこの話は、止めにしよう」

彼が急にふうと息を吐いた。そして張った肩を緩めた。

「止めるって。だって。今、あの男が、アリサちゃんを狙ってるって」

「アリサのことならば心配は無用だ。何せ、最強の護衛が付いている」

彼女を席に座らせた。そして深呼吸を勧め、錯乱するクレアを宥めた。

何せ娘のことだ。無論、そうそう気を落ち着けられるはずもないのだが。次第に彼女の荒げた息も回復を見せた。

彼の緩急をつけて接するその様は、見事な手際だと言えよう。

そして彼は、背後からクレアの首に腕を回し、吐息を当てるようにまでも耳元で囁いた。

「それに元々俺はあんたに会うために。そのためだけにこの屋敷を訪れた。小難しい話はもう、止めにしないか？」

「クリフちゃん——」

どちらにせよ、クレアにこの部屋を脱出する術スベはない。彼女も緊張を解き、その言葉を受け入れた。

その後、二人がこの部屋で何をしたのか。それは言うまでもないだろう。

花を咲かせるは、純粋な思い出話。互いに過去を懐かしむ。ただ、それだけだった。

第二話・邪の刻印「8」

約1時間。記憶を遡り、それを語り尽すには短い時間だ。

「そうだ。今、恋人とかがっているの？ クリフちゃんって、やつぱ、ほら。もてるでしょう？ ねえ！」

話が盛り上がってきた頃だ。彼女も浮かれ、興奮気味に言を発する。

そして隣に座った彼の身体を揺さぶり、朗らかな笑いを溢しつつ返答を催促した。

「恋人、か。残念だが、今は空席だ。……座る気はあるか？」

過去とは無縁の質問にやや戸惑いを見せるクリフだが、澄ました表情を崩さず答えた。

数秒の間。

「や、やだあ。もうっ！ 私にはアリサちゃんがいるわ。でも、そんなこと言われちゃたら。ほ、本気にしちゃうじゃない！」

バシインと彼の肩を掌で叩いた。だが彼女の顔は、見事に紅く染まったという。

そんな雰囲気の中、二人の会話は暫らく続く。

「あ。そうそう、クリフちゃん。ねえねえ、あの子。ほらっ、ラナちゃんは、元気？」

追憶の中から溢れた彼女の発言。普通ならば、至極有り触れた内

容の台詞だ。だが……

「……………」

興味津々な顔のクレアとは裏腹、それを耳にしたクリフの顔に影が差す。つい今しがたまで壮快な面持ちで話を進めていた彼が、突如口を閉ざした。

「ほんと、懐かしいわあ。そう言えばクリフちゃんったら。あの時妹ができたって。それはもう、喜ん……………」

口が、止まった。

鈍い彼女も、流石に空気を察したらしい。台詞の途中ではっと気付き、口元を手で覆った。

やや目線を下げて、若干だが哀愁の色を漂わせるクリフ。普段はそうそう見せない表情だ。

「ご、ごめんなさい。私、そんな……………ラナちゃんが」
そして慌てふためく。

「昔のことだ。気にすることはない。それに今の俺には、可愛い《弟》がいる……………」

暗い素顔を晒す己を悔いたクリフ。ふうと大きく息を吐き優しく返した。そして動揺する彼女を宥めた。

まるで自身にそう言い聞かせるように。

ふと、クリフが胸の懐中時計に手を伸ばした。時計の針はすでに8時を指し示している。

（これ以上は、問題だな……………）

心の中で呟いた。何が問題かと言うと、

「アリサが心配だ。その身に、危険が迫っている」

真剣な、堅苦しい面持ちでクレアの正面に立つ。そして彼女の両肩を強く掴んで訴えかけた。

「え？ さ、さつき、絶対に安全だって……？」

それを聞き、途端に彼女の挙動が乱れ始めた。どうやら今までの躁状態は、単なる空元気だったらしい。

そろそろ、ウィルの就寝時間だ。独りで眠れない彼が、万一にもアリサを誘ったとなると。彼女の身が危険に晒されることになる。

もし彼が寝ぼけて、アリサの身体を全力で抱き締めてしまったら。彼女は……

それにウィルは独りで風呂に入ること好まない。万一彼女と一緒に入浴したのであれば、それはそれで別の問題が生ずることになる。何せ、彼は……

「クレア。俺の相棒は、確実に強い。外敵により彼女の身が危険に晒されることは、絶対にありえない。だが……」

ゴクツと、クレアは息を呑む。

クリフは真顔を崩さず……のはずだが、その表情にはどこか違和感を感じる。これもまた、硬い彼にとっては珍しい表情だ。

悪戯、か。

「自身の欲求に恐ろしく正直でもある。己の欲望を、制御する術を知らない人間だ」

まるで怪談でも語る重苦しい口ぶりと表情で、どんよりとした雰囲気^{マト}を纏う彼。

クレアも女だ。彼の言葉の真意は、凡そ感覚で解るだろう。

「例えば入浴中、強引にその中へ押し入り、遊びと称し身体を蹂躪^{ジュウリン}する恐れがある。更に……」

「え？ お風呂？ ちよっ……」

だが彼の言葉を即座には理解できなかったクレアは、ただオロオロと狼狽^{ロウバイ}するだけだった。

クリフはそんな彼女の反応を楽しみつつ。しかし質問などは一切受け付けず、更に続けた。

「夜ともなると、アリサの寢床へ忍び込み。そして……」

「よ、夜……って？ ま、まさか……！」

あながち嘘とも言い難いが、彼女もその言葉を耳に、漸く^{ヨウヤ}全てを理解した。

娘の身の危険。その意味を。

「ふう。一応、忠告はしておいた。だが、奴は彼女のことを気に入っていた。もしかしたら、もう……」

額に手を置き、真剣に悩む素振りを見せる。そして目を瞑り^{ツム}、首を左右に振りながら彼女から顔を逸^ソらした。まるで、全てを諦めたが如く。

「そん……な。アリサちゃんが……？」

ガクツと膝を落とし、彼女は項垂^{ウナダ}れた。

嫁入り前の大切な娘の貞操が、何処の馬の骨とも分からぬ輩に汚された。と、本気で信じて。

恐らく。野蛮な、獣の様な存在として描かれているのだろう。その《相棒》とやらが、今の彼女の頭の中では。

まだ性欲などとは無縁な、幼く愛らしい子供だとは露知らず。

「心配か？……では、様子を見に行くでしょう」

すると突然、彼がそう呟きながらゆっくりと扉の方向へと足を進めた。

そして鉄製の頑強な扉の前で立ち止まり、手招きをして彼女を呼び寄せる。

「行くって？　だって……」

クレアはチラリと扉の側に視線を送った。無論、彼女が何を言いたいのか、それはすぐに解る。

「俺が、わざわざ捕まりにここを訪れたとでも思ったのか？」

クリフは扉に手を触れた。分厚い鉄製の、重量感のある代物だ。その鍵も恐ろしく堅固で、常人にどうこうできる物ではない。いや、魔具でも装備していなければ、ハンターですら手を出せないだろう。

「諦める暇があるのならば、少しでも頭を働かせる。だが、それでも困難であるのなら……」

彼はコンコンと、軽く拳で数回叩いてその感触を確かめた。冷たい鉄の触感、反響音から察するに、その重量は数百キロに及ぶ。

だが彼は、自信有り気に言った。

「……力押しだ」

「おい、一体何をしてる？」

不審な音を聞き、扉の上段に備え付けられた小さな鉄格子、そこから見張りの兵が顔を覗かせた

雇われて場に立たされているだけの男だろう。彼には、クリフやクレアの素性など知る由もない。故に、まるで囚人でも相手にする

かの如き口調で語りかけてきた。

クリフが、その場で軽く身構えた。そしてポキポキと首や指の骨を鳴らした。

「お、おいおい。お前、何を考えて……」

その兵の呼びかけなど気にも留めないクリフ。数歩下がり、少々扉との距離を置いた。

「警告しておこう。退いた方が身のためだ」

「はあ？ 何だ？ なに言ってるんだ？」

部屋を隔てるは肉厚の扉、牢獄と表現しても不思議ではない造りだ。

格子の小さな覗き穴からでは、中からの声も聞き取り難い。兵は彼の不可解な行動に首を傾げた。だが……

——ガキン！

突如、石造りの地下通路に響く激音。

硬い金属への衝突音と、それが拉ヒシヤげる甲高いが鈍い耳障りな音。

厚さ10センチはあろう重たい扉が、内側から大きく歪められたのだ。

そして身を寄せていた見張りの兵士諸共、それは猛烈な勢いで吹き飛ばされる。

つい今しがたまで中を覗き込んでいた兵は、悲鳴を上げる間すらなく、その衝撃を身に受けることとなった。

鋼鉄の塊を破壊したのは、蹴りだ。

単純な前蹴りである。クリフは扉の中心部を勢い良く蹴り込む、

ただそれだけだった。

石の壁に扉を固定していた金具も、鉄製の鍵も、その蹴りの前では容易く押し潰された。

蹴り飛ばされた扉が通路の床を転がり、またも金切りの音を発す。通路の狭い空間の中では、その音は耳が痛くなる程に良く響く。そして扉と接触した部分からは火花が散り、冷たい石を深く抉^{エグ}つた。

「な、なんだ？」

暗い通路には、弾かれた者以外にも2名の兵が待機していたらしい。

20メートルはある一本の通路の端。そこに立つ彼等の足元にまで、人間1匹と大きな鉄の塊は飛翔することとなる。

彼等が反応を示したのは、最初の衝突音から遅れること数秒後。突然の轟音に耳を奪われ、そして悶絶する同僚らしき物体と、原型を留めぬほどに潰れた扉に目を奪われた。

「……？ な、あ……？」

そして状況を理解するには、更に数秒のタイムラグが生じた。彼等は目を見開き、暫し転がる鉄塊と肉塊を凝視する。そしてその後、閉まらぬ口から声にならぬ声を発した。

例の《双刃》の一件と、その後の諸事情により警戒心は高まっていたはずだが。この衝撃はそれすらを上回ったようだ。

部屋側から通路側へと、炎の赤い光が流れ込む。旋風が埃を舞い上げ、それに差し込む光が反射し、眩しさをより強調させる。

兵達はそちらの側へ目を向ける。そこで真つ先に視界に入ったのは、灯りを背に、不気味に揺れる双眸。

彼等はまるで化け物でも見るかの如く、恐る恐るクリフへと視線を送った。

「……？ 少々強すぎたか。加減が難しいな」
クリフは大破した扉を眺め、やや困惑気味に首を傾げる。

「……え？ クリフちゃん……！？」
と、震わした弱々しく細い声を上げるクレア。
彼のすぐ傍らで、彼女はその場に力なくしゃがみ込んだ。どうやらあまりの出来事に腰が抜けたらしい。

驚きよりも恐怖だろうか。先程まで隣で身体を寄せ合い、ほのぼのと接していた彼の、突然の豹変振りに思考が追い付かないようだ。

「クレア？ ……ふう」

クリフが手を差し伸べると、彼女はビクツと身体を硬直させた。

……ここへ来て初めて、12年という永い歳月が彼女に重く押し掛かる。

「……俺が、怖いのか？」

やれやれといった顔で、彼は片膝を落とした。声を耳にしたクレアは、慌てて首を数回横に振った。

だが決して、全てを受け入れたわけではない。呆気に取られ口を開いたままの、彼女のその表情がそれを物語る。

全身の震えが治まらず、脚にはまるで力が入らない。という以前に、今は彼の顔を直視できない。

「立てないか。すまない。悪ふざけが過ぎた」
彼女の頭に優しく手を乗せた。

「え、あ。ううん。大丈夫。わ、私は平気よ」

それを受けるとクレアは、自然と身体の震えが抜けていった。不思議なことに。

「いや。帰路、エスコートさせて貰おう。快い逢瀬^{オウセ}は久しい。その礼だ」

するとクリフはそう言つて、彼女の手を取った。

一見すると^{スガ}賺した表情だ、と言わざるを得ないのだが、彼の態度に演技じみた素振りは見られない。

「……！」

そして彼女の腰と膝裏に手を回し、そのまま両の腕でクレアを抱き上げる。

先程の乱暴な行為とは対照的に、その扱いは丁重だった。
ふわりと彼女の身体は持ち上げられ、彼の胸元で抱えられた。

明らかに慣れている。当初、恥かしさからクレアは抵抗を試みるが、結局は彼の為すがままにその身を預けてしまった。

「やつ……く、クリフちゃん。ちよつ？」

まるで子供の扱いだ。と、抱えられた後も彼女は腕を振り払おうとしたが、抜け出せるはずもない。23歳の彼が、29歳の彼女に對してこの態度。少々失礼だと言える。

だがその様を眺め、困り果てるクリフ。

「単なる俺の我侫だ。ワガママそう抵抗してくれるな。まあ、そんなに嫌な
らば放すが……」

焰を影に輝く金髪。セイカン精悍で美しい顔と、外見とは異なる逞しい身
体。タクマ

記憶に残る子供の頃の彼と、現在の彼とのギャップ。

心惹かれるのに、惚れ直すのに、そう時間は掛からなかったよう
だ。

今の彼はもう、当時可愛がっていた弟同然の存在ではない。大人
になった彼は何とも凛々（リリ）しく、力強く、そして暖かい。

「え、えと……その。や、やだっ……」

クレアは頬、いや、耳の先までを瞬時に淡紅色へ染め上げた。そ
して視線を上げ、彼の横顔を眺め……

しかしその途中、彼女ははっと我に返った。そして改めてクリフ
の顔を見据えた。

「……って。こ、こんなの違う。早く、アリサちゃんがつ！」

「ああ。そのつもりだ」

そしてクリフは彼女を抱えたまま前進を始める。

が、当然、見張りの兵達がそれを阻んだ。

「ま、待て。う、う、動くなっ」

二人がそれぞれ、尺の長い槍を構えている。そして多少の防具を
身に纏い、並ぶようにして立ち塞いだ。

薄暗いためその表情を確認することは難しいが、小刻みに震えた
槍を見る限り、相当に恐怖で引き攣った顔をしていると予想される。

この狭い通路では、突きつけられた槍は少々厄介だ。だがクリフはまるで、目の前に何も存在しないが如く、その足を止めようとはしない。

「う、動くんじゃない！ これ以上は……」

一人の兵は果敢に得物を握るが、

「お、おい。正気か？ やばい。マジで、やばい……」

もう一人は腰が引けて、後退りを始めた。いや、顫動^{センドウ}が収まらず、足を引き摺^ズることすら困難な程に、彼の身体は硬直していた。

「悪いが、虫けらを騷^{ナラ}る趣味はない」

クリフは矛先の直前で一度足を止めた。通路を塞ぐ槍が、クレアの方を向いていたからだ。

鋭い刃物を前にクレアは、彼のコートをギュツと握り締め、顔を顰^{シカ}め目を閉じる。そして身体を更に彼へと密着させた。

「だ、ダメだ。ここで逃がせば、俺達は領主に殺される」

ガチガチと、思うように動かない顎^{アゴ}を何とか鎮め、兵の一人は言を発す。

そしてそれを聞くと、先程まで尻込みしていた同僚も、慌てて怖^オ気^{ジケ}を払い再度槍を構えた。

屋敷内の、力関係の変化が窺^{ウカガ}える。

「そうか。ならば、後でそうして貰うことだ。手間が省けて助かる」
スラリと、冷酷に言い放った。

「ふ、ふざけんじゃないねえ！ そ、それ以上少しでも動いてみる、その女がどうなっ——」

ボウジャクフジン
クリフの傍若無人とも取れる態度を前に、兵達の内なる怒りが爆

発した。無論、そもそもどちらの行為に非があるのか、は不明だが。

だが、すぐさま兵の口が、ピタリと止まった。叫んでいた途中、大きく開いた口は感じ取った《何か》により、そのまま閉ざすことを許されなかった。

「その女が、何だ……？」

静かな口調。クリフが発したのは、ただの言葉だ。

冷たい、淡々とした台詞。彼には微塵も怒気を発する素振りが見られない。恐らくこの言葉は、脅しの類ではないだろう。

それに素人では、クリフの殺気を知覚することはまず不可能。

だが突如、明らかに場の空気が変わった。肌が敏感に、否応なしに感じ取っている。ピリピリと、焼け付くような《何か》を。

ガランガランと、兵達が槍を地面に落とした。鋭い空気が身体を蝕み、精神を容赦なく侵す。

無条件に受け入れざるを得なかった。生物としての本能が、それを告げたのだ。

己の《死》を。

今の彼等の思考は、単純で至極読み易い。

死にたくない。……否、今彼らが望んでいることは更に純粹で、残酷なほどに惨めだ。

早く苦しまずに、楽にして欲しい。それだけが電気信号として、脳内を駆け巡っているに違いない。

身動き取れぬ暗い海の中で、巨大な人喰い鮫サメが眼前に迫る。そん

な感覚だろうか。絶対的な恐怖とは。

その後彼等は、立ったまま静かに喪神することとなる。股間を濡らし、口からは多量の泡を吹き出す。だが硬直した身体は、その場に倒れることすら許さない。

弱者が強者に蹂躪される瞬間だった。

（エディト、奪われたままだな。まあ、後でウィルに取りに行かせるか）

だが当の本人は、そこに立っていた人間二匹のことなど、まるで眼中にないといった様子だ。

恐らく、意識しての殺気など微かたりとも放ってはいない。彼にとつては、本当に何事もなく道を通過しただけなのだろう。

穢慄センリツのクリフォード。彼の二つ名は、飾りではない。敵意なき殺意も。いや、時に存在そのものが凶器と化す。

「おい。何時まで目を瞑っている気だ？」

彼女にとつては、気が遠くなるほどに永い数十秒間。凶器を突きつけられたのだ、無理もないのだが。

クリフは腰に回していた手を移動させ、彼女の頬を数回、ポンポンと軽く叩いた。するとクレアは、緊張を解きキョロキョロと周囲を見回した。

「へ？ あれ？」

そこは既に、空が見える場所。冷たいが美味しい空気が吸える場所だった。

「3ヶ月ぶりなのだろう？ アリサが待っている」
彼等は静かに、その屋敷を後にした……

第二話・邪の刻印「9」

椅子に腰掛けるアリサ。そして彼女の膝の上に座るウィル。

（クリフさん。遅いなあ……）

壊れた店の扉。彼女はそこから目が離せなかった。これはそんな気持ちの表れだろうか。

だが彼女は、あえて視線を逸らした。そして自分の胸元へと目を向ける。

ギョツと両の腕で抱き締めた小さな男の子は、彼女の腕の中で気持ち良さそうに眠っている。時々「クリフう」と可愛い寝言を呟きながら。

静かで寂しい酒場。閉じぬ入り口から流れ込む冷たい空気。想い人を待ち侘びる気持ち。抱き抱えた彼の温もりを感じると、それらも和らぐ。

ウィルは心底にクリフのことを慕っているのだろう。人の心配ばかりする子供だが、アリサ以上に彼自身が、最もクリフの帰りを待ち望んでいる。片時も離れたくない。その想いが、強く伝わってくる。

彼の身体は、男の子のそれとは思えない程に華奢^{キャシャ}で、柔らかい。身長は130以下。体重も非常に軽い。恐らく、30キロを下回るだろう。

性別を判断する要因は、その口調と、ショートカットに切りそろえられた髪の毛だけだ。だがそれとて、決定的なものではない。

彼女は、ウィルの柔らかい髪の毛を撫でた。見た目は、本当に幼いだけの子供だ。しかし右目の眼帯。腰に備えていた剣。あまりに特異な服装。きつと、彼は……

いや。きつと彼も、楽な人生を歩んできた訳ではないのだろう。横行する人身売買。もしかしたら、その被害者なのかも知れない。蔓延^{ハビコ}する妖魔。それに親を殺されたのかも知れない。

だが、彼は彼だ。アリサは自分にそう言い聞かせたようだ。クリフと行動を共にする彼は、少なくとも今は幸せそうなのだから。

そんなことを考えていると、彼女の目には自然と涙が溢れてきた。彼への同情……否。

クリフを独占することへの嫉妬……ありえない。親を亡くした寂しさや悲しさ……それも、違う。

良く分らない涙だった。

「……ん？」

アリサが再び、扉の方へと意識を向けた。それは突然、ガタツと、店の外から音が聞こえてきたからだ。

クリフが帰ってきたのか。昼間のハンター等が報復に訪れたのか。それとも、領主の手の者が自分を捕まえに来たのか……

「……え？」

だがアリサの目に、真っ先に飛び込んできたのは、予想したどれとも異なるものだった。

彼女は驚きのあまり、固まった。

その後、目を何度も擦り、何度も何度も凝らしてそれを見つめた。
幻か。それとも、夢か。

それは見慣れた顔。しかしもう何年も見ていなかったような、酷く懐かしさを覚える顔。

息を切らせて、心配そうな、しかし嬉しそうな面持ちでこちらを見据えている。その目に涙を浮かべて。

「アリサちゃん……」

震えた声だった。しかしその声を聞いて、すぐさまアリサは現実へと引き戻された。そこに立っているのは、紛れもない母なのだと、彼女は即座に理解した。

「……ママ？　だって」

アリサはウィルを抱えたまま立ち上がり、恐る恐るその女性の下へと歩み寄った。そして、ゆっくりとその身体に手を触れる。すると、確かな感触を実感した。

その後は、大声で叫びながら彼女に抱きつくだけだった。

無論クレアの後ろには、クリフの姿がある。彼は何も言わず、アリサから眠ったウィルの身体を預かり、そのまま腕に抱えた。

確かに、彼が女性の下へ向ったことだけは事実だ。だが何にしても、大した演出家だと言える。もはや素なのか演技なのか、それすら判別付かないほどに。

死を越えての廻り合い、そう表現しても不適切ではないだろう。
短くも永い、3ヶ月ぶりの、母娘の再会だった。

第三話・諸刃の剣「0」

暗闇の中、大衆の眼前に現れた化け物。

それは、人ではない。だが、妖魔でもない。

それは、《邪》の化身だ……

身長は優に3メートルを越え、その赤黒い肌は《鬼》^{ホウフツ}を髣髴させる。

紅と蒼、二対の刃を握り、それを振るう毎に周囲の建造物は悉く^{「」}崩壊する。

複数の音が重なり合った不気味な雄叫び。悲鳴を挙げて軋^{キン}む異常に発達した筋肉。

その威圧は、素人でも十分に知覚できよう。

胸元に描かれた魔性の刻印。それが放つ光は、漆黒の闇を喰らい、しかし邪悪な黒い光を絶えず放ち続ける。

それは、死苦と混沌とを呼び覚ます醜悪な妖霧。それは、怨恨と虚栄とが顕在化した陋劣^{ロウレツ}な瘴気。

一度触れようものならば、身体中の生気が瞬時に奪い取られるだろう。

その名称はゴードン。つい先刻まで、人間の形を成していた生き物である。

それは、邪の刻印を身に受けし者の、力を求めし弱者の、成れの果てだ。

それは、醜い世界を現した、歪んだ社会が生んだ、狂気の産物だ。

その様は宛ら、兇刃を振り翳す刹鬼か。或いは、恐怖を振り撒く冥鬼か。

いずれにせよ、人にして人に非ず。その悪鬼は、人外の力を以て民を駆逐する。

だがそれすらも薙ぎ払い、踏み潰す。姿を現した滅魔の存在。

それは、夜叉か、羅刹か。それとも……戦鬼か。

また一つ、彼の軌跡が刻まれる――

第三話・諸刃の剣「1」

重なり合う二つの身体。交差し反響する歓喜の声。密着した二人の、その同色の髪は、互いを惹き立て合う。

並べてみると、本当に瓜二つだ。二人の顔は、年齢、育ちの違い、髪型。それらを差し引いても、あまりに似過ぎている。

アリサはクレアの分身である。裏の事情を知るクリフの目には、それはさぞ、^{ケンチョ}顕著に映ったことだろう。

延々と泣き続けること30分。しかし女とは、無駄に湿っぽい場を維持するものだ。と、流石に感動も薄れたクリフは、ウィルを抱えたまま椅子に座った。

因みに彼女達が泣き止むまでは、更に30分という時間が費やされることになる。

真に美しい家族愛だ。

だが、耳に響く女性二人分の金切り声と、全ての化粧が落ちるほどの涙と鼻水に塗れた顔。それは、聞くのも見るのも忍びない。

声も鳴り止み、情勢が落ち着いた頃、クリフが徐に唇を動かした。^{オモムロ}
「その二人。そろそろ、良いか？」

緩んだ場を締め上げる、やや力の籠もった声を上げた。
すると、先刻まで垂れ流していた多量の分泌液で美しいはずの顔を崩した二人は、同じタイミングでクリフの側を振り向いた。

そして彼女等はクリフの顔を眺めた。
冷静な思考を阻害した感動が鎮まりをみせると、それと同時に状況判断を試みる。

娘が思うは、何故目の前に母親がいるのか、と。母が思うは、何故息を荒げ、慌ててこの場に戻ってきたのか、と。

無論、最も肝心な部分が抜け落ちていることは、言及するまでもない。

「クレア。分かっているとは思うが。俺達は逃げ出したのではない。あくまで、一時的に場所を移しただけだ。感涙はもう胸にしま——」
「あつ！ クリフ。おかえり！」
絶妙な横槍。目を覚ましたウィルが、彼の台詞を妨げた。

そして、膝に座らされていたウィルは首を捻り、顔を上げて背後のクリフと目を合わせる。
まだまだ寝ぼけ眼だが、ウィルは視線を交わした瞬間に口元を綻ホコロばせた。

あの騒がしい状況下で、熟睡していたとは考えがたい。

「……？ いふあいつ。にやにするのお！」
引き攣ツった顔のクリフは、ウィルのなよなよとした頬を無言のまま左右に抓った。当然ウィルは、痛がる。
空気と間の抜けた声を発するウィルだが、彼の緩んだ口元はまるで変わらない。

じゃれているだけ、か。何とも楽しそうな顔である。

「まあ良い。アリサも、今のうちに話——」

「ああっ！」

気を取り直すクリフだが、次に彼の言を妨害したのはクレアだった。

彼女は突然、悲鳴とも取れる甲高い叫びを上げたのだ。女性特有の、トーンの高い声は空気を振動させ、場にいる者達の鼓膜コメクを突き刺した。

その後何やら身構え緊張し、周囲に意識を配るクレア。

そしてアリサと再び向き合い、彼女の両肩を強く掴みこう漏らした。

「もう大丈夫よ。ケダモノなんかに……うつん。アリサちゃんは絶対に、ママが護るんだから」

娘を硬く抱擁ホウヨウするクレアは、警戒を解かず店内を丹念に見回す。

因みにアリサ自身は、母の珍妙な行動に気を取られつつ、睨みを利かせるクリフにも視線を送る。

流石に、母親ほどではないらしい。天然ぶりは。

混乱しつつもアリサは、申し訳なさそうにクリフへ小さく頭を下げた。

だがクレアの行動は止まらない。

彼女の目に映るは、木と酒の香りが漂う見慣れた酒場。眺めるだけで心が満たされる、ここはそんな安息の地だ。

変わったところを強いて挙げるとするならば、壊れた入り口、そして砕けたテーブルが一つ。更に、クリフの姿と……

「……！」

クリフの姿と、彼にベタベタと纏わり付いている幼い子供の姿だった。クレアは漸く、ウィルの存在に気が付いたのだ。

まるで妖精の如く幻想的なオーラを放つ、天使のように可憐な子供。目にすればアリサの幼い頃が脳裏に浮かぶ、幼い少女だった。そして彼女に、目と心を奪われた。視点が一挙に狭まり、心臓が高鳴った。らしい。

黒い眼帯に覆われた右目。残された隻眼は、鋭く冷たい銀光を放つ。

だがその優しい瞳には暖かさすら覚え、同色の髪と共に安らぎを与える。

すぐにも溶けてしまいそうな、雪のように色白な肌。遠目でも判る、きめ細かい張りのある皮膚には、唯一つの穢れも存在し得ない。例え触れずとも伝わる、とろけるような感触は、赤子のそれと同質だろう。

何より特筆すべきは、その愛くるしい仕草だ。美しい容姿を更に強調させる、眩いばかりの笑顔。

見るだけで心が癒される柔らかい挙動。キューンと、良い意味で胸が締め付けられるような……

——と、クレアの頭の中には、そんな雑念が駆け巡った。

呆気にとられつつも瞳を輝かせるその様は、到底29歳とは思えなかったという。どうひいき目に見ても。

「あらあら、この子……」

そしてアリサの手を強く握りながらも、パタパタとクリフ等の元

へ駆け寄った。そしてウィルと顔を合わせる。

「ん？ あっ。おねえちゃんは、アリサのおねえちゃん？」

「まあ！ 私はクレア。アリサちゃんのママよ。ええと、あなたは？」

割れ物にでも触るが如く、ゆっくりとウィルに手を近付けるクレア。

姉だと言われたことがよほど嬉しかったのか、一度はアリサと顔を見合わせて、照れながらそう答えた。

「ママあ？ そっかあ。えっとねっ、僕はウィリアム。ウィルって呼んで！」

ウィルもクリフの膝から降り、地に足をつけて彼女に接した。

「そう。ウィルちゃんっていうの」

「うん！ よろしくねっ！」

朗らかな、伸び伸びとしたウィルの声。それには、警戒心の欠片も感じられない。

恐らく、彼女からアリサと同じ匂いを察知したからだろう。初対面の人間には必ず放たれる無意識な殺気も、今は影を潜めている。

「……あ、男の子？ あらやだ、私ったら……ん？」

クレアはしゃがみ込み、改めてウィルの顔をまじまじと眺める。

性別判断の材料は、その名前だけである。だがそれを理解した瞬間、彼女は何かに気が付いた。

「紹介する必要があるな。俺の相棒、ウィリアム・フォーガスだ」
初顔合わせの二人だが、そこへ間髪を容れずクリフが口を添えた。
まるで見計らったが如く、巧妙なタイミングで。

クレアは再び思考を巡らせる。そして、クリフとの会話を思い出した。

強い相棒……？

可愛い弟……？

欲求の制御……？

夜は一緒……！

無論、そこからはじき出される答えは一つだ。

からかわれた、と。

「クリフちゃん。私のこと虐めて、楽しい……？」

彼女はプクウつと頬を膨らませ、悲しみのない涙を浮かべた。そして半分笑みを含ませクリフを睨^{ニラ}んだ。

「それは、お互い様だろう？」

彼もクレアの顔からあえて視線を逸^ソらし、彼女の肩をポンポンと叩いて言った。

ただその光景を目に、まるで生簀^{イクス}の鯉のように口をパクパクしているアリサの姿があった。さぞ驚いたのだろうが、それは一先ず先送りしなければなるまい。

「さて……」

クリフは腰を上げる。そして台詞と共に表情も、気配も、全てを完全に引締め直した。

それだけで、先程までのお気楽な空気は流れ去る。同時に、広い

酒場全体が緊迫した雰囲気包まれた。

まるで温かい家庭から、冷たい戦場へと場を変えた。そう思わせるほどの変貌ぶりだ。

彼は疾^トうに察していたのだろう。勿論それは、ウィルも同様である。ここへ近付く《何か》を。あえて言うまでもないが。

「ウィル！」

「はあい。ちよつと待つて〜」

鋭い声で彼の名を呼ぶと、ウィルは何やら、自分の腰の辺りをモゾモゾと探り始めた。

赤色がかったコートを捲^{メク}ると、そこからは金属製の、L字型の物体が姿を現す。

そしてそれを、ホルスターごとクリフに手渡した。

黒い魔式銃 《ヒルダ》である。

滑らかな流線型を描く美しい銃身。特殊な鉱物で形成されたそれは、鏡のように光を反射し、近付けた彼の顔を映し出す。

表面に刻まれた無数のイングレイブは、クリフが握ると魔力を放ち、呼応を始める。まるで彼に生命を吹き込まれたが如く。

「ねえ、クリフ。エディトは？」
ウィルの呟き。

上級の魔具は、それぞれが独自の波動を放つ。言わば、呼吸のよくな代物だ。

最上級の物ともなれば、魔具は自ら使い手を選ぶ。そしてその波動も、より強く、より個性的なものへと性質を変える。

ウィルはその気配を察知したのだろう。本来ならば、使い手以外には決して感じ取れない。白銀の短剣 《エディト》の呼吸そのものを。

「……後で、お前に取りに行つて貰う予定だ」

「それはいいけどお。今持つてないと不便だよ？ 何かね、嫌な感じがするの」

流石、と言う外ない。この洞察力は。

それを承知していたクリフも、「ああ」と空返事で答えた。

「もう、遊びは終りだ。死にたくなければ、俺の背から離れないことだな」

クリフはアリサ達の手を取り、二人を自らの背後に立たせた。そして、銃を構えたまま言った。

ウィルも壁に立て掛けてあつた双刃を手に取り腰に回す。そして入り口の側へ意識を向けながら、クリフに並んだ。

無論、強引に動かされた彼女達も悟つてはいるのだろう。

逃げ出したわけではない。一時的に場所を移しただけである、と。今から誰がここへ、何をしに訪れるのか。ここで何が起こるのか。と。流石にその眼付きも鋭くなる。

そして皆の顔が、切迫した色に包まれた。無理もない。素人ですら感知できる、禍々（マガマガ）しいオーラが迫っているのだから。

突然の邪悪な気配に、女性二人は身体を小刻みに震わせた。気配そのものの知覚は難しい。だが身体だけは敏感に反応してしまうようだ。

「もうっ、クリフってば。すぐそーゆー言いかたするう。護ってあげるって言えはいいのにい！」

緊張の中、ボソツと独言を呈するウィルだが、

コッソ、と。軽い軽い、殴打の音が響く。

ウィルは「あうっ」か、それに似た呻きを漏らす。身体を丸く畳み、両手で後頭部を押さえ込みながら。

だが殴ったクリフも、殴られたウィルも、今ばかりは緊張を緩めない。

「あの、クリフさん……」

背後からアリサの声が聞こえた。

クリフが振り向くと、彼のコートの裾を軽く掴み、何かを訴えかけるような目で、彼女は声を絞り出す。

「その、私……いえ、何でもありません」

「……お前のことも、クレアのこと、追って全てを伝えるつもりだ。だが今は、身の安全を最優先に考えた方が良く」

彼のその言葉を、嬉しそうに受け入れるアリサと、複雑な面持ちで聞き入れるクレアの表情は、あまりに対照的だった。

しかし、そんなことに気を取られる余裕すらない、この空気。

まだ何も起こっていない。まだ何も訪れてはいない。だが、空気が痛い。

突き刺さるように肌を焼く。もしも目の前にクリフとウィルが立ち塞がなければ、虚弱な女性二人は即座に気を喪うほどに。

皆が理解した。

ここが戦の場になる、と。

第三話・諸刃の剣「2」

薄い闇の中、町の表通りを往く篝火^{カガリビ}。ぼんやりと連なり揺れ動くその紅炎は、人々の視線を集めた。

不思議な夜だった。硬く閉ざされたはずの窓もその拘束を緩め、妓楼^{ギロウ}から漏れるはずの喘ぎ^{アエ}もその影を潜めた。

不思議な現象だった。何かが起こり、何かが変わる時。その予兆を身に受け、皆はずと意識を共鳴させる。良くも、悪くも。

この意味ある偶然の一致は、或いは^{アル}……必然、か。

何にせよ。リユーネの町にはこの夜、鬼が現れる。全てを薙ぎ払^ナう——鬼が。

弧を描き、兵達は店の戸口を覆^{オオ}った。各々が手に松明と槍を持ち、意味も解さず店内を凝視する。

彼等を縛り付ける恐怖が、その表情を曇らせていた。

彼等の中には恐らく、この場に立つことこの理由を知らされている者など、一人として存在しないのだろう。

護衛ではない。戦力ではない。……だが、不要でもない。

大勢で群れ、傍^{ハタ}から見れば圧倒的に有利な立場にいる彼等だ。だ

がその兵達が、店の中で構えるクリフ等よりも切迫した色を浮かべている様は、あまりに不自然な光景だった。

兵達の中央には彼等を従え、同時に脅えさせている者の姿が有る。

何ということのない中年男だ。外見のみで判断するのならば、の話だが。

小奇麗なローブを羽織る、背の低い小太りの男。脂肪に包まれ鈍りきった身体からは、微かな威圧も恐怖も感じない。……はずだ。本来ならば。

「これはこれは、クリフォードさん。どうしてこんな場所におられるんですか？」

携えた兵を背にその男は、重々しく酒場へと足を踏み入れた。言葉と態度の端々に、尊大な素振りが滲み出ている。

その者の名はゴードン。ここリユーネの町を統べる立場の男だ。

心地の悪い覇気が大気に満ちている。目で確認せずとも解るだろう。領主が身に纏う高級そうなローブの内から、邪気を帯びた魔力が放たれていることを。

その魔力はまるで百足の^{ムカデ}のように、場に立つものの身体を這い回り、その精神までも浸食する。

クリフが己の魔力を絶えず放ち続け、それを緩和させなくては、背後の二人には到底耐えられないだろう威圧である。

「それに、クレアさん。困りますよ。あなたにはまだ、価値があ

ー」
ゴードンが^{シヤクシヤク}綽綽と二言目を述べた瞬間、それは起こった。

連続して響いた炸裂音。

その衝撃を受けたゴードンの身体は、ブレながら大きく傾いた。クリフが右手に握る、黒銃 《ヒルダ》 から放たれた弾丸数発が、表面積の広い彼の身体を捉えたのだ。

惨劇と呼ぶに相応しい光景だ。

しかしウィル以外の者は、その瞬く間の出来事に思考が追いつかないのだろつ。視点の移動も儘ならず、眼前に広がる光景を漠然と眺めていた。

沈黙の中、ゆるりと時が流れた。そして数秒遅れて、場に戦慄が走る。

各々二発ずつの弾丸がゴードンの胸と腹を貫いた。

銃声を追って鳴く、えも言われぬ鈍い着弾音を帯びながら、鮮血と脂が空へ飛散し床に塗れた。

硝煙と共に漂う鼻に付く血臭は、それを誘うに余り有る代物だった。クリフが背に護る、女性二人の甲高い悲鳴を。

赤い湖は木製の床に広がり続け、その中央に仰向けで寝そべる肉は、ビクンビクンと全身を痙攣させている。

そして空気を締め上げていた威圧も、一時影を潜めた。

状況を呑み込めなくとも、多くの者が感じ取ったことだろう。領主が殺されたのだ、と。

皆が啞然とする中、クリフは大きく息を吐き、目の前に倒れる人間一匹を見下ろした。

その後彼は、背後から響いた絶叫の余韻に顔を歪めながらも、兵

達に向けて淡々と台詞を投げ掛けた。

「……巻き込まれたいのか？ 早急に、この場から撤退することを勧める」

「そうした方がいいよお？ じゃないと……食べられちゃうんだから」

追ってウィルが続いた。その優しい笑顔の裏には、研ぎ澄まされた緊張を含ませて、柔らかく言った。

二人の台詞が耳に入ると、店の出入り口を囲う兵達の意識が、この空間へと引き戻された。

そして再び兵達は、眼前に広がる凄惨な光景を直視した。

分らない。どうしたら良いのか。……彼等の表情から読み取れるのは、そんな単純な思考だろうか。

消えたはずの恐怖が、次第に焦りへと変わる。どうやら、クリフ達の警告も徒労に終わったようだ。

「その無駄な演出……ホトホト殆^{ナキガラ}、愛想が尽きる。こちらも暇ではない。今から——あんたが真の亡骸と化す前に。直立不動で俺の声に耳を傾ける。雑話は、一切認めない」
クリフの啖呵^{タンカ}が静寂を斬った。

すると、その声に反応するかのように、銃弾を浴びた領主の身体がピクリと硬直した。

更に、霧散しかけていた殺気がそれと同時に、再度この空間を包み込んだ。

「怖い怖い。それが《銃》ですか。いやはや、便利なこと。でも……温いですね」

ゴードンは、ムクリと身体を起こした。何事もなかったが如く。垂れ流しだった血流も、何時しか止まっていた。

そして呼吸の一つも乱さず、彼は涼しい顔で言い放った。

兵士やアリサ達は、突如起き上がった死体を目に、騒然とし驚愕^{キョウガク}するわけだが。

威圧の正体が判明した。ゴードンの胸元の辺りから、どす黒い光が発せられたのを確認し、クリフは顔を顰^{シカ}めた。

武器ではなく、人体へのイングレイヴ……クレア等、研究室における魔術研究部が編み出した、秘術とも呼べる逸品である。

だがそれ自体は、さしたる問題ではない。クリフの顔が引き攣^ツった理由は他にある。

「失敗か。将又^{ハタマタ}、偶然なる成功か。……クレア。どうやらアレは、厄介な代物に仕上がったらしいな」

クリフがそつと、背後のクレアに耳打ちをした。だが今のクレアには、その言葉は届かないだろう。

場に停滞する邪気が蛇のように絡み、彼女の全身を竦^{スク}ませているのだから。

明らかに異状だと、今さら言及する必要もあるまい。

「銃の知識も得ているのか。……その情報源、吐いて貰おう。一滴も漏らさず、だ」

キツと睨みを利かせ、クリフがゴードンに投げ掛けた。

銃の概念を知らぬ辺境の人間であれば、先程の銃撃は奇術の類か。或いは、ハンター仕様の魔具による特殊な現象だと捉えるに違いな

い。

兵器開発部に属し、魔具の急速な発展に大きく貢献したクリフならではの感覚だろう。

己の《業》が助長させた世の腐敗。それを餌とし暗躍する不屈き者を、心底快く思わないのは。

「嘔吐で宜しければ幾らかは。でも残念ながら、お目当てのものは出ませんねえ。……おい、例のものを」

ゴードンは返答と共に、背に並べた兵に指示を送った。するとそれを耳に、ビクツと、兵の皆が大きな反応を示した。

そして恐る恐る、その《例のもの》を用意し始めた。

恐怖から思考の大半が停止し、操り人形のように彼等は、その指示を素直に受け入れた。

それは壁の裏側に置かれ、今まで目に入らなかった。それぞれを、大の男が3人がかりで担ぎ上げた。

肉厚で幅広の、やや湾曲した片刃の剣——が、二本。ゴードンを挟むように、その対の刃は床へ据え置かれた。

偽の戦鬼、グラエムが振るっていた、紅と蒼の双刃である。

その重量から木製の床板は、刃の接地と同時に輝割れ、歪んだ。全長が150センチを超える巨大な鉄の塊だ。

だがそれを、ゴードンは軽々と片手で持ち上げた。そして両手に握った剣をまじまじと眺め、馳せた想いを口に出した。

「便利だ。本当に便利だ。そして限りなく、強い。やはり私は、運が良いらしい。この力を手にすることが出来たんだからな。そして

——クリフォード・スレイター！ 貴様に手綱をつけるのは面倒そうだ。クレア博士と、その娘だけで十分《上》に駆け上げられる。…貴様はもう、要らないな」

ゴードンから丁重な言葉遣いが消えた。それに代わり、威圧が更に強まった。怒気と共に声量も増し、その顔付きも強張った。

「え？ わつ、やだやだつ。クリフ……あの霧、いやな感じ」
ウィルが敏感に異変を感じ取った。そしてクリフもウチス頷き、開放していた魔力を更に高めた。

先刻より胸元から放たれている黒い光……いや、光を呑み込む闇の霧は拡張を続け、濃度を高めている。それが放つ圧力がシンシンと、彼等の肌を鋭く刺した。

その後、すぐの出来事だった。パタリパタリと、ゴードンの周囲の兵達が共だつて地に伏せ始めたのは。

彼等は音もなく、静かに力なく、前のめりに倒れ込んだ。

ゴードンが発した霧が、まるで意思を持つかの如く徘徊し、彼等の身体近辺を覆ったのだ。そして彼等は奪われた。意識と共に、その生も。

緩やかな死が、彼等に訪れた。眠るかのように、穏やかな。

護衛ではない。戦力ではない。だが、不要でもない。……己は《餌》なのだ、薄れゆく意識の中で実感したことだろう。

「やはり貴様等は、この程度では死なんか。がつ、そうでなくては

……面白くないっ！」

霧が放出下である刻印に吸い込まれる。それに次いで、ゴードンの身体自体にも大きな変化が見え始めた。

彼のゆったりとした衣類が今は、はち切れんばかりに膨張している。

贅肉ゼイニクに溢れたはずの肢体が、見る見るうちに鋼の筋肉を纏ったのだ。

まるで別人だ。という以前に、もはやヒトですらない。人間の生を吸い込んだ身体は、赤黒い皮膚に包まれた——鬼人と化した。幾重にも合わさったような不気味な声も、歪んだ黄色い眼球も、醜く筋張った腕も脚も。全てが全て、ヒトにあらざる魔性のものだった。

「チカラだ、チカラ！ 全てを虐シイタげるこのチカラを見る！ そしてその見下した眼が恐怖に変わる瞬間……見せてみるっ！」

高らかに叫ぶゴードンだが、今の彼は明らかに、著しく常軌を逸イッしていた。

完全な暴走だ。不完全な機材により、不完全に成されたイングレィヴ。こうなることは予測しえた。だが必然的に、それは起こったのだ。

どちらにせよ、狂気に囚われた彼が、見境なしに暴れ回るだろうことは目に見えている。

他の大勢がどうなるか、は別に。依頼主を護る傭兵としての、力量と器の見せ所であろう。

「ウィル。厄払いだ。——蹴散らせ」

「うん！」

クリフが飛ばした激^{ゲキ}。

た……

ウィルがそれに答え、手に握る双刃を構え

第三話・諸刃の剣「3」

変異したゴードンの肉体を穿孔^{センコウ}する弾丸。

乾いた爆音を伴うクリフの援護射撃、ヒルダの残弾6発は見事に命中し、一瞬だが敵を怯^{ヒル}ませた。

しかし、必殺には値しない。

急所のみを狙い撃ちした銃撃も、肉を抉^{エグ}るが致命傷には至らなかった。硬質化した筋肉がそれを阻んだ。

ゴードンは、両の腕をクロスさせてクリフの射撃を防ぐ。しかし視界を削がれた次の瞬間には、既にウィルの接近を許していた。

失礼な言い方だが、軟体動物を髣髴^{ホウフツ}させる柔軟なウィルの身体。その矮^{ワイク}躯からは、微^{ゴウリキ}かの強力も感じ取れない。

だが、彼が左手に握る白刀^{テツシイ}《アルムート》が放つ斬撃はまさに、神の鉄槌^{テツシイ}の如き様相を呈した。

ギインと剣戟^{ケンゲキ}が響く。硬い刃と刃が、火花を散らせながら衝突する。

強襲時の掛け声こそ「ええいつ」と腑^{フヌ}抜けてはいたが、ウィルの眼光は、愛らしい容貌^{ヨウボウ}に似合わず鋭かった。

刃を内側から振り払うと共に、踏み込みの勢いを乗せた突撃に近い一撃が炸裂する。

その一撃はゴードンの巨体を大きく後退させた。

白昼、ウォーハンマーで破壊された入り口を逆行させる。壁を再

び壊しながらも、化け物を店外まで弾き飛ばした。

「っ、餓鬼！」

踏ん張りを利かせたゴードンは体勢を整え、腕力で強引にウィルの身体を衝き返した。

場所は町の表通りの中央付近。この広いエリアで身を飛ばされながらも、ウィルは宙を回転し、接地音も立てず華麗に着地した。

傍観に留まっていたクリフは、激突の瞬間、初見で敵の多くを見抜いた。

筋肉の緩急の付け方、反応から構えまでの一連の挙動、その他諸々。……敵が、完全なる素人だということを。

だがそれでも速く、そして強い。

己の筋力を僅かにしか生かせてはいないだろう。実戦経験の欠如から、動きの先読みも儘ならないはずである。

しかし敏捷を極めたウィルの動きに反応し、なお一撃を返したのだ。

ゴードンに与えられた《力》の大きさを、クリフは改めて実感した。冷淡な彼の顔も、流石に少々引き攣った。

そしてクリフは、アリサとクレアの腕を引き、彼女らの身を護りながら店の外へと足を踏み出した。

虫の知らせ、とでも言えば良いのだろうか。彼の背筋に、ヘドロのように重く粘る、不快な悪寒が走ったからである。

何故か、一筋の不安を抱いてしまったのだろう。全幅の信頼を寄せているはずのウィルに。その心境が端的に、彼の表情へと滲んで

いた。

「あの偽者——グラエムを抑えた餓鬼かあ。面白い。クリフォードを屠る前に、潰してやる！」

ゴードンの咆哮が大気を揺さぶる。

そして彼は右手に握った、紅い片刃の大剣を大きく振り被った。

「使えるんだ、魔具を。この俺があ！」

頭上にまで高らかと挙げられた豪腕が、ウィルの立つ方向を捉えた。

「って、わつ。ちょっとまってえ」

それを確認するとウィルは、慌てて地を蹴った。そして反時計回りに、ゴードンの周囲を旋回した。

彼の背後にはアリサ達の店がある。勿論、本人等も構えている。普段は周りに視点が向わないウィルも、流石に今回ばかりは慎重に事を運んでいるようだ。

ゴードンはゆとりを持ちながらも、半身を取って腕を振り下ろした。

高速で移動するウィルを目掛けて、直線的に放たれた一撃。紅い刃から発せられた焰は、町の表通りに沿って、勢いを増しながら突き進んだ。

けたたましい紅炎と共に、地を裂き、鋭い斬撃が疾走する。暗闇を吹き飛ばす紅い光が、一瞬リユーネの町を包み込んだ。

見かけは幻想的な輝きだった。だがその実は、酷く醜い。

そしてそれは、町を一拳に横断し、入り口付近の外壁へと衝突した。無論、轟音を伴った爆発と共に。

「ふひゃあ。……すごい。でもでも、そんなにあばれちゃ、だめっ！」

やはり領主は素人だ。ウィルの横の動きに、縦の一撃を狙うのだから。

無論、その一振りは大きく逸^ッれた。だがその余波が、ウィルの肌を少し焦がせた。

「僕ね。おじさん……きらい。おじさんはアリサ達をいじめるの。だから——」

軽い火傷を負った手の甲を擦^{サス}りながら、ウィルはやりわりと言を発した。だがその時既に、彼の表情と口調は急変していた。

普段の軽い仕草を棄て、彼は深く深く語った。大きく息を吐いた後、冷たく、小さな声で漏らした。

「——だから、ゆるしてあげないっ！」
始まった。

静寂の夜に、実体のない気流が吹き荒れた。漆黒の闇に、光る銀色の瞳が揺れ動いた。

そして場に、戦慄^{センリツ}が走った。

化け物と対峙する小さな少年は、両の腕をだらりと下げ、双刃の重みに身を任せた。

前傾姿勢を取り、そして……消えた。

ウィルの《攻め》の闘技は、純粹に、極限まで洗練された神速剣舞。

常人の眼にはその影すら映さず、二対の兇刃を振るい鮮やかに舞

う。地を、そして空を駆け、有象無象の区別無く対象を刻む。

それは――悪鬼の如し。

「く、はあっ？」

ゴードンが大きく体勢を傾けた。

眼前の子供が消えたと同時に、何故か己の視界が上空へと向けられた。

右方からの激しい衝撃。だがそれは、斬撃の類ではなかった。

「……柔いな。どうだ、温い銃撃の味は」

その先には、ヒルダの銃口を向けるクリフの姿があった。切迫した中でも平静を崩さず、嫌味を返しての発砲だ。

射出された弾丸がゴードンの右脚を貫いた……いや、引き裂いた。

先刻の銃撃とは比較にならぬ威力と速力を誇る一撃だった。

ヒルダの黒い銃身には奇怪な紋様が浮かび、その周囲には膨大な^{ボウダイ}量の魔力を漂わせていた。

クリフが放ったのは《刻印弾》だ。

通常弾とは明らかに異なる。弾丸そのものにもイングレイヴを施した、強力無比な破壊兵器である。

それは硬化したゴードンの筋肉を貫き、右脚をいとも容易く彼の身体から千切り離れた。

さして出血はない。有り余る筋肉が血管を圧迫しているからだろう。だが痛みは直接、彼の脳に響き渡ったようだ。

ゴードンの顔が驚きと共に歪み、その意識が散漫となった。

そして、片脚を落とされ動きの止まったゴードンには、追ってウィルの剣舞が襲い掛かった。

ウィルは軽快なステップと共に、体積が己の数倍はあろうゴードンの五体を斬り、刺し、刻む。——刻む、刻む。

黒と白の双刃が、それぞれ光と闇の軌道を描きながら、無数の閃影を生んだ。そして剣樹の如く、繰り出した乱撃が激しく踊る。

それは上下前後左右を問わず裂き荒れ、場には心地良い斬撃音が木霊した。

ウィルの柔らかい捌き^{サバ}が成す、鋭く精密な剣技乱舞。

一振り一振りが化け物の鋼製なる筋肉を破り、その度にどす黒い鮮血を辺りに打ちまけた^ツ。まるで噴水のように。

残酷なまでに華麗な剣舞が、炸裂した……

「そうじらんぶ。えつと、《やしゃ》……だっけ？」

最後に、なます切りにしたゴードンの身体へ、更に巨大な十字の刻印を与え、ウィルの剣技は幕を閉じる。

ウィルは足を止めた。不安そうな口振りで技の題を述べるウィルだが、やはりその表情は鋭かった。

そしてゴートンに背を向け、双刃を交差させて小さく決めポーズを取った。多量に撒き散^マらせた返り血を一滴も浴びず、彼は涼しい顔で息をふうと吐いた。

「ぐっ……あ……」

声にならぬ声を発するゴードン。だが、その強靱^{キョウジン}な肉体は流石だと言える。

裂かれた肉が尋常ならぬ速さで回復を見せている。骨が断たれようと、臓器が抉られようと、その傷は徐々に塞がる。

これだけの刃を浴びせられようと、未だ致命傷には至らぬのだから。

しかし効果は十二分にあつたようだ。肉体ではなく、精神へ。

恐怖という名の爪痕は大きく刻み込まれた。素人であろうと確実に理解できるだろう。……力の《格》の違いを。

快音響いたこの現場に、冷たい奇妙な静寂が流れ込んだ。沈黙が沈黙を呼び、周囲の皆が固唾^{カタス}を呑んでその光景を見守っていた。

もはや傍観者はアリサとクレアだけではない。単なる好奇心か、轟音に誘われたのか。多くのギャラリーがここに集結し始めていた。彼等は寝間着姿のまま、戦場から距離を置きながらも、その視線を一点に集中させていた。

無論、その顔には恐怖の色が漂う。

見たところ集まった者は、中層階級の者が大半を占めるようだ。

強者に虐げられる一方で、戸を硬く閉め自らの殻に籠^コもり、今まで多くから眼を逸らすことを公然と行ってきた連中である。更なる弱者を糧^{カデ}にして。

だが彼等は強要されることもなく、申し合わせもせず、漠然と足を運んだ。その行為が自らに、多大な危険を冒すだろうことを頭では理解しながらも。

シンクロニシティの一言では済まないだろう。葛藤^{カットゥ}が爆発したのか、悔^{カイ}俊^{シュン}の秘跡^{ヒトク}を請うたのか。

何れにしても、それは必然だった。

だがその人集りを目に、クリフの表情が曇った。そして、追い詰^{ツメ}められていたはずのゴードンが、不適な笑みを溢した……

第三話・諸刃の剣「4」

科学とは、芸術に近い。たった一人の天才的な閃きが、常識の多^{クツガエ}くを覆す。

特にこの《魔考学》においては、それが顕著に現れる。

積層された情報もなければ、下積みとしての知識も皆無に等しい。現代人の手に余る、禁断の領域だからである。

だが——研究、また研究。数多^{アマタ}の調査を繰り返し、古から知を搾^{シボ}り出す。

そして、得た情報を脳へ叩き込み、鍛練に鍛練を重ね、気が遠くなるほどの調整を延々と続け、膨大なる失敗を経て……初めて、無から実を生み出す。

研究室と名を呼ぶが、実質的な成果においては、室長一人の占める割合が恐ろしく大きい。

言い返せば、資料が如何に残されようとも、他の者ではその研究を再現することが不可能なのである。

それはこの《イングレイヴ》一つを取っても、他と同様のことが言えるだろう。

刻印の基礎原理そのものは模倣することが可能だ。だがその効力は、刻印者の知識や技術、経験や感性などにより大きく変化する。

魔術研究部の元室長、クレア・メラーズの施した《イングレイヴ

『は、もはや至上の逸品。例え不完全であろうと、身に刻めば絶大な力を及ぼすだろうことは瞭然である。』

そして邪念を纏う刻印は、その発動を更に強めた……

ゴードンの胸元から再度、黒い霧の様な魔力が放たれた。無論それは、生命を奪う魔性の霧だ。濃密な、ソウルイーターと化した瘴気が拡散した。

人々の間隙を縫うように、まるで意思を持つかのように、それはうねりを上げて蔓延する。

クリフの険しい表情の意味が、ゴードンの笑みの理由が、すぐに明らかとなった。ここは、良質な餌に満ち溢れているのだから。

彼等の不幸は、何かに誘われて場に足を運んだことだろうか。そもそも、この町に生まれ住んだことだろうか。それとも……

駆けつけた群集の、化け物に対する恐怖。つまり目に映る怪物への畏れは明確だった。

だが、それだけだ。実体を伴わない『死』という名の脅威は、静かに、淡々と、着実に彼等を蝕んでいった。

彼等の多くが、すぐ身体の異変に気が付いた。逃げる素振りすら見せぬまま、周囲に漂う霧に呆気を取られながら。

そして、それと同時に、意識を奪われ昏倒した。

これ以上近付かなければ、きっと大丈夫だ。と、そんな温いことを考えていたのだろう。

危険な悪鬼は、静観など一切許さぬとは知らずに……

何十人が取り込まれたか。辛うじて直撃を免れた者達も、幸いとは言いがたい。

事態を把握する頃には、身も心も絡め取る圧倒的な殺気に当てられ、叫ぶことも逃げることも適わず立ち竦んだ。

そんな憐れな状態で、彼等はただ死を待つだけだった。

当然その霧はウィルやクリフ達の下まで流れ着いた。だが彼等は己の魔力を解放し、内なる気を練ってそれを凌いだ。分散された霧状の魔力など、手練の前では無力に等しい。

しかしクリフは、一步も動けない。護るべき者が背後にいるから。

「性質が悪いな……」

裂かれた肉が、多量の泡を吐きながら修復されてゆく。その様を眺め、クリフが改めて愚痴を漏らした。

だが無理もない。ゴードンの身体は精力に溢れている。先刻ウィルが与えた無数の裂傷は元より、完全に両断させた脚部でさえ、見る見るうちに再生を始めているのだから。

クリフはヒルダの弾倉を入れ替えた。無論それには、計十発の刻印弾が装填されている。

そしてウィルも、再び双刃を強く握り締めた。

だが、どうにもウィルの調子が少々狂っていた。クリフはそれを即座に察知した。

「力が……^{ミナキ}漲る。チカラがアフレルっ」

ゴードンの変異が進む。それに伴い、発せられる言葉から、徐々に知性が失われていった。

より巨大に、より強大に、より頑強に。取り込まれた魔力が、純粹に、肉体強化のみに回される。

痛々しい軋み^{キシ}を挙げながら、筋肉が膨張を続ける。

その進化が、止まらない……

「きらい、きらいっ。それ、だいつきらい！」

感受性の強いウィルは、その魔性なる霧を極端に毛嫌いした。

パタリパタリと多くの人間が冷たい人形と化す。その時に生じた思念を、彼は敏感に受信したのかも知れない。

通常の戦闘時は常に冷静な彼も、半狂乱の状態で身体を大きく揺さぶった。

そしてウィルは、悲鳴とも取れる絶叫と共に、乱れた構えのまま突撃した。

「待て。頭を冷やせ——」

クリフの叫びが空しく響いた。

一直線にゴードンへと突き進んだウィルに、鋭い刃が狙いを定めた。

更に巨大化した化け物の、異常なる怪力が繰り出す危険な一振りだ。

まるで塵を払うかのように、軽々と下から突き上げられた蒼い剣。それはガツツと鈍い音を立てて、ウィルの身体に激突した。

カウンター気味の一撃だ。ウィルは双刃で、その軌道を多少は逸らせた。

しかし両者の刃が交差した瞬間、ウィルの剣は強引に、力押しで弾き返された。

ウィルが纏う衣類は、その全てが特殊な術式で補強されている。非常に軽い素材だが、時には恐ろしい硬さを誇る、最強の守りを成す。

だがそれでも、破裂するような衝撃が彼の全身を駆けた。

「うきゅっ……！」

ウィルの口から、気の抜けた音が零れた。

その声とは対照的に、激しい圧力を伴い、発生した氷塊がウィルの肢体に絡みつく。

少しずつ遠ざかるウィルと、ゴードンの振りぬいた刃の間には、凍てついた水蒸気がキラキラと輝いていた。

凡そ10メートル。ウィルは勢いよく吹き飛ばされた。宙で何とか勢いを殺しながらも、彼は弧を描き飛翔した。

そしてその後、民家の屋根を豪快に突き抜けていった。

大半の衝撃を吸収する彼の技量を持つてしても、全てを受け流すことは適わなかったようだ。

不意に貰ったとはいえ、それほどまでに強力な一振りだった。

痛快とも取れる激突音を響かせて、ウィルの華奢な身体キャシャが建造物に叩きつけられたわけだ。それは、惨憺サントウたる光景だといえよう。

普通ならば……

「ウィルちゃん（くん）っ！」「」

クリフの背後から同音質、同音程の二つの美声が響いた。

そして彼女等は勢い良くその場を飛び出そうとした。……が。直後、クリフに静止させられた。

「ウィルは問題ない。……お前達が勝手に動き回る方が問題だ」

尤もな話だが。まず彼女達がこの状況下で、その正気を保つていることを評価すべきだろうか。

保護を受けているとはいえ、多くの生命が奪われた地獄絵図の中。本来ならば、奇声悲鳴を上げて泣き叫んでいるところだ。

「クリ……フォードオオ！」

完全な化け物へと変態したゴードンが、その照準をクリフへと定めた。

品格の欠如した怒号。だがその声からは怨念とも呼べる、悍オソましい、憎悪に近い意思を感じた。

クリフ本人へ向けてというよりは、多くの強者達に向けて放たれた。ハンター全てを狙い当てた思念だろう。

刻印のエネルギー増幅に便乗して、その怨念も更に強固なものへと変貌している。

シンプルだが、深い。シンプルゆえに、強い。そして、激しい。

過去の鬱憤^{ウツブシ}を晴らすかの様に、咆哮^{ホウコウ}と共に止まらぬ暴力を撒き散らす。……なかなか危険なオーラだ。

直進的な突撃はやはり、恐ろしく迅い^{ハヤ}。筋力の増加に伴い、踏み込む速度も跳ね上がった。

ゴードンは顔に皺^{シワ}を寄せ——否。もはやその顔面は、例え顰め^{シカ}なくとも多くの筋目に覆^{オホ}われている。

その鬼の形相で、ドスドスと地面を陥没させながら、彼は脇目も振らず襲い掛かって来た。

「畜生に堕ちるか。得た《力》の代償……愚かな」

正面切つての突貫だ。射撃の的とならぬはずはない。

クリフは哀れみの言葉と共に、強力な刻印弾を敵に叩き込んだ。眩^{マバユ}くも虚ろな閃光が疾走した。

複数の弾丸が、ほぼ同時の銃声と共に放たれる。僅^{ワズ}かに位置のみをずらして。

一撃目は——ゴードンの頭部を掠め、その側面をこつそりと後方へ持ち去った。

無論、吹き飛ばされたのは、彼の頭蓋^{ズガイ}と脳髓^{ノウズイ}だ。

そして二発三発——四発と。それぞれ喉^{ノド}、心臓、下腹部へ突き刺さった。

醜い喘ぎと悶え。耳映い、えも言われぬ嗚咽が流れる。
肉を叩き、裂き、血液や臓物を打ちまける惨劇の中で、折り重なる気持ちの悪い呻きが木霊した。

——だが、止まらない。

絶対的に質量が巨大すぎる。そして修復が早すぎる。
つまり全てが、致命打には及ばない。再生の域を超え、復元にまで昇華された治癒力が、それを許さない。

「……つあああ！」

喉を潰され、その風穴から空気が漏れる。ゴードンは大きく体勢を崩しながらも、ごり押しで前進した。

距離を縮め、彼は移動できぬクリフを間合いに捉えた。そして猛撃が繰り出された。

型も構えも乱れた袈裟懸け。

その破壊力は、大容量の自重に加え、突撃の勢い加算した分、先刻のウィルへの一撃を遥かに上回るだろう。

刹那、空気が激しく振動した。そして、

——ギイン！

刃が肉体に、衣類に直撃したとは思えない、鋭く硬い衝突音を響かせた。

クリフは折り畳んだ腕でその刃を直に受け止めた。

そして再び、同様の音が鳴く。

対称に放たれた追撃も、クリフは翳^{カザ}した腕で静止させた。
そのか細い両腕で、左右から放たれた双刃を完全に抑えたのだ。

大気が揺さぶられ、接触部分を中心に波紋が広がる。その衝撃波が、激突^{シサ}の凄まじさを物語っていた。

ウィルと同仕様の装備。そして紺碧^{コンベキ}のロングコートの表面に、イングレイヴの刻印が浮かび上がる。

それにプラスして、クリフは体内で気を練り、己が肉体を鉄壁の強度へと変化させた。

脚力^{リョリョク}も膂力^{リョウリョク}も、大質量による突進を受け止め、ゴードンのそれを凌駕^{リョウカ}するまでに高められている。

「ふん。力の本質を解さぬ愚図。やはり、下衆は下衆だな。速かろうと、重かろうと、ただそれだけだ。……そろそろ、沈め」
暫^{シバ}しの均衡。

その後クリフは、鬼が振るう二対の刃を強引に払い除けた。
そして見上げて、背が己の倍はあろうゴードンに台詞を吐き棄てた。

圧倒的だった。だがクリフはまだ気付いてはいない。いや、薄々は感じていた。予想はしていた。

背後の異変に……

第三話・諸刃の剣「5」

ゴードンが頭を垂^{コウベ}れた。その腹部に、クリフの足底が減り込んだからだ。

圧倒的なクリフの剛力。しかし単純な腕力脚力のみで捻じ伏せたとは考えがたい。

これは、練気法によるものだ。

人体構造の解明が進まぬ現状の中、魔力と練気は、未だ明確な分類^レけがなされていない。

内に留めるか、魔具を通して体外に放出するか。概念としてはその程度の差と捉^{トラ}えられている。

ウィルのような驚異的に軽い身の熟^{コチ}し、柔らかい捌^{サバ}きを成す操気術を軽気、或いは柔気と呼び。クリフが得意とする、肉体を硬化すると同時に、臂^{リョリョク}力を飛躍的に高める術^{スベ}を鋼気、又は豪気と称す。

魔力共々、格闘における基礎中の基礎。それは戦い全ての基盤となる。だが極めれば奥義にまで昇華される戦闘術である。

装備に魔力を送りつつ、内で気を爆発させる。ことの仕組みは単純だが、実行するには相応の鍛練^{タンレン}を要す。

それを体現したのが、この一蹴だ。

ゴードンが纏^{マト}う衣類は既に、その膨れ上がった肉が引き裂いている。だが代わりに、垂れ流しの血潮が、鬼と化した彼の全身を包んでいた。

まるで悲鳴をあげた筋肉が泣き出すかのように。頭部を破壊され、意識を失いながらも奮い立たされている肉体の涙のように。全身を隈無く濡らしている。

強打の瞬間、鈍い打撃の音と、水面を弾くような澄んだ響きが鳴く。クリフのブーツが粘りのある黒い水滴に塗れた。

ゴードンは身体をくの字に折り、寸時、動きの全てを硬直させた。……その彼に間髪を入れず、再び蹴撃が突き刺さる。

横蹴りの直後に、軸を中心に身を左転させ、背面を見据えて繰り出した後ろ蹴り。

クリフは初撃と同位置に、鋼鉄をも砕く強烈な一発を叩き込んだ。

——速い。しかし傍観者の目には、瞬く一連の動きが、まるでスローモーションのように映った。時の流れを、遅く遅く感じたという。

凄まじい威圧が皆の思考を部分的に研ぎ澄まさせ、同時に知覚を鈍らせた。

進路を逆行するゴードンの巨体。クリフが地に足を着ける頃には、前進した距離と同等にまで、その身を後退させられていた。

そして容赦なく、弾雨の追い討ちが彼に迫る。

ゴードンが地に伏せるより先に、ヒルダを構えたクリフは、残弾の全てを彼に打ち込んだ。

仰向けに倒れたゴードン。修復したはずの肉が、またも崩れ落ちる。ピクピクと小刻みに痙攣し、彼の鼓動は沈黙した。

淡々と、まるで事務的に塵^{チリ}を処理するかの如く、クリフは平然とそれを遣^ヤって退けた。

「ウィル。……何時まで寝ている？」

一呼吸置き、クリフは遠方の瓦礫^{ガレキ}に向けて声を浴びせた。すると、先刻ウィルが突き抜けた民家の中から、彼がひょっこりと姿を現した。身体に付着した破片などを払いながら、やや困惑した顔で。

「だってえ、いたかったんだもん。けがしちゃ……ん？」
口を窄^{スボ}ませて、ぼそりと呟いた。しかし何かが、彼の台詞を妨げた。

小走りに近付いてくるウィルだが、その視線はクリフの背後に向けられていた。

「ね、ねえ。クリフ。これ……アリサが？」
ウィルが恐る恐る、その方向を指で示した。
見るより先に肌を感じ取った。クリフも、その犀利^{サイリ}な感覚が、事態の異様さを捉えていた。

「え？ う……あ……」

零れ落ちるような弱々しいアリサの声。

彼女の身に特異な変化が現れる。だが当の本人も、その状況を何ら解してはいない。驚く以前に、動揺がその思考を埋め尽くした。

胸元を中心に、夥^{オビタダ}しい魔力が迸^{ホトバシ}る。アリサの身体を宙に浮かすほどに。

そして輝く光が放散し、彼女の周囲を明るく照らした。アリサの

胸元に、イングレイヴに酷似した紋章が出現した。

アリサは手足をばたつかせるが、天を衝^ツく魔力が、高圧空気を噴出するかの如く、浮揚^{フヨウ}と同時に肉体の自由を奪う。

追って、アリサの位置を中心に、暴風のような衝撃波が放たれた。それは木製の家々を破壊するレベルの、場合によっては凶器にもなり得る代物だ。

だがそれとは対照的な、柔らかい光。無数の光の粒が風の影響を受けず、ふわりと軽く浮遊した。刻印が、絶えず光輝を放ち続けている。

純白の雪とも取れる美しい現象だが、塊の一つ一つが高純度のエネルギー体であることは、言及するまでもない。

魔力放出の勢いに耐え切れず、アリサの衣類が剥^ハげ、上半身の一部が露^{アラワ}となる。

だが彼女に、晒^{サラ}した肌を隠す素振りは見られない。捲^{メク}れたスカートを恥じる気配すら感じさせない。

もう意識が……ない。

「ダ、ダメよ。アリサちゃんっ。正気を保って！」

荒れる突風の中、クリフの背と腕を支えに、クレアが必死に声を張り上げた。

だがそう告げる彼女自身も、すでに正気を失い始めている。錯乱の様子が、普段のそれとは明らかに異なっている。

母親であると同時に、科学者でもあるクレア。娘の身に何が起きているのか、即座に理解したようだ。……その危険性も。

クリフでさえ、その場に立つことが困難な状況である。猛風が町中を駆け荒れている。莫大な魔力を帯びた飄風^{ヒョウフウ}。いや、魔力そのものの暴発だ。

イングレイヴや魔具の補助もなしに、これ程の魔力を放出し続けるなど、未だ嘗て^{カッ}先例がない。というより、理論上は不可能だ。

「危険だな。状況は、最悪だ。こつも容易く、箍^{タガ}が外れるとは……」
クリフは長髪とコートを靡^むかせ、冷静にそう漏らした。口調こそ比較的穏やかだが、彼の表情は台詞に準じて険しい。

暴風そのものが問題なのではない。放たれた魔力の性質、アリサの能力自体が今は危険なのである。

それに加え、アリサ自身への影響。クレアの切迫した表情を見れば――最悪の結末が何か、予想はできる。

クリフやウィルの装備、そして魔具達がその動力に呼应し始めた。光や風を受けると同時に、刻み込まれたイングレイヴが輝きを増して蠢^蠢き出す。まるで外部から命を吹き込まれ直したかのように。

言わばそれは、最上級の餌。それは至上の栄養源。イングレイヴの効果を高める波動だ。

これが何を意味するのか。

暴走が暴走を助長する。停止したはずの鼓動が、無情にも叩かれた。……鬼の、再動である。

もはや治癒などという生温い言葉は似つかわしくない。変異や進

化という単語ですら使うのを躊躇^{タメラ}う。

その全長は5メートルに達し、体重は計り知れない。今まで《鬼》と称していたが、もうその面影さえ見られない。

類似を挙げれば——大狸々（シヨウジヨウ）。飛び切り異常な。

やや前傾姿勢で、腕の先を地面に擦^スり付けている。腕も脚も首も、胸周りと同等にまで膨れ上がり、鈍い軋^{キシ}みと共に理不尽な変貌を遂げた。

口は純粹に大きく、左右に広く裂けている。唇は分厚い。歯は平べったく、唯一人間味を残していた。

瞳は相変わらず黄色い。ギョロリと、眼球の形がくつきりと見て取れる。鼻や耳はそれぞれが変異を繰り返し、原型を留めないほどに崩れてしまっている。

総合的に判断し、《化け物》の一言で済ますのが適切だろう。妖魔が可愛らしく見えてくる、そんな威圧満点の風貌だ。

その化け物が、巨大な右腕を無作為に振り払う。大通りを挟む複数の民家が、根元から抉^{エグ}り貫かれ、宙へと弾き飛ばされた。

それに加え、腕に接触した木片が粉碎と同時に燃え上がり、上空で消し炭と化した。

恐らく、魔具の能力を吸収している。

手に握られた双刃が、肉に圧迫されて碎かれ、その破片が体内へ取り込まれたからだだろう。無論、これも常識ではありえない現象だ。

泣き声という名の重低音が、振動という形で腹の底を衝く。化け物が移動する度に、逃げ遅れた人々が、ブチッブチッという不快

音と叫声を奏でながら押し潰される。

そして化け物は、小さな少年——ウィルに視点を合わせた。
ニヤリと口元を緩ませ、四つん這いになる。その後、突進した。

重量を微塵も感じさせない敏捷な動き。空高く構えた腕から、渾身の拳が振り下ろされる。

如何に動きが身軽だろうと、不合理にも拳は硬く重い。そして、激烈だ。

「うつ……うつ？」

ウィルは身を翻し、地へ垂直に叩きつけられた左腕を紙一重で避けた。

生じさせた地震など意にも介さず、化け物は大きな口から舌と涎を垂らせ、低い呻き上げる。

一撃により地盤は大きく歪み、拳の周りに巨大な陥没を発生させた。

そして破壊の中心部から、波状に連なった氷柱が次々に突き出す。氷塊は円形の窪みから溢れ、波及し広範囲を凍てつかせた。蒼剣の力が、殴打に乗せて放たれた。

パキキと鳴き、地中と空気中の水分が密集し、瞬時に鋭鋒を成す。

無数の氷柱が矛となり、ウィルの矮躯へ刺さる。透き通った蒼い氷が彼の衣類を破り、そのか細い肉体を紅く染め上げた。

周辺の民家は悉く凍結し、跡形もなく破碎する。多くの人間を巻き込んで。その様は、宛ら八寒地獄だ。

「……っ！」

幸い、致命傷には至らなかった。ウィルの装備も、アリサの影響を強く受けているからだろう。

それに、咄嗟トッサの回避能力の高さも窺ウカガい知れる。だが、激痛は抑えられない。

ウィルの顔から、余裕が消えた。

第三話・諸刃の剣「6」

化け物が地に突き刺さった拳を抜いた。そして風を浴びた柳のように、身体を揺らしながら脚を前へと進めた。

ゴードンが脚を一步踏み出す度に地は震え、体臭のように全身から放たれる魔力が空気を乱した。

じりじりと、一人と一匹の距離が詰まる。

「……………ふう」

小さな溜め息の後、黒刀 《クラウディア》が横一線に振るわれた。

すると同時に、ウィル周辺の無数の鋭い氷柱が、次々に、ピシィっという金切り音と共に打ち砕かれた。

そしてウィルもまた歩を先へと進める。口を嚙み、^{ツグ}落ち着き払いながら。

鮮血に染まる小さな身体。しかしウィル自身は、少しも損傷部を庇^{カバ}う素振りを見せなかった。

まるで何事も無かったかの如く。…………いや。むしろその足取りからは、先程以上の軽快さすら感じさせる。

オオオオオ…………

顔を天に向け、背を仰け反らせてゴードンが唸^{ウナ}りを上げた。冥府からの誘いの^{イザナ}ような、深く低い雄叫びだ。

だがこれは、威嚇^{イカク}ではない。巨大な化け物が眼前の小さな少年から、異様な《何か》を感じ取ったのだ。

——そう。理屈抜きの、怖気^{オシケ}を。それを振り払うように、本能が雄叫びを上げさせた。

そして、ゆるりとした動きから一変。咆哮^{ハウコウ}の後、ゴードンが前傾姿勢を取り、ウィル目掛けて猛進した。

ドス、ドス、ドス、と地面を窪^{クボ}ませながら、広い歩幅でウィルに急接近するゴードン。

そして腰を捻^{ヒネ}り、硬く握った右拳を大きく振り被った。

焰^{マト}を纏った剛腕。その鉄鎚^{テツツイ}が振り回された。

フック気味に放たれた拳は空を斬る。拳圧により、振りに合わせ地^{エテ}が抉れる。そして、追って放たれた炎の壁が周囲を焼き払った。

その一撃を前に、ウィルは――

「かわいそうな人。だって、《力》なんかよりも大切なものがあるのに。なんで……？」

声の出所が変わった。ウィルはゴードンの背後に回り、その肩に乗っていた。

燃え盛る炎の壁を貫いたにしては、あまりに外傷が少ない。炎の届かぬ空高くへ飛翔^{ヒシヨウ}したわけでもない。

そもそもウィルは、回避の動作を行ってはいない。

無拍子で瞬^{マタタ}く間に、その場へ足を下ろしていた。ウィルは目を閉じ、呼吸を整える。その後、徐に口を開き……言葉を紡いだ。

「でも、おじさんはもどれないね。その《力》は、おじさんには大
きすぎるの。もう、やめなよ。欲しがってた《大きな力》で――無
に、還してあげるからっ！」

再度、双刃を構えた。ゴードンの上で左右に腕を開き、刃を下へ
向けて垂らせる。

そしてゆつくりと、閉じていた左目を開き、足元の化け物を瞳に
捉えた。

しかしその様を、呆けたまま見過ごす化け物ではなかった。

ゴードンは即座に振り返り、宙に残されたウィルに、渾身コンシの力を
注いだ拳を向けた。

体の力を抜き背から地面に近付くウィルを、豪速な一撃が襲う。

だがそれは、再び空振りに終る。ゴードンの腕が伸びきる頃には
既に、その空間にウィルの姿はなかった。

ゴードンの左腕周辺と、拳の先数十メートルを覆い尽くす極寒の
冷氣。ウィルはそれを、微カスかも身に浴びずに回避した。

先程と同じだ。まるで空を貫いたかのように、地を蹴らずに、音
を立てずに、光の如き瞬動を見せたのだ。

そして無防備となったゴードンの背後から、突き刺すような圧力
が放たれた。ゴードンの身体を縦横に断つ、凶撃と共に。

腹部を中心として、地と垂直に、水平に、肉へ間隙カンゲキが生じる。

肉を裂くは、斬撃に乗った黒い波動。刹那セツナに十字を描くと同時に、
それは遙か彼方へと駆け抜けた。

四片に分割されたゴードンの肉体は、周囲に無数と浮かぶ魔力の

塊を吸収し、再生を始める——が、ウィルの緩やかにして激しい追撃が、復元を許さない。

「……ばいばい。かわいそうな、おばかさん！」

ウィルは溜めた息を言葉と共に吐き出す。そしてスッと、黒刀を前方へ突き立てた。

化け物の肉を裂く十字の中心に、切っ先を合わせた。

刃の周辺に浮かび上がる、立体的な文字の羅列^{ラレツ}。黒い魔力の渦^{ウス}を纏ったクラウドディアが、ゆらりと突き出された。

直後、空間が弾けた。

バチツという乾いた快音を帯びて、クラウドディアの切っ先を中心に黒い波紋が広がる。

その音は、その様は、静かな水面を激しく叩きつけるが如く。

地から湧き、螺旋を描くように舞い上がる闇の渦^{ラセン}。崩壊を始めていたゴードンの肉体が闇に蝕まれ、飲み込まれていった。

そして——

まるで、結界だ。

アリサの周囲を覆う魔力。一時の嵐こそは治まりつつあるが、凝縮された魔力は、地から天へと伸びる障壁と化した。

「ク、クリフちゃん。そんな、無茶よ。だって、あの子へ流れ込む魔力は無尽蔵なのよ？ 力で破るなんて、絶対に。でも……」
クレアの切羽詰った声が響く。焦りと不安、二種の感情が交じり合ったその表情は、あまりに痛々しい。

「少し、黙れ。集中が途切れる。時間が……いや。兎に角、お前は深呼吸でもして落ち着いた方が良い」

クレアからの忠告を軽く往なす。クリフは魔力障壁の前へ左手を翳し、目を閉じ意識を尖らせた。

「……くっ」

ゆつくりと障壁へ近付けた彼の左手に、電流が駆けつけた様な衝撃が走った。アリサの障壁が、クリフの魔力を拒んだのだ。

クリフの、表情の曇りが色濃くなった。何一つ魔術的な訓練ホドコを施されていない少女の、明らかな肉体的な疲弊を目にしたからである。

だが、それだけではない。

この無限に溢れ出す魔力が、もし破壊的なエネルギーに転換されたら——と、彼の脳裏に、残酷な描写が浮かび上がったからである。

「そうか。やはりアリサは、領主のイングレイヴに影響されていた訳ではないのだな。まったく」

「え？ え？ クリフちゃん。それは、どういう——」

クリフは目を開け、痺れの残る左手を握り締めた。そして、クリフの台詞に反応したクレアも、背後の《ソレ》の気配を察知した。

「あつ。くうっ……え？」

クレアが急に苦しみ始め、膝を地に落とした。彼女は胸を両手で押さえ蹲る。呼吸が乱れ、全身を小刻みに痙攣ケイレンさせていた。

無差別に放たれる殺気が肌を焼き付ける。足音が一步近付くことに、その殺意は強度を増す。

苦しむクレアを庇^{カバ}いつつ、クリフは背後に迫る脅威へ視線を向けた。

邪気の密度が、ゴードンのソレとは比較にならぬほど濃い。身体が動く度に、空気の流れに乗り黒い魔力が泳ぐ。

加え、左の白刀からは眩^{マバユ}いばかりの光が放たれている。神聖と言わんばかりの、穢^{ケガ}れなきオーラが溢れている。

闇と光、二種類の魔力が溶け合い、反発しあい、威圧を更に高める。

「二度、同じことを言わせるな。……何時まで寝ている？ ウイル」
「ふふふ。さっきのアレね、すぐに壊れちゃったの。あのさ、クリフ。僕と遊ぼうよぉ」

愛らしいはずの銀色の瞳が、今は気味悪く光る。クラウドディアとアルムートも、アリサからの魔力を吸い込み、本来の《力》を取り戻し始めている。

——戦鬼。そう、形容するのが適当だろう。その柔らかな口調とは裏腹、振りまく戦慄^{センリツ}は、神威に値する。

重苦しい緊張の中、クリフとウィルが対峙^{タイジ}した。

第三話・諸刃の剣「7」

間合い……

目に見えぬ互いの占有空間。疾^トうに両者はそれを踏み越えていた。

「……？」

ウィルが首を傾げた。

クリフが表情を変えないまま、右手に握るヒルダをホルスターに収めたからである。

「いいの？　ねえ、いいの？　遊べなくなっちゃうよ？　それでもいいの？」

それは無邪気な脅迫だった。

朗^{ホガ}らかな口調に見合わない、鋭い眼光。その瞳を覗けば、自ずと背筋が凍てつくだろう。

彼の冷酷な微笑みが、その不自然な様を更に強調させていた。

少しずつ、少しずつ、ウィルが狂う。何か、が発端となって。何か、に振り回されるかのように。

「ウィルですらこの様だ。アリサに正気を保てと言うのが酷な話しだったな。見事に当てられて。まったく、本当に……」

ふうと、クリフは例の如く溜め息を吐きつけた。

「へんなのお。まあ、いつかあ。後ろのそれは《龍紋》だね！　うわあ、楽しそあ……」

ブツブツと、互いが独言を述べる。特にウィルへは、クリフの言葉がまるで届いてはいない。

目に見えない、実体のない壁がそこにあった。

そして一頻り^{シキ}周囲を見回した後、ウィルは双刃を握り締めた。

「クリフ。……いくよっ！」

胸を張り、やや仰^ノけ反った形で構えたウィル。

そして掛け声と共に、彼は音もなくその姿を消した。ふわりと軽く。まるで霞^{カスミ}のように、まるで霧のように。

先刻幾度となく見せた、光の如き瞬動である。僅^{ワス}かの土煙すらその場には巻き起こっていない。

直後、ウィルはクリフの眼前に姿を現す。両の刃を振り被り、連なる斬撃を放つ体勢で。

「剣舞、羅せ——」

しかしその軌道を完全に見切っていたのか。顔面に狙いを定めた強烈な掌打が、乱撃の直前で放たれる。

静かだった空気の流れが突発的に乱れ、衝突部分を中心に気流が生じた。

「——つぶっ？」

元居た場所よりやや左前方へ身体を移していたクリフは、右腕を畳^{タタ}んだ状態で、その掌にウィルの鼻頭を捉えていた。

「そんな寝惚けた状態で、俺の相手が務まるとでも思ったのか？」
掌打の激震は身体の芯へと響いた。衝突の瞬間、ウィルの身体は場に留まり、瞬間的に揺さ振られた。

その後クリフの右手は、捉えた顔を驚^{ワシツカ}掴みにする。そして前方への体重移動に乗せて、ウィルの矮^{ワイク}軀を強引に突き放した。

「つつ……！」

無防備な状態で跳ね飛ばされたウィルは、全身を硬直させたまま数メートル押し返された。

その後くるりと後転し、^{アトスサ}後退りをしながらも地に足を着けた。

しかし脳へ伝わる衝撃のためか、やや足取りが頼りない。飛翔の勢いこそ殺したものの、よろけながら片膝を落とした。

そして鼻と唇に^{ニジ}滲む血をコート^{ヌゲ}の裾で拭う。

ウィルからは正真正銘の殺気が放たれている。
先程の衝突時も、クリフが攻撃に転じなければ確実に、彼の身体は斬り刻まれていただろう。

暫しの沈黙が、重い……

「いったいなあ。でも、やっぱクリフは——」

「ウィル、そろそろ目を覚ませ。二度目はない。次は……」

不満そうな顔で放ったウィルの台詞を、クリフの嘆声^{タシセイ}が妨げた。
それはまるで何かの警告のように、悲しくその場に響いた。

キョトンとしたウィルに、クリフは追って言葉を浴びせる。

「次はもう、避ける気はない。殺す覚悟があるのならば——来い」
気迫に溢れる台詞と、構えすら取らない無抵抗な身体。真剣な眼差しで彼は、ウィルの瞳の奥を見つめた。

「直接俺が手を下す必要はない。そうだろう？ ウイル」
柔らかな口調と共に、彼はゆっくりと前進を始めた。

ザッザッという靴擦れの音がウイルの耳に届く。それほどまでに場は静寂を極めた。

――否。傍観者の息、風の駆ける音。様々な音が反響していた。しかしクリフとウイル、両者の間には、他のただ一つの雑音すら響いてはいなかった。

後方で乱れるアリサの魔力と、地に伏せ威圧に苦しくクレアと。崩壊した多数の民家と、死傷した大勢の民と。

それら全てが頭の片隅へと追いやられるほどに、その一時、彼等は互いが互いを強く意識しあっていた。

「ねっ、ちよっ。ほんとにいいの？ きっちゃんだから。しんじやうんだから。ねえ、クリフってば？」

距離が縮まるにつれ、ウイルの顔に焦りが見え始めた。覇気もない、戦意もないクリフに、ウイルは完全に気圧されていた。

「良いか、悪いか。ウイル、それはお前自身で判断すれば良い。斬れば俺は死ぬ。解っているのならば、話は早いだろう？」

「しぬって。……え？ だって、僕。そんな。え？ なんで？」
ウイルの顔に動揺が広がる。追って、後退りが始まった。

ごくりと、圧迫に耐え切れずウイルは大きく息を呑み込む。しかしクリフは平然と、刃を構えるウイルに押し迫る。

クリフの投げ掛けはウイルに向けられているのに、同時に、ウイルとは別の方向を向いていた。

まるでウイルがこうなることを予想していたが如く、クリフの顔

には一点の曇りも見られなかった。

そして隔てる距離が無くなり、二人の身体が重なった。
ウィルの腕は震えている。今にも斬りかかりそうな、そんな強い衝動を何とか堪えている。内から滲み出した苦悶が、その表情に強く映し出されている。

「もうやだあ。もうやだ！ もうしらないんだからっ！」

叫声を伴い、混乱に拍車が掛かる。首を左右に振り、クリフと目を合わそうとしなかった。

そして接近を許したクリフを前に、ウィルは握り締めていた双刃を――

――地に突き刺した。

というより、刃が手から零れ落ちたと表現した方が妥当であろうか。

クリフの手がウィルの頭に触れた瞬間、その身体を硬直させていた緊張が緩んだのである。

それと同時に、不可解な殺意も彼方へと消え去っていた。

「クリフ？ あ……これ？ 僕……」

ウィルはよろけながら、前方のクリフへと凭れ掛った。

「もう大丈夫のようだな。良く、自力で持ち直した。……暫らく、休め」

身体を預けてきたウィルを支え、頭を軽く撫でながら語りかける。

その時クリフは、ふっと小さく安堵アンドンの息を吐いた。

「むう。なんかね、からだいたいなの。僕もう、だめえ……」
力の抜け落ちたその華奢キヤシャな身体。まるで人形のように、完全にその身をクリフへ預けている。

巨大な化け物を瞬時に屠ホフった時の面影など、僅かたりとも見て取れない。表情からも硬さは消えていた。

クリフの腹部へ押し当てた顔からは、緩やかな寝息が漏れた。

「む？ 血が……まったく。加減が下手なのに、無理に力を抑えようとすることになる。もし致命傷を負ったらどうするつもりだ。それに、こうも容易く暴走して——まあ、良いか」

紺碧コンベキのロングコートがベツタリと血潮に塗れていた。寝耳であるうことを承知の上で、クリフは溜め息と小言を漏らした。

「ふう。もう一人、問題児が残っていたな。……クレア。もう平気だろう？ 少しウィルを看カていて欲しい」

そこはかとなく表情に映る慨嘆ガイタン。やはり子供は何かと手が掛かると、そんな感情が滲み出ている。

「うつ、くつ……え？ あつと。え、ええ。分ったわ。クリフちゃんちゃんは早く、アリサちゃんを……」

クレアを締め付けていた圧力は、ウィルの睡眠と共に治まり、彼女は強烈なプレッシャーから解放された。——が、未だに呼吸は乱れ、全身から脂汗フキダを噴出していた。

クリフは腕に抱えたウィルを、地に横たわるクレアへ差し出す。そして再び表情を引き締め、方向を転換させた。

「悪いな。強硬手段に出させてもらう。これもお前のためだ。勝手を、許せ……」

クリフの視線の先には、意識を失いながらも魔力を放ち続けるアリサの姿があった。

彼は一度目を閉じ、憂い^{ウレ}顔でそう呟いた。

ウィルの安定化と共に、その暴走も沈静化しつつある。しかしそれでも、^{ホトバシ}進る魔力は並大抵のものではない。

そして——……

第三話・諸刃の剣「8」

登り始めた陽が、長い夜に終わりを告げた。

目に映る光景、耳に流れる音、そして鼻を刺激する匂い。それらは悉く凄惨を極める。コトコトセイサン

しかし肌に感じる風は、どこか清々しさを醸カモしていた。

激動は静寂へ、そして混乱へと移り変わる。

見る影も無い町並みと、数え切れぬ死傷者と。鮮烈を極めた人災に民は、ただただ呆けて口を噤ツグみ、追って到来する戦慄センリツに心を蝕まれた。

だが、空は澄スんでいた。皮肉なほどに。

「アリサちゃん……うう……」

高ぶった感情が、クレアの声を震わせていた。号泣と呼ぶに相応しい状態だった。彼女は鼻を噉ススり、腕に抱えたアリサを強く抱きしめた。

兎角、珍しい光景でもなかった。

先刻のリユーネでは《死》があまりに身近だった。四方から響く啼声テイセイは、止むことを知らない。

しかしクレアのそれは、明らかに他とは異なる様相を呈テイしていた。なぜならば……

「……大げさに泣くな。心を落ち着かせろと言ったはずだ」

腕にウィルを抱えたクリフは、ふうと溜め息を付く。

しかし呆れながらも、上半身が露になったアリサをロングコートで覆い、泣き止む気配を見せぬクレアを宥めた。

「だってえ。でも、良かったあ……」

クレアそれは、安堵アンドの声だった。

頭を過ぎった最悪の事態を免れた——その喜びの現われた。身体
の震えも、頬を伝う涙も、全て。

暴走した魔力は沈黙し、胸に浮かんだ紋様も姿を消した。今のアリサの寝顔は、実に穏やかなものだった。

当然、強力な魔力による、精神と肉体への負荷は避けられないが。

「しかし、困ったものだな。泊まる宿が、無くなったか」

この大惨事の中、彼は落ち着き払った一言を漏らす。

だがそれも事実。クリフが立つその場は、アリサ達が営んでいた宿の跡地だった。

ゴードンが放った焰と氷と衝撃波により、周辺の民家と共にそれは、跡形もなく消え去ったのだから。

「もう疲れた。これから、領主の館で休ませてもらう。……行くぞ、クレア」

「な……だって、そんな。町が、皆が……？」

クリフはクレアから強引に、眠り続けるアリサの身体を奪った。

そして彼は胸にウィルを、背にはアリサを抱え、何事もなかったが如くその場を離れた。

「……アリサの面倒を看なくても良いのか？ 単に、最悪の事態を回避したに過ぎない。放置しておくことは勧められないな」

「え、あ……ちよつ、待ってよ。クリフちゃん……！」

クリフの背中越しの台詞は、どこか虚しさ^{フビ}と侘しさを漂わせていた。無論、露骨にそれを表わす彼ではないが。

錯乱が頂点に達したクレアは、言われるがまま、クリフの後を追うこととなる。

無意識の中で、瓦礫^{ガレキ}の海から、屍山血河から目を逸^シらすかの如く。

皆が薄々感づいていた。

完結された小さな社会に訪れる、終わりの日を。目を瞑ってきた、耳を塞いできた、口を噤んできた——その代償が、降りかかる日を。

後に明らかとなる、犠牲者の数……百余名。この夜の出来事は、皆の心に深く刻まれることだろう。

歪んだ繁栄の清算にしては、あまりに惨^{ムゴ}い一夜だった……

第四話・結晶の淑女「0」

雲一つない、澄み切った青空。降り注ぐ日差しを切り裂く——乾いた銃声。

その女性は、腰まで達する深碧シンベキの長髪を、風に靡ナヒかせる。そして、深く吸い込まれるような蒼い瞳で、銃口を向けるクリフの顔を見つめていた。

「クリフ。あなたはまだ、多くの業を背負うのね……」
冷酷な微笑の裏に潜む、果てしない闘争心。そして、哀愁アイシュウ。

「セシル……」
クリフは口を噤ツグんだ。彼女の覇気ハキを、全て飲み込むかのように。

「可愛そうな人。なら私が、解放してあげるわ」
その声一つで、その視線一つで、彼への強い感情がひしひしと肌に伝わる。

「その苦しみの生に——終止符を打つことで！」
内へ溜めた想いが放たれる。彼女の鋭い決意が、言葉を纏マトいながらクリフを貫いた。

「セシル、すまない。俺は、お前のためには、死ねない……」
それは懺悔ザンゲとすら思わせる悲しい囁きササヤだった。
しかしクリフは、彼女から銃口を外す素振りを見せなかった。

穏やかな風を寄せ付けない、二人だけの空間。凜リンと張った空気が、二人だけの時を包み込んだ。

対峙する二人だけに許された、遅く過ぎる時間の流れを……

静止する情景の中で、一際輝く二人の懷中時計。金と銀と、異色同型のそれは、絶えず惹き合い反発する。

それは互いが胸に掲げ、互いに想いを通わす——契りの証だった。

第四話・結晶の淑女「1」

そこには幼い少女の姿が在った。

そして薄暗い空間の中、巨大な黒霧に包まれる二人が居た。

己の傍らで身を寄せる、長い金髪の小柄な少女。

その眩しい笑顔は、周囲の暗い闇を跳ね除けた。その姿はまるで、天使のように美しかった。

しかし……

抱き締めた少女は、腕の中で悶え始める。触れた柔肌は、多量の鮮血に塗れた。

抱き締めれば抱き締めるだけ苦しむ。だが引き離そうとしても、彼女はそれを拒んだ。

悲痛の中に、一握りの笑顔を残して。

見るに堪えなかった。辛さを押し殺す瞳を覗くだけで、胸が痛む。

心が……抉られる。

「もう、良い。俺に……近付くな」

彼女を想う一心で吐いた台詞だった。そう信じて発した言葉だった。

しかしそれを耳に、優しい顔は曇った。眩しい笑顔が、揺らいだ。

それは初めて見せた、悲しい表情だった……

「――！」

傷付く中でもその娘は、何かを伝えようと口を開く――が、その声は聞こえない。

「もう俺に、関わるな。もう、止めろ……」

そして彼女へも、搾^{シボ}り出した叫びは届かなかった。

徐々に身体が蝕^{オオ}まれる。

闇を真紅の血が覆い、己の視界を真っ赤に染め上げた。

抱き締めた肌越しに伝わる、弱りゆくその鼓動。腕の中で少しずつ、彼女が冷たくなるのを感じた。

それを胸に、頭の中で衝撃が走った。己の中で何かが音を立てて壊れ、追って悲しみの波紋が広がった。

懐^{フタロ}の《死》を、直に感じ取った。

しかしそこに。最後の最後に届けられた、掠れるような言葉があった。

それは死の狭間で彼女が紡いだ、残された者への祝福。

ただ――

「ありがとう、お兄ちゃん」と……

「ラナ、何故だ。俺は……」

華奢で小さな身体を、力の限り抱き締めた。

まるで走馬灯のように、彼女との思い出が己の脳内を巡った。

迫る喪失感と脱力感。膝は地に落ち、湧き上がる涙が頬を伝った。そして光は消え、そこには深い闇だけが残された――

普段よりも寝心地の良い布団。その中で、ゆっくりと彼の目蓋が
開かれた。

闇が上下に裂け、その隙間から眩い光が差し込んでくる。今日も、朝が訪れた。

普段よりも広く豪華な部屋は、天井も高く、圧迫感をまるで感じさせない。

最高品質の寝具で休んだはずなのだが、クリフの顔は優れなかった。

「夢……？ 夢、か」

小さく不安が零れる。無理もない。

全身を覆う、夥しい量の脂汗。オシタタ確認せずとも判る、悪いだらう己の顔色。

あまりに不快な目覚めだったのだから。

何より、今のこの体勢が、夢の中のイメージと見事に重なったこと。それが彼の不安を助長させた。

「くっ。今頃になって……」

仰向けに眠るクリフ……を、覆うように。彼の身体に重なり、ギョツと力強く抱きついて眠るウィルの姿が在った。

クリフは無意識の内に、ウィルの腰に腕を伸ばしていた。抱き抱えているようなこの体勢は、夢中の姿勢とあまりに似ている。

「そうか。昨日」

夢と現実が錯綜^{サクソウ}し、やや困惑するクリフ。だが徐々に頭が活性化し始めたようだ。

クリフは壁にかかる、ウィルの血で塗れた紺碧^{コンベキ}のロングコートを確認した。

それと共に、異様な悪夢の出所を納得した。

「ん……」

クリフの動きに合わせて、ウィルの口から寝言が漏れる。

彼はクリフの肩に顔を埋め^{ウス}、

「おんぶよりい……だっこがいいの……」

と、心の張りを一挙に和らげた。

しかしウィルの顔は台詞とは裏腹、どこか哀愁^{アイシユウ}を漂わせている。

理由あつてのことなのか、身体の締め付けが普段よりも強い。

だがクリフはウィルの寝顔を眺め、夢と現実の違いを再確認した。

そして、ふうと小さく、内に溜まった膿^{ウミ}を吐き出した。

「怪我は……問題ないか。まったく、手の掛かる」

半ば力ずくでウィルの身体を引き剥^ハがす。そして眠る彼の服を捲^{メク}り、その肌に手を触れた。

一晩で見事に癒えている。健やかな寝顔は、昨日の疲労をまったく感じさせない。

己の夢が杞憂だったと、クリフは自然と想いを口にしていた。

そしてウィル一人をベッドに残し、彼は静かに部屋を後にした。

コンコン――

クリフは向かいの扉を叩いた。

しかし彼はノックと同時に、その扉のノブに手を掛けていた。

無用心にも鍵を掛け忘れた扉を開ける。

するとそこには、クリフ等が宿泊した部屋と同等の、豪華な客室が広がっていた。

彼の視界に入る物。それは、大きな机、大きな椅子、大きな窓、大きなシャンデリア、大きな……贅の限りを尽くした、高級家具の数々だ。

しかし、それらの多くを知覚しつつも、クリフが意識しているは一点だけだった。

二人分の寝息が、小さく聞こえてくる。

ベッドに横たわり、健やかに眠る少女と。その隣に置かれた椅子に腰掛け、少女と重なるようにして転寝ウタタネをする女性の姿が在った。

重なっている分よく目立つ、双方の、赤茶色の頭髮。遠くから眺めるだけでも判る、瓜二つの顔立ち。アリサと、クレアである。

つかつかとクリフは、彼女らに向かって歩を進めた。

「クレア。……起きろ」

クリフが近付き、まず、クレアの耳元で囁いた。^{ササヤ}が、反応はない。次に彼は、うつ伏せで眠るクレアの頬を、指の先で軽くはたく。……が、返ってくるのは、言葉になっていない寝言だけである。

その精神年齢は別にしても、外見上は女性としての魅力に溢れる29歳、クレア・メラース。

彼女は、あまりに——無防備だった。

密着することで、彼女の懐かしい香りを身を感じる。当時と変わらない寝顔を、彼はまじまじと眺めた。暫らくの余韻^{ヨイン}に浸りながら。

まだ、明け方の寒さが肌に染みる。クリフは起こすのを諦め、そつとクレアの身体に手を掛けた。

腰とお尻を押さえ、彼女を抱え込む。そして隣のベッドへ運ばせた。

だが彼女を腕に抱え移動する途中、突如、クレアが目を開いた。「起きたか。アリサの様子も気になる。そろそ……？」

クリフは、間近に迫るクレアの目を覗き、意思の疎通を図った。しかし、その台詞はすぐに妨げられた。

「もう、クリフちゃん……恥かひがっちゃ、らめえれしょあ……」
間髪入れず、漏れた寝言。

目の焦点が合っていないのは真つ先に確認した。
だが寝言の内容が、クリフにとっては大問題だったらしい。

大昔の思い出が頭を過ぎった瞬間、ひくつと彼の顔が引き攣^ツった。

内容は兎も角にせよ。昨日の今日で、緊張感の欠片も感じさせない台詞だった。

だが、それは一つ、クリフの心配を解消する材料ともなった。

クレアを抱きながら、彼は横目でベッドに視線を流す。

アリサの顔は、血色が良い。呼吸も非常に安定している。昨夜に施した《処置》が成功した証である。

「む……？」

顔を逸らした後の、一瞬の気の緩みを狙われた。

長い歳月は彼に、クレアの寝起きの悪さを忘れさせたようだ。

「ほらあ、いつしよにい……おふる……」

寝ているとは思えないほどの、正確で強引な動き。

寝言を伴い、クリフの首を両腕で絡め取ったクレアは、そのまま彼の顔を己の胸元に押付けた。

豊満と呼べる、柔らかいクレアの乳房。当時との違いに、彼は一瞬^{タメラ}迷惑ってしまった。

そして体勢の崩れたクリフは、ベッドの上へ倒れこみ、クレアと身体を重ねる。

「……うん？」

どんと、背からベッドへ傾れこむ衝撃で、クレアの意識が戻った。

そして彼女は、寝惚^{マナコ}け眼で周囲を見回す。

「あ……れ？」

感触を確かめるため、彼女は己の胸元に手を運ぶ。追って、視線

もそちらの側に向かった。

寒さの中感じた、全身への優しい人肌の温もり。

しかし目に飛び込んでくるビジョンは、彼女にとって衝撃的なものだったらしい。

ベッドの上で四つん這いになり、自分に押し掛かる男性の図。更に自身はその男性を懐抱し、胸元にその顔を埋めさせている……

キヤーという叫声の後、クリフの身体は強引に引き剥がされた。そして、理由を述べる間もなく襲い掛かるクレアの平手を、彼は無言のまま甘んじて受け入れた。

「ク、クリフちゃん？　ちよつ、なに？　なんで？　ダメよ。そんな……エッチなこと。アリサちゃんの前で。そもそも、こんなのケダモノよ、ケダモノ！　ねえ、聞いてるの？　クリフちゃん！」

平手に続き、怒涛の言葉攻めが繰り広げられた。
寝惚けも相俟って、強烈な耳を衝く叫びが、部屋中に木霊した。

クレアは胸元を隠し、赤面しながら騒ぎ立てる。それを受けクリフは、ただただ、溜め息を付くだけだった。

この剣幕は、暫し治まりを見せなかった。

数分後、部屋に漸く普段の静けさが戻った。

「ご、ごめんなさい。私ったら、つい……」

クリフの頬を撫でて彼女は言った。くつきり残った手形を、申し訳なさそうに眺めながら。

「別に、気にする程のことでもあるまい。落ち着いたのならば、それで良い」

「ううん。ほっぺ、痛かったでしょう？ 本当に、ごめんね。クリフちゃんがケダモノなはずなのに。また、勘違いしちゃって」

半ば涙目の状態で、クレアは話を繰り返す。無論クリフの台詞は、この状態の彼女へは伝わらない。

「それで、アリサの容態は……良好のようだな」

こほんと咳き込み、クリフは話の主導権を握り返した。

「ええ。これも、クリフちゃんのおかげね」

クレアは立ち上がり、隣のベッドで眠るアリサに駆け寄った。

そして彼女の額に手を当てながら、しみじみと、クリフの言葉を身に染みこませた。

「あと半日も休めば回復するだろう。だが、今回は運が良かったに過ぎない。それを、忘れるな」

「ええ。クリフちゃんがこの娘を抑えてくれて、看てくれなかったら——私だけじゃ何もできなかったもの。本当に、ありがとう！」

クリフの忠告を胸に、クレアはにっこりと微笑みながらも、深々と頭を下げた。

「何度も言わせるな。アリサ暴走の副産物として、貴重な《結晶》も精製できた。礼など、要らな——」

淡々とした語りを止め、彼はクレアの口元を凝視した。

「いや。今、ここで。その礼を受け取るのも悪くはないな」

本気か、冗談か。惹き合うように、彼とクレアの顔が急接近する。

「……え？」

驚くクレアを無視し、手馴れた手つきで、優しく彼女の頬を愛撫した。その指はゆっくりと顔のラインを伝い、彼女の顎に添えられる。^{アゴ}

顎を上げさせ、顔を更に近付けた。クレアの身体は硬直し、小刻みに震えている。

吐息と、体温と。互いの唇と唇の間に、暖かい空気が流れる。己の鼓動すら感じ取られ、クレアの呼吸は激しく乱れた。

クリフは流れる動作で、彼女の首筋に腕を回し――

「もうっ！ だからっ、エッチなことはダメ！」

顔を突き放すと同時に、ポコッと、軽い拳がクリフの頭を襲う。だが逆に、予想通りの反応を前に、クリフからは余裕の笑みが零れた。

「ア、アリサちゃんの前じゃ……ダメって言ったのに」
台詞には動揺と混乱が残る。胸の高鳴りは治まってはいないらしい。

淡紅色に染まる頬を両手で覆い、クレアは慌てて身体^{ホテ}の熱りを抑えた。

そして彼女の頭は、お説教モードへと切り替わる。

「そう言えば、そうよ。昨日のだって、他のやり方もあったんじゃない。アリサちゃんだって、もう子供じゃないんだから。あの娘も女の子なのよ？ なのに……」

「治療だ、仕方があるまい。医学は俺の専門ではない。応急処置と

しては最善を尽くした」

クレアの勢いを、今回はさらりと流す。

「違うの！ 昨日のあんな、その。キ、キスとか……って、クリフちゃん。聞いてる？」

「……問題ないのならば、それで良い」
無理矢理、会話を打ち切った。

その後、クリフは再度アリサの様子をじっと眺めた。
そして、喚^{ワケ}き立てるクレアから逃げるように、彼は部屋を後にする。

外の騒めきを弾く、穏やかな日常がそこに流れていた……

第四話・結晶の淑女「2」

広いテーブルの上に置かれた、白銀の短剣 《エディト》。
クリフはじつと真顔で、その美しいフォルムの兵器と向き合っ
ていた。

逼迫した表情が焦りの程を示す。彼の額には、少量だが汗が滲
んでいる。

熟眠するウィルを横に、彼は姿勢を正し、
「放置したことは反省している。……そろそろ、機嫌を直せ」
独り、愛器へと語りかけた。

無論、エディトからの返答はありえない。
しかしクリフは僅かな間を置き、ふうと吐息を付く。露骨なま
での憂い顔を崩さずに。

「んん……」
微かな寝言が漏れた。それに伴い、ごそそとベッド上での寝返
りが、クリフの耳に入る。

「……世話のやける」
まったく言わんばかりにばやきながらも、小さく微笑む。
様子を眺めながら、ウィルの姿勢を正し、彼は再び机と向き合っ
た。

それから数十分……

穏やかな空間の中では、少々短さを感じさせる時ではある。

だがクリフは知覚の大半を注ぎ、愛器達の手入れを行った。

机上には分解の後、密に調整された黒い魔式銃 《ヒルダ》が置かれていた。

その隣には、丹念に磨き上げられたエディットの姿も在った。各々、優美な外形がより際立つ。

何かを掴んだのか、彼は納得した表情で、二種の兵器を再び腰へと戻した。

「……む？」

感触を確かめるクリフの眼が、窓の外へと向けられた。

それは平穏な流れを崩す、外部のざわめきが屋敷を包み込んだからである。

二階から見下ろす景色には、屋敷に群がる人溜まりが映っている。壊れた家々、乱れた町並みと相俟って、否応無しに不気味さを醸^{カモ}し出す。

「そろそろ……だと思っではいたが。切り替えの早いことだな」
クリフの呆れ顔は、後に起こるだろう紛糾を反映させていた。

屋敷の扉が開く。

クリフと対峙した市民は、凡そ30人程度。そこそこの年齢の者が多い。

彼等には、明らさまな失意の念は別に、主立って殺気を放つ気配はない。当然、武装の類も見て取れない。

内、代表と思わしき者が人海を掻き分け、クリフと対面した。

「あなたが、領主を討った方……ですね？」

恐る恐る、反応を確かめながら口を開いた。

その50代と思しき中年の男は、相応の品位を漂わせている。領主であるゴードンにも劣らぬ、それなりの聡さを感じさせる男である。

「だったら、どうする。探りは止め、目的だけを簡潔に述べろ」

クリフの威圧的な態度に、他の者達は響^{ザウ}めき、不安の色を露にする。

「失礼しました。私はリユーネの町、行政官のエドモンドと申します」

立ち居振る舞いから、品位が漂う。衣類の生地も、地味ではあるが上等な代物ではある。

明らかに、辺境育ちの人間ではない。

「それで、多くの者が目撃しております。あなた方は、例の《化物》から町を救ってくれた。そのお礼を述べに参っただけです。御気を悪くなさないで下さい」

「良く喋る。……目的だけを簡潔に述べろ、と言っただけだ」

エドモンドを名乗る男の、恐れを隠し発する言葉。それは見事に両断された。

「こ、これは手厳しい。他意はございません」

その男の表情は、落ち着いた台詞と反する。他の群集と同じく、小刻みに身体が震えていた。

「——いや。隠す必要などありませんね。単刀直入に申し上げましょう。ここにはおりませんが、昨夜の騒動で身内を亡くした者は少なくありません」

下方から見上げるその視線からは、あからさまな畏怖の念が滲む^{ニジ}。

「惨^台たらしい化け物を目の当たりにし、皆があなた方を恨むとは考え難い。ですが、それでも……怖い」

「だろうな」

「ですから、人を見に来ました。強力な力を持つあなた方に、我々には逆らう術がありません。ですが私は、私達は、名ばかりでも行政官です。現状、どれ程の犠牲者が出ていようと、町を護り続ける義務がある。ご理解は頂けないでしょうか……？」

遠回しで丁寧な口調とは裏腹、その眼光はある種の威圧を感じさせる。エドモンドの表情は切迫し、声も少しずつ荒げ始めた。

その、熱の込められた短い演説には、身振り手振りも加えられた。だがクリフの冷静な表情は、その様とはあまりにも対照的だった。

「下衆な傭兵と同列で括^{クワ}られる筋合いはないが、俺達は町を保護する盾にも矛にも成り得ない。……興味が無い。この町にも、あんた等にも」

その静かな台詞は、若干の覇気を帯びている。一睨みを添えて、クリフは返した。

「解りました。その答えで、十分です」
短い返答ではあったが、安堵と葛藤^{カットウ}、双方の色が見え隠れする。

「ところで、クレアさんと娘さんのご様子は如何ですか？ クレアさんに至っては、我々もすでにお亡くなりになられたと思い込んでいました。ご無事ならば、幸いです」

「何……？ いや。問題はない」

一つのキーワードが、クリフの鉄面皮を揺るがせた。

「そうですか。何よりです。……では今回は、失礼させていただきます。
まだ犠牲者の弔いも済んではおりませんので」

エドモンドは会釈と共に、連れを率いて後を去った。帰り際、他の多くが、不審の眼差しでクリフを見つめていた。

「ふん。行政官、か」

彼は独り佇んだ。^{タタス}掴み所のない余韻が、場に残された。

その後、何かを確かめるかのようにクリフは、ある場所へ一直線に足を運んでいた。

湿度が多く、陽の光は差し込まない。煌々（コウコウ）と焚かれた明かりが、唯一の灯りとして周囲を照らしている。

陰湿なここは、牢獄だ。

「クレアの研究レポートだけか」

独房という名の研究室。ここはクレアが拘束されていた、領主屋敷の地下室である。

その薄暗い場所で、クリフは保管されていた書類と向き合った。

「なるほど。人体へのイングレイヴ。その実験データのみ必要だったわけか。随分と、遠回しなやり口だ。……だが、周到か」

独り言と共に顔を顰める。^{シカ}

目的の代物以外は、物色した形跡も、荒らされた形跡もない。基礎となる資料や、他の実験器具など、辺境では恐ろしく貴重品であるそれらには、まるで手が付けられていない。

だが、価値の解らない人間の仕業ではない。

人体への処置が完了し、邪印を刻んだゴードンが消滅した。これは、その絶妙なタイミングで行われた。

「……愚かだな」

不快を口にする。

そして、手にした資料を机上に投げ捨て、クリフは地下室を後にした。

太陽が地と垂直に昇った頃、クリフとクレアの二人は、町の表通りへと足を運ばせていた。

眼に入り込む光景は、日常とは明らかに異なる。

活気は消え、大勢の人間が発する声、熱。それらの全てが、精力に欠ける。

異様とも呼べる悲愴な面持ちが、場の空気を圧迫した。

「わ、私の責任……？　こんな、こんな……」

視覚として飛び込んでくる衝撃。彼女は現実を、再び目の当たりにした。そして呆然とし、立ち竦んだ。^{スク}

「責任の有無は知らないが、軽率な行動ではあったな。しかし、護るべきは護れたのだ。良しとする他あるまい」

消し炭と化したクレアの店。だがそれも、今の彼女は眼中にないのだろう。

「止めておけ。人手は十分だろう」

考えを読んだのか、クリフは彼女の肩に手を添え、その動きを静止した。

死に近かった者は大概が息を引き取った。

精力を吸われた、或いは踏み潰された亡骸が、町の外れに運ばれて行く。

今、この場で行われているのは、治療ではなく単なる後処理だった。

「割り切れとは言わない。だが、気に病むだけ無駄だ」

「でも、私は……」

彼女は否定と共に、首を左右に激しく振った。

クリフは落ち着いて、ふうと息を吐いた。そして、錯乱気味のクレアと顔を合わせる。

「俺達にとって、肌で感じる眼前の死も、遙か遠くで行われる虐殺も、元を糺せば同質だ。科学に携わった^{タスサ}からには、諦めるしかあるまい」

どこか己を納得させるかのような、独言に近い台詞を投げ掛けた。

「そ、そんなの、よく解らないわ。でも——」

「何を想おうと自由ではある……しかし、己の身を護れない者に、他人の心配をする余裕があるとは思えないな」

彼は押付けるように、強引に言葉を被せた。それはまるで、心の柔らかい部分を付くが如く、鋭い口調だった。

「もう一泊の恩は返した。お前達はこれから、どうするつもりだ？」
「そんなこと……」

説得にしては、あまりに冷たい態度。当然クレアは、彼のその問いに答えられず俯く。^{ウツム}

暫らく無言のまま、しかしゆつくりと、眼に入る景色だけが後方へと去って行く。

二人は目的地も定めずに、ただただ、歩を前へ前へと進ませ始めた。

沈黙を引き摺りながら、二人は町の郊外まで歩き続けた。

町を覆う外壁も眼前に迫り、流石にこの辺りまで足を運ぶと、中心部の混乱は影を潜める。

表通り周辺以外は、中心部との距離に反比例して生活水準は低下する。連なる住宅も、老朽化が目立っている。

この町が《边境》に在ることを、否応無しに意識させられる光景と言える。だが、表通りの不自然な雑音はなく、互いの声は良く通る。

静かな空気がクレアの情緒を安定させるが、追って気まずさが、二人の間を隔て始める。

「ね、ねえ、クリフちゃん。私達は、何年もこの町で生活してたのだから無関係だなんて、絶対に思えないわ。解るでしょう？」

クレアは辺りを見回しながら、唐突に語り始めた。

「そうか。だが、町に愛着があるのなら尚のこと、真剣に身の振り方を考えるのだな。同じ過ちを繰り返さないことだ」

受容の欠如した応答だった。まるで、予め台詞の内容を予想していたが如く、クリフは即答した。

クリフの凜とした態度が、間接的な重圧となって彼女に押し掛かる。

「同じ過ち、かあ。厳しいな。やっぱり私、ダメだよな。ずっと忘れようとしてたけど、ずるいよね。自分だけ幸せになろうなんて」

クレアの足が止まる。

「勘違いするな。真に護りたいものが何か、良く考えてから行動するべきだと言っている。12年前の台詞、忘れたわけではあるまい」

「え？ う、うん」

フオーと呼べる台詞と態度ではない。クレアは落ち込んでいることも忘れ、あっけらかんとその言葉に聞き入った。

「そうよ。私は何があっても、アリサちゃんを幸せにしなきゃ！あの時と同じ。また、クリフちゃんに怒られちゃったね」

声のトーンが上がる。落ち込みとは違う色が、その表情を満たしていた。

「あつ、でもね。クリフちゃんって……」

「何だ……?」

彼女は隣で肩を並べるクリフを、観察するようにまじまじと見つめた。

「本当に、優しいね。うん。私、信じてるから!」

「……………」

浴びせられる厳しい台詞の中、何かを確信したかのように、彼女は辛さを廃した笑顔で言った。

「ところで、クリフちゃん。今日は何で、外へ? ウィルちゃん、あんなに落ち込んでたのに。一緒に居てあげなくてよかったの?」

複雑な表情で沈黙を返すクリフ。それを横に、切り替えの早い彼女は、心配そうな口調で語りかけた。

「……いや。反省する気があるのならば、少しは時間も必要だろう。独りで考えさせれば良い」

「そう。でも、あの子。どうして、あんな危ないことをしたの?」

「ううん。させたの? まだ、あんなに……」

傍から見れば、その様は一変してお節介な姉。クレアの口からは、考えの多くがすぐに漏れ出す。

「年齢は関係ない」

「だからって……!」

「そう、喚くな。あいつが進んで身を投じている。他人が口を挟む問題ではないだろう?」

クレアに身体を激しく揺さ振られ、困惑する。だが反論は絶やさない。

「違うわ。私には解らないけれど。でも、あの子にとって、クリフちゃんは他人じゃない。それに、甘やかすのと優しくするのは全然違うのよ？ あんな小さな子が独りで悩んだって、まだ答えなんて出せるはずないわ」

面倒そうに、抜け出すようにクリフは、足を前へと踏み出し始めた。

「一理はある。だが、独りの時間も必要だ」
そして、一言だけ台詞を置いて行く。

だが、もう片方の足音が聞こえないことに気付き、再び足を止めた。

振り返ると、半ば涙ぐんだ眼で、じっとクリフを凝視するクレアの姿が視覚に入る。これには流石のクリフも、たじろぐ。

「くつ。母娘揃って。解った。戻れば良いのだろうか？ ……もう散歩も、この話も終りだ。だが戻る前に、馬車の日程を確認する。行くぞ」

「へ？ 馬車？ 何で……？」
強引にクレアの手を引き、クリフは町の入り口を目指した。

その時だった。町の非常警報の鐘が響き渡ったのは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3453b/>

【Valiant】

2010年10月20日18時58分発行